感想集

春を待つ

著 村藤崎島

ARS

春を待ちつゝ

感想集

島崎藤村著

ARS

春を待ちつゝ

島崎藤村著

ARS

清水

つつち待を春

（感想集）

春を待ちつゝ

島崎藤村著

アルス刊

最近の小照

(飯倉片町にて)

山本薩夫氏撮影

晩小の近景

（イロハ順作倉）

山本薫丸熟

感想集　春を待ちつつ　目次

自然……二
愛……五
一茶の生涯……一一
芭蕉のこと……一三
トルストイの晩年……二六
ドストイエフスキイのこと……四二
大正十四年を迎へし時……四七
四つの問題……五四
生長と成熟……六五
前世紀を探求する心……七五

目次

反省……八六
フランシス・ジャムの言葉……八七
カアライルとホヰツトマン……八九
愚と惡……九二
有島武郎君のこと……九三
濕れる松明のごとく……九八
流行と不易……九九
淺瀨を奔り流るる水のごとく……一〇〇
滑稽の大きな力……一〇一
大暑……一〇二
都會……一〇四
二三の事實……一一
農民のために……一一〇
信濃の婦人……一一四
舊い學窓のこと……一一七
小屏風の言葉……一二六
戸川秋骨君著隨筆集『文鳥』の序……一二九
跫音……一四二
老年……一四六
言葉……一五二
創作……一五五
チエホフの『三人の姉妹』……一五六
ストリンドベルグの童話集……一五七
眞の人間を書くことに……一五八
思想と人物……一五九
秘密……一六〇

目次

『プウシキンこそ吾々の教師である』……一六一
先輩と考へて見ることによつて……一六三
才能を有するものはまた勇氣をも有する筈である……一六四
齋藤綠雨の言葉……一六七
口語と詩歌の一致について……一六八
吾國の象徴主義……一七〇
茶人の言葉……一七一
消極と積極……一七三
相聞の歌……一七五
『人形の家』を讀みて……一七六
眼醒めたものの悲しみ……一七九
透谷君の三十回忌に……一八一
身のまはりのこと……一八八

目次

太陽の言葉……一二二
必然性……一二七
美を積むもの……一二八
春を待ちつつ……一二九

感想集

同じ著者によりて

飯倉だより　飯倉片町にて（アルス）

春を待ちつゝ　同上（アルス）

佛蘭西だより　佛國巴里にて、上下二卷（新潮社）

淺草だより　淺草新片町にて（春陽堂）

裝幀　山本鼎氏

" It seems to me you have reached the same crisis which I had attained in the days when I was about to write Brand, and I am convinced that you, too, will know how to find the healing drug that can expel disease from your body. In energetic production lies an admirable cure."

From a letter of Henrik Ibsen.

自然

『花にも落日がある。』とはロダンの言葉であるとか。あのすぐれた彫刻家が、石膏や大理石を取扱ふことばかりでなくて、言葉の術にも長けて居たといふことは、實際不思議なくらゐだ。

同じロダンの言葉に、

『單に動物的なものから限りなく深い精神に充ちたものに至るまで、愛はあらゆる形相に於いて私には崇い。』

これは雜誌『大街道』に譯載されたエレン・ケエ女史の訪問錄の中に見つけた言葉である。ロダンはその言葉の後につゞけて、『そはすべては自然の手の中にあるから』と語つたといふ。

餘程の謙虛な心持で自然を見た人でなければ、斯ういふことは言へまい。自然の現はすものはすべて偉大と美とを持つて居ると言へるやうな人でなければ、單に動物的なものの中にも、限りなく深い精神に充ちたものの中にも、同じやうに崇い愛の形相を見出すやうなことは出來まい。その訪問錄の中には次のやうな言葉も出て居る。

『年若かつた時には、私は自然を支配し、匡正するのは藝術家の權能であると信じてゐました。といふのは、まだ自然を知らない時には、自然を匡正するのは自分の天賦であると信じがちなものですから。年をとるにつれて、私はますます熱情的に自然を愛するやうになり、また自然が正しさを持つてゐることがますます明かに見えて來ました。自然を會得しようと學ぶより他にはありません。私達が常により明かに自然を啓き現はさうといそしむ時に、私達はますます發見することが出來るのです。私達の眼が一度自然の無盡藏なことに開かれ、さうして自然をその眞理の中に再現しようとする他に努め求めるところがないならば、私達は私達の天賦の涸渴を怖れることはありません。美は在るのです。存在するもの一切の中にあるのです。』

佛蘭西の旅にある間、私はロダンの製作に接する多くの機會があつた。しかし私はあのセザンヌの繪畫に心を傾けて行つたと同じやうな親しみは持てなかつた。幾度かロダンに對する私の考へ方は變つた。そして、セザンヌの親しみ易く、ロダンの親しみ難いのは、やがて東洋人としての私達の性情を語るものであることを思つた。ロダンももう故人だ。私はこのエレン・ケエの訪問記などを讀んで見て、ロダンといふ人の深い自然の愛を一層よく知ることが出來、その制作を考へて見る上に一つの解を得たやうに思つた。ロダンにあつては姿態が思想を生むのであつて、思想が姿態を生むのではない、と言つたエレン・ケエの評も面白いと思つた。

いかにロダンが素朴な悅びを持ちつゞけた人であつたかは、左の談話の一節を見ても窺ひ知られるやうに思ふ。ロダンはエレン・ケエにむかつて、次のやうに語つて見せたといふことである。

『今日の人々は單純な事物に心をひかれるといふことが全然ないのです。』

愛

瓜哇の旅から歸つた際の加藤朝鳥君の土產話に、瓜哇人が一生の間に邂逅することのある婦人はおほよそ四人の區別があつて、それらの四人の婦人はそれぞれ相異なつた愛の對象となるべきものであるといふ。四人の婦人とは、左のごとき人達である。

一、崇拜するもの。
二、子を生むもの。
三、奴隷。
四、同じもの。

この土産話は、それからも私の記憶に殘つて居て、折にふれては自分の胸に浮んで來るし、氣の置けない客でもある時にはそれに就いて語り合つたこともある。

第一の崇拜するものとは、言葉をかへて言へば憧憬するものであらう。青年時代の愛の對象が必ずしもこの第一の婦人であるとは言へまいが、憧憬の情の多分に含まれて居ることは爭はれない。世には未完成のまゝで殘されて行く愛も多い。憧憬そのまゝで過ぎ行く人のことを書いた作物も澤山にある。子を生んだ人の生活に、別に崇拜するものが顯れて來ないともかぎらない。だからこの第一の婦人が必ずしも青年時代の愛の對象であるとも言ひかねる。

第二の婦人はこゝにことわるまでもない。

ノラは人形ではあつても、瓜哇人の言ふやうな奴隷ではなかつた。そこで第三の婦人は問題になつて來る。人形は結局奴隷の象徴ではないか、子を生むがためのみあるやうな婦人は結婚制度の奴隷ではないか、さういふことは無論考へられる。しかし瓜哇人が一生の間に邂逅することのあるといふ奴隷は、それとは別の場合であらう。飽くことを知らない性の結合は一對の夫婦をも驅つて、互ひの奴隷と化するに至るであらう。嫉妬もまた人を奴隷に變へるものである。愛の爭鬪、男女の間の失望、家庭生活の倦怠などから、やがて奴隷を求める心が生れて來る。この第三の婦人が、結婚した人の生涯にあらはれて來ることは、多くの作物がそれを證據立てて居る。世人はこんな第三の婦人を責める前に、何故に奴隷を求める心が生れて來るかを想はねばなるまい。

第四の同じものとは、自己に等しきものゝ意味であらう。『ロスメルの家』のレベッカは、あの主人公の前に告白して斯く言つて居る。

"It was love that was born in me. The great self-denying love that is content with life as we two have lived it together……

Rosmer. How do you account for what has happened to you?

Rebecca. It is the Rosmer view of life—or your view of life at any rate—that has infected my will.

Rosmer. Infected?

Rebecca. And made it sick, enslaved it to laws that had no power over me befor. You—life with you—has ennobled my mind."

斯うした二人の間に生れて來たものは、家庭の破壞と、生涯の破滅とに終つて居る。ロスメルの悲劇は、第四の婦人に邂逅しながら、しかもその愛を奈何ともすることの出來なかつたものゝ一つの例であらう。

スタンダアルの『愛』の中には、ドン・ファンの型と、エルテルの型との二つに分けて、男女の愛情を說いてある。ところが『エルテル』を書いたギョエテその人の情的生涯が普通に一種のドン・ファンのやうに想像されて、一生變ることない極めてプラトニツクな愛を持ちつづけたといふダンテに比較されて居るからおもしろい。

このギョエテに對して、もつと進んだ見方をした人にエレン・ケエがある。エレン・ケエに言はせると、ギョエテの愛には過去の一切のものに拘束せられるといふことがなかつた、彼は常に新しい愛を感じた、彼は常に新しい生命を見出した、彼の愛は晩年になつても新しかつた、この過去の一切のものに拘束せられなかつたところがギョエテの愛のすぐれたところであつて、單なる多情、單なる移り氣とは相違したものである、さういふ點で彼に似た人を求めるならば佛蘭西のジョオジ・ユサン夫人を數へることが出來ると。これは確かにギョエテに對する普通の見方を破つたものだ。あの『エルテル』を書き得た人は、その出發に於いて既にドン・ファンの出發とは餘程相違して居るとも言へる。

病後に、私は萬葉集をあけて見て、相聞の歌の多いのには今更のやうに驚かされた。萬葉時代の人におもしろく思ふことは、天皇でも皇子でも正直な相聞の歌を讀まれたことである。ありのままな心の形見を後世まで殘されたことである。

ケエベル博士の書いたものを讀んで居るうちに、人の生涯がおほよそ四期に分けてあるのを見た。人は少年期に於いて現實主義者であり、青年期に於いて理想主義者であり、中年期に於いて懷疑主義者であり、老年期に於いて神祕主義者であると。これを人の私生涯にあてはめて見ても、少年の愛情の單純に現實的であることがうなづかれる。

近代人の愛の傾向が靈肉の一致にあるとは、よく人の言ふことである。靜思を生活に移すことから、愛の實が結ばれる。結婚を度外に置いて、靈肉の一致はあり得ない。ホヰツトマンは性を重んじた詩人の一人であつて、それを直接に詩句の中に歌ひもしたが、その人の私生涯は獨身の中に過された。變愛論を書いたカアペンタアもその例に洩れない。人生の濁流に投ずる清い源泉とし子供のことを考へたと言はるるトルストイは奈何かといふに、その人の生涯は性慾の否定と、基督教的な禁欲說とに苦しみつゞけた。あれほど愛と結婚を力說し、子供の世紀を力說したエレン・ケエが、彼女自身に家庭の人でもなく、子供の母でもないといふは、なんといふ人生の皮肉だらう。見て來ると、近代人の生活は實に苦惱の多い、矛盾に滿されたもので、世にいふ靈肉の一致がさう安易に實現し得るものとも思はれない。

一茶の生涯

（一茶旅日記のために書いた序）

この一茶の旅日記が何處に發見されて、いかにして世に出るやうになつたかは、いづれ勝峰氏のくはしい紹介があらう。この翻刻本の校正その他はすべて勝峰氏の骨折によつて成つた。さういふ勝峰氏はさきに芭蕉の俳句定本を編んで、考證の精確さ嚴密さに、世にも稀な熱心を示した人である。この一茶の旅日記が一字一句の末まで、原本手記の面影を注意深く傳へてあることは、私がこに言ふまでもない。

一茶の晩年は名高い七番日記を通して既に世に知られて居るが、あの境地へ到達するまでの道筋のことは今日まで明かでなかつた。享和四年から文化五年まで、一茶の生涯で言つて見るなら四十

二歳から四十六歳まで、彼の中年時代の主な部分、從來多くの人が知らうとしても知り得なかつた彼の放浪時代の全く不明であつた部分が、およそ五年ばかりの間に亘つてここに親はれる。

この一茶の旅日記のやうに長いこと埋れて居たものが、よく失はれずにあつて、彼が歿してから百年近くになる今日に讀まれる日の來たといふは、その事がすでに私達の心をそゝる。これは江戸の假住居の侘しい行燈のかげなぞでその日その日に書かれたらしい心覺えの手帳で、人に見せるためのものとはその性質を異にする。全く、準備なしに讀めるとは、斯うした日記の謂だ。ここには貧しさも、侘しさも、拙なさも、掩ひ隱すところがない。けれども人としてよく知らるることは、なまじひ世に持てはやさるるにも勝つて古人の本懷とするところであらう。この日記の書きはじめにある享和の四年あたりは一茶の生涯に一時期を劃するほどの重要な時代であつたらしいこと、それを彼自身に革命の年と呼んで居ることなぞが、先づ私達の心をひく。

古大家の生涯に就いて考へて見ても、晩年にして達した人がいつの時代にもさう澤山にあつたとは思はれない。一茶はその稀な人の一人だ。その人の持つて居るあらゆるものが隈なく熟するやうになり、長い獨身の生活からも解放され、妻を惠まれ、子を惠まれ、豐かな詩の收獲を惠まれるまでに、五十年の年月を要したやうなのが一茶の生涯だ。この老年は尊い。私達が一茶に就いて知りたいと思ふことも、いかにしてその豐かな老年に達し得たかであつて、この一茶の旅日記の深い興味を覺えさせるのもそこにある。

寢る外に分別はなし花木槿

夕燕我には翌のあてはなき

何といふ窮迫だらう。『遊民遊民とかしこき人に叱られても、今更せんすべなく』といふやうな言葉が、これらの句の一つの前書きにも見える。鍋買、米買、暮の二十九日の『雨、味噌』などとしるしてある僅かな斷片的な言葉を通しても想像されるやうに、本所五ツ目あたりでの一茶の生活はいかに侘しいものだつたらう。こゝには『貧しさをもつて富めりとする』といふやうな超越は味はれない。在るものは、赤裸々な貧乏と、それを耐え忍ばうとする人の現實の苦しみと、『貧して分を知らざれば盜か、衰へて分を知らざれば病を受く』との反省と、『米高直なるが故に、薪高直なるが

春を待ちつつ

故に、玉をかしぎ、桂を焚く』としてあるやうなユウモアとである。

この窮迫の中で、一茶が一度故郷の柏原に歸つて行くくだりは、この日記の中でも最も私達の心を動かす頁の一つだ。故郷とは、人の少年時代の記憶のあるところに外ならない。『國に行かんとして心すすまず』と書いた一茶は、柏原の農夫を父とし三歳の時に迎へた一婦人を繼母としたといふその少年時代の記憶のあるところへ歸つて行かうとした。彼は腹ちがひの母子の苦い爭鬪を深刻に經驗した人の一人だ。日記で見ると、あの時の一茶は江戸から大宮へと取り、深谷、安中を經て峠に二日を費し、輕井澤から、上田、善光寺へと出て、都合九日もかかつて柏原に入つたとある。

雪の日や古郷人のぶあしらひ

夢寢にも忘れなかつた故郷の方で彼を待つて居たものは、こんな不機嫌なものであつた。

心から信濃の雪に降られけり

これらの句を讀むと、一茶その人の慟哭を聽く思ひをする。同時に彼の一生を支配したと言つてもいいほどの少年時代の深い影響を思はせられる。

一茶の句にあらはれた『ひがみ』の多い性癖が繼子としての彼の生ひ立に基くとは、多くの人の一致するところである。彼の小心、彼の遠慮深さ、『人心は山川よりも險しく天よりも知りがたし、天には春夏秋冬旦暮の期あり』と嘆息してあるやうな彼の不斷の心づかひ――これらは皆、不和な家庭の裡に知らず識らず養ひ來つた少年時代からの深い影響に相違なからう。彼の小心と遠慮深さとは、この日記にもあらはれて居るやうにいたいたしいほどのものだ。しかし、彼が多年の放浪生活の間にあつて一筋に自己の道を踏んで行つたといふのも、多くの時代の誘惑から自己を護り得たといふのも、その小心と遠慮深さとからではなかつたらうか。

詩人としての一茶を考へて見るものに取つては、彼と同時代に戯作者としての三馬、一九のやうな人があり、浮世畫師としての歌麿のやうな人があり、狂言作者としての鶴屋南北のやうな人があり、歌人としての千蔭のやうな人のあつたことを忘れてはなるまい。一茶がこの旅日記をつけた頃は江戸時代の文化が爛熟の絶頂に達したと言はるる所謂文化文政度の初期にあたる。その空氣の中に私達は信濃の水内地方から出て來たやうな一茶を置いて想像して見たい。この日記を讀んで行く

うちに私達は涙をさへ誘はれるやうな氣のして來るのは、たゞ彼が極度の窮乏に耐へ忍んで居たからといふばかりではない。無器用で、正直で、狹量で、多分の野性に富んで居て、彼自身の言葉を借りて言へば『江戸じまぬ』人の放浪生活が、當時にあつて奈何に不調和なものであつたかは、想像するに難くないやうな氣がする。

同じ德川時代とは言つても、一茶が吾國での十九世紀初期の詩人であると考へて見るところに、また別樣の趣が生じて來る。すべてものに近代の曙光のかがやきがあり、人の精神が發揚し、學問も藝術も一齊に歩調を揃へて進んだかと見える吾國での十七世紀に、詩の燈火を高くかゝげたやうなのが芭蕉だ。それに比べると、一茶の時代は社會の刺激からして異つて居たと思ふ。一方には蘭學の發達があり、一方には萬葉の研究、古語の研究と共に、古代詩歌の精神の復活があり、一方にはまた武士的新人としての賴山陽のやうな人が日本外史の稿を起しはじめて居る。歌麿の浮世繪を見ても知らるるやうなデカダンスの傾向はその間に濃く漂ひ流れて居る。何處に精神の統一が求められたらうと思はれるやうな時だ。すべてのものはその統一を欲して叫びを揚げて居たやうな時だ。こんな激しい時代の動搖と、爛熟し頽廢した社會の空氣とは、むしろ一個の多感な野蠻人を必要としたかと思ふ。またその野性なしに、一茶があれほど獨自の詩境を開拓することも困難であつたらうと思ふ。

一茶は詩歌の上で極度にまで自己を打ち建てて行つた詩人だ。彼ほど自己を中心として、『我』とか『己』とかの言葉を憚らず使用した人は俳諧の世界にもめづらしい。およそ詩歌の集で詩人の心の歴史でないものはない筈であるが、一茶の書き殘したものでは殊にそれが目立つて見える。この旅日記にあるかずかずの句は、詩歌の形式によつて書かれた自叙傳とも言ひたいものである。そこに詩人の強い執着が見える。

一茶は自然詩人であらうか。ある人は芭蕉すら人間本位の詩人であると言つて、純粹な意味での自然詩人は吾國に見出されないと說いた。その意味から言へば、一茶はもとより自然詩人とは呼びがたい。彼が創造した苦笑は、飽くまでも自己を中心としたもので、その底には一種の社會苦とも言ふべきものをすら潛ませて居る。この旅日記の隨所に散見する盜難、殺人、出火、男女の身投げ

などの記事は、所謂花鳥風月を友とする俳諧師の手帳には不似合なもので、おそらくその點で讀者に奇異な思ひを抱かせるであらう。けれども、詩人としての一茶の眼が絶えずさういふ社會的の事象にそゝがれて居たと想像するところに、私は特別の興味を覺える。そこに解を得ることも多い。

玉の盃底なきがごときといへど、色好むは人性にして、好まざるは獲麟よりも稀なり。あるは染殿の姫を思ひ、あるは物洗ふ女に迷ふ。やごとなき僧正、雲に住む仙人すら此一筋は踏み留めがたくやありけん。僧教導は佛道のいさほしも九十五近き身の戒を破りし罪となん、巷に面晒さる、よそ目さへいとほしく、にがにがしくぞはべる。

雪汁のかかる地びたに和尚顔

これは鎌倉圓覺寺の老僧が日本橋に晒された時に書いた一茶の日記の一節だ。『よそ目さへいとほしく、にがにがしくぞはべる』と言つたところに一茶の面目があらはれて居る。一茶の俳句に見逃しがたいと思ふことは、物の不釣合なところに寄せてある滑稽だ。そこから度はづれた感じを喚起する。これは英語でいふ Grotesque に近いものだらうか。芭蕉の心の深さを見せたやうなユウモ

アを味つた後で、この一茶の滑稽に接すると、一寸まごつくやうな心持をさへ起させる。これは一茶の創造した特有の美であり、他の持たないものを持つて居た證據だと解すべきであらう。

うつらうつら紙衣仲間に入りにけり
家もはや捨てたくなりぬ春霞
木つつきの死ねとて敲く柱かな
藪の蜂來ん世も我にあやかるな

これほどの深い嘆息がこの日記の中に泄してある。しかし、この日記は終の方に近づけば近づくほど、詩人としての心の澄んで行つた跡が見えて、それを辿つて見るのも樂しい。この日記なぞを讀んで見ても、吾國の遠い傳統ともいふべき纖細な寫實主義のいかに根深いものであるかを思ふ。一茶のやうな強い個性をもつた詩人なればこそその纖細な寫實主義を突過することが出來たのだとも思ふ。

筍や憎まれ草も伸支度

春を待ちつつ

旅日記一卷はこの憎まれ草の伸支度だ。萬苦を經て後に達したやうな人の長い準備の記錄だ。

ある人も言つたやうに、一茶は芭蕉のやうな大きな詩人ではないかも知れない。あの芭蕉に見るやうな純粋な心は、あるひは一茶には見出されないかも知れない。けれども、私達の煩惱を代表して居るやうな一茶の強い執着は、自己の欲するところを藝術にも生活にも實現せずには措かなかつた。その心は晩年に到るまですこしも衰へなかつた。芭蕉や蕪村に比べたら、一茶はずつと私達の時代に近い人だ。

五十にして冬籠りさへならぬなり

と一茶は正直に、冷い涙を見せて居る。

芭蕉のこと

芭蕉の生涯は旅人の生涯であつたばかりでなく、飄泊者の生涯であつた。『飄泊の思ひやまず、』と道の記の中に力強く書いてあつたと思ふ。芭蕉に行かうとするものは、あの言葉の光を捉へることを忘れてはなるまい。

やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲

この句は漂泊者の精神の光景を指摘して見せたやうで、何となく胸に迫る。

牧草を追ひ、住處を定めないで、曠野を飄泊するは露西亞人の運命であるといふことが、露西亞人自身の手によつて記されたのを讀んだことがある。私達の住む土地は、やがて私達の天性を造り出したのであらうか。半ば熱帶的な日光と、一年に一度はきまりでやつて來る霖雨と、さうでなくても多量な雨と、秋季の汎濫と、烈しい風と、強い濕氣と、休息することを知らないやうな地震と——斯う數へて來ると、私達の親しむ自然は無常迅速の思ひをそそらないものはない。深川の大火に逢つて、漂泊の思ひが一層強くなつたといふことは、芭蕉の書きのこしたものに見えるやうである。

芭蕉は精神上の旅人でもあつた。西行へも旅し、定家へも旅し、萬葉の諸歌人へも旅し、李白へも旅し、杜子美へも旅し、寒山へも旅した。漂泊に徹したこの詩人は、一歩は一歩より動搖の上に靜座する精神的の生活を創造して行つたやうに見える。

漂泊は芭蕉の心を活かした。それと同時に、芭蕉の肉身を傷めたものもまたその漂泊の生涯ではなかつたらうか。勝峰氏の芭蕉俳句定本によると、奥の細道の旅には百六十日を費し、その里程は六百里に上ると傳へてある。

旅癖や寢冷煩ふ秋の山

幻住庵での句とあるが、この旅癖の重なり重なつたものが、やがて大阪の道修町で病臥するやうに成つて行つたその下地ではなからうかと思ふ。

芭蕉は日常生活の細目に精通した詩人であつた。

海士の家は小海老にまじるいとどかな

芭蕉の句の細みといふものも、斯うした細目に精しいところから養はれて來て居るかに見える。さすがに芭蕉は囚はれて居なかつた。飽くまで日常の生活に立脚して、そこから立派な創作をつかみ出した。どうかすると象徴的な境地にまで句作を押し進めて行つた。それも理のあることだと思ふ。何故かなら、芭蕉は細かに日常の生活を味はつたばかりでなく、幻想を抱いた詩人であつたから。

あやめ草足に結はん草鞋の緒
よく見れば薺花さく垣ねかな
我がきぬに伏見の桃の雫せよ

芭蕉の感情の優しさが私達の心を捉える。その感情のやさしさは處女の持つもののそれに比べたいとさへ思はるるほどである。私は董其昌の描いた草木の優しさをもつて來て、よくそれを芭蕉の句に比べて見ることがある。

牡丹蕊ふかく分出る蜂の名殘かな
白げしにはねもぐ蝶の形見かな

これらの句は濃情の域を立ちこえて、センシュアスな香氣(臭氣?)を放つところまで行つてはいないだらうか。これを良寛に思ひ比べると、芭蕉はもつと感覺的で、そして複雜な感情の陰影を見せて居る。芭蕉の詩は、たましひの詩であるとは言つても、斯うした感覺的のものが色濃く露出して居て、どうかすると私達のセンスにまで迫つて來ることを見逃せない。

私は藝術上の感銘を言ひあらはす場合に、人格といふ言葉を避けたい。人格といふ言葉は批評の

行きどまりのやうな氣がしてならない。藝術は要するに人格だと大まかに言つてしまへば、それ以上、どうにも動きがとれないかと思ふ。これは芭蕉のことを言つて見る場合にも宛てはまる。

俳諧といふ言葉が、ユウモアもしくはユウモアのある文字と解していいだらうと思はれることは支考の十論などを讀んだ頃から、何時となく私には先入主なものとなつてしまつた。試みに貞徳あたりから創まつた滑稽文字に思ひ比べて見たまへ。俳諧といふ言葉一つにも蕉門の諸詩人は全く別の意味を賦與したかの趣がある。

あふみや玉志亭にして、納涼の佳興に瓜をもてなして、發句を請ふて曰く、句なきものは喰事あたはじ、と戯れければ、

初眞桑四つにや斷たん輪に切らん

この好いユウモアが、芭蕉の初期の作に散見するやうな淺い滑稽から深められて行つたかと思ふ

と、むしろ驚かれる。

芭蕉は、子供を注意して見よ、とその弟子に教へたといふ。芭蕉が子供の友達であつたことは、かずかずの句がそれを證據立てて居る。

雪の日に兎の皮の髭作れ

いざ子供走りありかん玉霰

これらはその著しいものであるが、よく見れば芭蕉の書いたものには溫い童心が溢れるばかりにある。

芭蕉が子供の友達であつたといふことは、一面に孤獨な生涯を送つた人であるといふことを語つて居る。

春を待ちつつ

良寛は老年になつて手毬をついて遊んだ。芭蕉は獨り居て水鶏笛なぞを吹いた。よほどの寂寞と孤獨とを經驗した人達でなければ手毬をついたり水鶏笛を吹いたり心を慰めるところまでは行くまい。又、その經驗もなかつたなら、あれほどの子供の友達にもなるまい。

しかし、孤獨であつた爲に天分を伸ばすことも出來、その離れた位置から人生の遠近を見透すことも出來、その寂しい境涯から暗い宇宙を探ることも出來たのは芭蕉だ。

おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな

寂しさに居た芭蕉は、その寂しさを主とし友とした。それほど孤獨に浸り切るほどの強さをもつた芭蕉は、實に涙の多い五十年の生涯を送つた。

蛸壺やはかなき夢を夏の月

手を打てば木魂に明る夏の月

月はあれど留守のやうなり須磨の夏

芭蕉の夏の句には名狀しがたいほどの心の深さを見せたのがある。そこには、現實と幻想との混淆がある。この世の深い空虛があらはされて居る。

季節といふものは俳句に重んぜられる。これは句作の適確を期する上から言つても、必要なことせられたのだらう。自然の季節は、やがて私達の心の季節でもある。肉體の季節でもある。

芭蕉の夏の句に特別な味があると言つたのも、その點だ。

水油なくて寢る夜や夏の月

夏の夜や崩れて明し冷し物

夏を恐れながら、なづんで居る人の心が斯うした短か夜の句に籠つて居ないと言へるだらうか。

春を待ちつつ

芭蕉の句作をしたのは、おもに天和から元祿へかけての四十代のことだと傳へられて居る。芭蕉の獨身といふことをヌキにして斯うした夏の句を考へられないやうな氣もする。

山蔭や身をやしなはん瓜畠

瓜つくる君があれなと夕すずみ

夕にも朝にもつかず瓜のはな

不思議にも、芭蕉の瓜の句には心をひかれる。その姿もすずしい。

ことしは私もめづらしく長煩ひして、そのために自分の枕もとで奥の細道だの幻住庵の記だのを人に讀んで貰つて、それを病床での何よりのなぐさめとしたこともあつた。私はまた自分の病床で

杜子美の詩集などに親しんで見る機會も多かつた。杜律集解の古びた本が自分の枕もとにあつた。それを繰返して見るうちに、あれだけ豐富な五言と七言との詩の中に、戀愛に關した詩一つ見當らないといふことには、私もすこし驚かされた。病氣がすこし快くなつた頃、高安君が見えた時に私はその話を持出して尋ねて見た。すると高安君が言ふには、それは支那の詩人だからだ、儒教の感化を受けた國の詩人は違ふからとの答であつた。そんなら、あの詩經はどうしたものだらう、と私が言出したので、高安君も大笑ひをしたことがあつた。

月夜

今夜鄜州月　閨中只獨看

遙憐小兒女　未解憶長安

香霧雲鬟濕　清輝玉臂寒

何時倚虛幌　雙照淚痕乾

これなぞは杜詩の中でもめづらしいものである。それすら妻子に寄せたものにとどまる。この詩

春を待ちつつ

につけて想ひ起すことは、私がまだ青年時代に杜詩を讀みはじめた頃、私は「遙憐小兒女、未解憶長安」の二句を見つけて、小兒女といふ言葉もそれを間違つた意味に解釋し、一圖にこれこそ杜子美の戀愛であると想像した。今になつて讀み返して見ると、あれは遠く離れて居る子供に寄せたものであることが分つた。

杜子美に對する芭蕉の愛は句作の上にもあらはれて居る。芭蕉が杜子美から受けた影響はかなり深いもののやうである。杜子美は一體どんな詩人であつたか。さう思つて見て來ると、あの支那の大きな詩人が一生苦しんだほどの底の知れない憂鬱は、芭蕉には見えないやうである。

花に遊ぶ虻なくらひそ友すずめ

斯うした自得の境地は、あの支那の詩人には見當らない。私達の心は浣花谿の村居まで行つて、僅かにあの杜子美の深い溜息に接する。杜子美は病身でもあり、「萬事干戈裏、空悲清夜徂」といふやうな時代の空氣の中に身を置いて、そのために一層生涯を艱難にしたからでもあらうが、悲みに悲み抜いて死んで行つたやうな詩人だ。しかし杜子美には唐時代あたりに生れた人とも思はれないほ

どの神經質がある。殆んど近代の人に見るやうなセンシチイヴなところがある。そこから浸み出して來て居るものが、芭蕉のやうな多感の人の上に深く働きかけたかと思はれる。

芭蕉には解りにくい句が多い。これには短い詩形の約束から來て居るものもあらうし、もう死んでしまつた言葉の不可解なところから來て居るものもあらうし、その他、種々な理由から來て居よう。芭蕉の句が説明でないのも、その解りにくい理由の一つであらう。私は自分に感知し得る程度にとどめて、解らない句を解らないなりに繰返して居る。でも、題詞を見つけた爲に、その句の浮んで來ることはよくある。

秋深き隣は何をする人ぞ

芝柏興行の題詞がなかつたら、またこれが自宅でなしに他の家で浮んで來た詩情といふことが分明でなかつたら、この句を詠じた時の人の位置はまことに動き易いものだ。題詞を省いてしまつ

て、古人の句集を編むといふことは始んど無意味な骨折りだ。その意味から言つても、芭蕉俳句定本のやうな好い新著を出した勝峰氏の骨折に對して感謝しなくてはならぬ。

芭蕉の句の解りにくいのは、結局、物を言ひ切つてしまはないところに落ちて行く。言ひ切るな、言ひ切るな、とは弟子に敎へた芭蕉の言葉としても殘つて居る。すつかり自己を語らうとするやうな人は話せないとまで言ひ放つたイブセンのやうな藝術家すらもある。芭蕉の句が解りにくいのみでなく、芭蕉その人が物を言ひ切つてしまはないやうな、まことに解りにくい人ではなかつたらうかと想像せられる。

私は病床にあつた頃、試みに芭蕉の句集の中から自分の最も好きな十句ばかり選んで見ようとした。枕の上で見て來ると、あれも捨てられない、これも捨てられないと思ふ句が眼について、どうにもその心を定めかねた。せめて百句ばかりを選んで見るとしたら、と思つたこともあつた。

何と言つても、芭蕉の旅情を直接に詠じたものには詩人としての特色が最もよくあらはれて居る。道の記に挿んである旅の句はみな好ましいものばかりだ。

あかあかと日は難面も秋の風

芭蕉のいふ『鍔元に切りこむ』とはこれだ。その切實な感じは直ちに私達に迫つて來る。

馬をさへながむる雪のあしたかな

旅人が旅人を眺めた心持は、この句などによくあらはれて居ると思ふ。

トルストイの晩年

眞に素朴なものを求むる心――トルストイに行く度に感ずるのはその心だ。

この私に取つて、内山賢次君の譯で讀んだ『ゴルキイの見たるトルストイ』は、アルツイバセフの感想集の中にある『トルストイの死』よりも遙かに私を悦ばせた。あのゴルキーの書いたものの中には、誰でも親しめるような年老いたトルストイが居て、何程私はあの回想を繰返し讀むことを樂みにしたか知れない。私はその中にいろいろな姿のトルストイを見出す。佛蘭西の小說家のやうに無造作に、多辨に、また露西亞の農夫のやうに鹽辛い粗野な言葉で、女に就いて語る彼をも見出す。樹蔭の腰掛に、ひどく痩せ細り、やや勞れて、鶏の聲に合せて口笛を吹きながら樂んで居る子供のやうな彼をも見出す。その全生涯の間、まつたく家もなく、あらゆる人と物から離れて、一つの僧院から他の僧院へと、また一つの聖者の遺跡から他の聖者の遺跡へと、杖を手にして幾千里をさすらひ行く巡禮者のやうな姿の彼をも見出す。

『君はアンデルセンの物語が好きかね。私は最初マアコ・ヴオフチョークの譯で出た時には分らなかつたが、十年ばかり後にその本を取つて讀み、突然彼が非常に――非常に孤獨だつたことがはつきりと分つた。私は彼の生涯に就いて知るところはないが、どうも不規律な生活をして、非常に旅行して歩いたやうに思はれる。しかしそれは彼が孤獨だつたといふ私の感じを確めるだけだ。またそのために彼は若い者に向つて語つたのだ。尤も子供が大人よりも餘計に人を憐むと思ふのは間違ひだがね。子供は何物をも憐みはしないよ。憐むといふことが奈何いふことだか知らないんだ。』

こんなことを考へ深さうに語り出す彼をも見出す。私はこの話を讀んだ時に、突然何かの急所に觸れる思ひをした。彼がアンデルセンに見つけたといふ非常な孤獨をさういふ彼自身にも見つける思ひをした。ゴルキイは彼のことを、大洋にのみ泳いで決して狹い海へは入つて來ない魚に譬へて

居る。彼の周圍には小魚がそこ〻に憩ひ、また彼方是方に飛んで居るが、彼が言ふことは彼等に興味を持たせないし、彼等に必要でもない。また彼の沈默は彼等を脅しも感動させもしない。しかし彼の沈默はこの世から驅逐された眞實の隱遁者のやうに強く印象を與へる。たとへ彼が多くを語つても、また義務であるかのやうにある問題に就いて語つても、彼の沈默は尙一層偉大に感じられる。さういふことがゴルキイの筆で傳へてある。『私は彼が鋭い眼――それは凡てのものを視通す眼であつた――それに絶えず空中から何かを模造しつ〻あるかのやうな彼の指の運動、彼の話、洒落、好んで用ひる百性言葉、その瓢簞鯰式の聲なぞを思出す。』とゴルキイは言つて居る。『そして私は如何に廣い人生がこの人の中に體現され、如何に彼が人間とは思はれないほど怜悧で、如何に恐しかつたかを思ふ。』とも言つて居る。あの回想の中にはまた次のやうな一節もある。

『私は曾て、恐らく誰も見たことのないやうな彼を見た。私は海岸に沿ふてガスブラの彼が許に赴く途中であつた。コスボフの邸裏の、岩間の砂上に、私は灰色の、皺苦茶になつた古服とへしつぶれた帽子を着けた彼の小柄な、角ばつた姿を見つけた。彼は頭を手にもたせて坐つてゐた。風は指の間から彼の銀色の髮を弄んでゐた。彼は遠く海を眺め入つてゐたのである。小さな緣がゝつた大浪は靜かに彼が足下へ押し寄せて來て、何か自分のことをこの老魔術者に告げるかのやうにその足に戯れた。晴れてはゐるが雲のある日で、雲の陰影は岩の上を渡つて行つた。岩と一所に老人の姿は明るくなつたり、暗くなつたりした。漂石は大きく、ひびが入つて、香ひ高い海草に蔽はれてゐた。恰度潮が滿ちてゐた。私には彼もまた生れて來た古い石で、物の始終を悉く辨へ、石や、地の草や、海の水や、小石より太陽に至るまでの全宇宙が何時、何んな風に終はりとなるかを考へる者のやうに思はれた。そして海は彼の雪の一部で、彼を圍る一切のものは彼から生じ、彼から出たのだ。老人の思ひ耽つた動かぬ姿に私は何か運命を定めるやうな、魔術的なものを感じた、何か彼の下にある暗黑の下に分け入つて、照明燈のやうに地上の青い空虛に展開するものを――恰も波を彼に引寄せ、突き放しつ〻あるものが、雲と陰影の運動を支配しつ〻あるものが、石に生命を與へつつあるものが、彼の集中された意志であるかのやうに。不意に、妄想の刹那に、私はこれが可能だと思つた……私はこの刹那に考へたといふよりも寧ろ感じたことを能く言葉に言ひ現はし得ない。

私の靈の中には歡喜と恐怖とがあつた。やがて一切が一つの樂しい考へに溶け合つてしまつた。「この人が生きてゐる限り俺はこの地上に孤兒(みなしご)でない」といふ。』

これが『少年』を書き、『青年』を書き、『コサックス』を書き、『アンナ・カレニナ』を書いた人の晩年の姿だ。

ゴルキイの回想を讀んで行くと、あのトルストイの鋭い串談や溜息を身に近く聽くやうな思ひをするばかりでなく、その手までをまざまざと私達の眼前に見るやうな思ひのするところがある。

『彼は不思議な手を有つてゐる――美しくはなく、脹れた血管でごつごつしてはゐるが、然し特異な表現力と創造力とに充ち滿ちてゐる。恐らくレオナルド・ダ・ヴインチはあんな手をしてゐたらう。ああいふ手があれば人は何事でも爲し得る。何うかすると、彼は話してゐる折などに、指を動かし、次第にそれを拳に握り締める、かと思ふと、下意にぱツと開きながら、優れた、どつしりした言葉を吐く。彼は神樣みた樣だ、上帝やオリンパス大神ではなく、「黃金の菩提樹の下、楓の座に坐したまふ」、大きくはないが、多分ほかのどの神樣よりもづるい露西亞の神樣の類だ。』

この手だ。長いトルストイの生涯を忍ぶにはこの手だけでも澤山だといふ氣がして來る。

ドストイエフスキイのこと

一人のドストイエフスキイに就いて見ても、實に文學者の評價といふものはまちまちだ。トルストイ以上の天才としてドストイエフスキイを揚げたアルツイバセフのやうな人もある。露西亞人はあまりドストイエフスキイに心醉し過ぎた、ドストイエフスキイを閉ぢてイプセンを開く時が來た、と言つたバリモントのやうな人もある。

メレヂコウスキイがドストイエフスキイの有力な辯護者であることは、あの『人及び藝術家としてのトルストイ』一卷を繙いたものの誰しもが思ふところであらう。トルストイを肉感の多い人とし、ドストイエフスキイを靈感の多い人として、この二人の傾向の一致に將來の露西亞の文藝復興があると說いたのはメレヂコウスキイだ。チエホフはドストイエフスキイに對しても好意を寄せて居た人のやうであるが、それでも彼一流の諧謔的な調子で、親しいものを呼びかける時の半分冗談のやうな口調で、ドストイエフスキイ的誇張などと戲れて見せて居るところもある。

ゴルキーがどんな風にドストイエフスキイを見て居たかは明かでない。あれほど虐げられたものの味方であつたやうなドストイエフスキイのことであるから、その書いたものは貧賤から身を起したゴルキイなどの同情を喚起しさうなものであるが、事實はその反對であつたやうに思はれるふしがある。

ここにトルストイのドストイエフスキイを評したといふ言葉がある。

『彼は非常に多くを感じたが、思索は貧弱だつた。彼が思索を敎はつたのはフーリエー主義者やブータチエキツチからだ。その後彼は一生の間、彼等を憎んだ。彼の血には何處か猶太人らしいところがあつた。彼は理由もなく猜疑心を募らせ、野心家で、重厚で、不幸だつた。彼がそんなに讀まれるといふのは不思議だ。私にはどういふ譯か分らん。凡て讀み辛い、無益のものぢやないか。何

故なら、あの白痴にせよ、青年にせよ、ラスコリニコオフにせよ、その他のものにせよ、悉く皆本物ぢやない。凡てもつと單純だつたらう、もつと理解し易いんだ。』

トルストイがあの同時代のドストイエフスキイに對してこんな意見を抱いて居たかと思ふと、すこし驚かされる。しかしこのトルストイの意見を傳へた人がゴルキイであるところを見ると、ゴルキーその人の意見なり氣持なりがおほよそ推測せられないでもない。

『一體、ドストイエフスキイはあまり大きく考へられ過ぎたのだ、』といふクロポトキンの評は比較的公平なものかも知れない。クロポトキンはその『露西亞文學に於ける現實性と理想性』の中で、ツルゲネエフやトルストイやチエホフを揚げて、藝術家としてのドストイエフスキイをそれほど重く見て居ない。『しかし彼が細民の描寫は露西亞文學の中にも稀に見るものだ』と言つた言葉もうなづかれる。

こんなにドストイエフスキイの評價はまちまちだ。露西亞人が露西亞人を見るにすらこの通りである。まして私達をや。それにつけても外國の文學者を評價することの容易でないのを思ふ。又、それほどまちまちな評價を受ける文學者としてのドストイエフスキイも不思議な存在であると思ふ。

ドストイエフスキイが晩年の日記の中には、詩人ネクラソフを悼んだ一節がある。その中に、あのプウシキンが當時のバイロン熱から脱却して行つたのは何の爲であつたかを言ひ、それが『民衆』の發見であつたことを言ひ、ネクラソフの詩の價値もそのプウシキンの歩いた道を更に押し進めて行つたところにあると論じて居る。あれにはドストイエフスキイ自身が多分に語つてある。思ふに、ドストイエフスキイは憐みに終始した人であつたらう。あれほど人間を憐んだ人も少なからう。その憐みの心があの宗教觀ともなり、忍苦の生涯ともなり、貧しく虐げられたものの描寫ともなり、『民衆の良心』への最後の道ともなつたのだらう。しかしその長所が、あれほどまた短所になつて居る人もめづらしい。あの人の感情家であることは、晩年の日記の中にも自白してあるくらゐだ。有り餘るほどの熱情は、知らず識らずの裡に一種の誇張を生み出したかと思ふ。靈と肉、聖と惡といふやうなことを作品の上であまり對比的に取扱ひ過ぎであるのも眼につく。今になつて見ると、ドストイエフスキイの書いたもので、いつまでも私達の心に殘るのは、あの人の力を入れた部分より

も、むしろ些細な挿話ともいふべきものの方にある。私達はあの大きな構圖を思ひ出さないで、反つてその中に隱れて居る小さな場面や、行き過ぎる人の影や、ふと見つけて置いたやうな部分部分としての光つた描寫を思出す。人の心を物の奥へと誘ふやうなあの幻想的な現實の斷面を思出す。

大正十四年を迎へし時

『一日として事なき日はなし』――それはゾラが座右の銘であつたとか。大正十三年を送つてまた新しい正月を迎へて見ると、過ぐる一年も隨分多事であつたといふ氣がする。大きな震災の影響が各自の生活に浸潤して來たことをわれひと共に深刻に經驗するやうになつたのも、過ぐる一年の間であつたと思ふ。日頃文筆にたづさはる私達としては直接に關係の深い出版界が未曾有の困難に際會したといふ事實から押して考へても、意外に深いこの震災の影響はおそらく出版界にのみはとゞまるまい。私は震災直後の破壞に面した當時にもまさつて、何となくうち沈んだ昨年の暮あたりの町の空氣の方に一層胸を打たるるものが多かつた。

昨年の夏のことであつた。私は一茶の旅日記のために序を書くつもりで、百年近くも世に知られなかつたといふ古人の遺稿を讀んで見た。時は文化文政度のはじめで、德川時代の文化が爛熟の頂點に達しかけたといふ頃にあたる。驚くことは、盜難、殺人、出火、男女の身投なぞの記事が、あの一茶の日記の隨所に見出された。一茶は五十年の長い逆境に居り、萬苦を經て後に達したやうな人であり、殊にあの日記は江戸の放浪時代に書かれたものであるといふから、所謂花鳥風月を友とする俳諧師の手帳には不似合なものを殘して行つたのかも知れない。それにしても、私はあの日記を讀んだ時に、古人の小心を笑へなかつた。過ぐる一年の間、私達の手にした新聞紙で、一日として殺人、强盜、官公吏の腐敗、男女の情死、其他驚くべく悲しむべき記事と物凄き文字との絶えた日があつたらうか。これはそもそも何を語るものだらう。大正の文化を誇る私達が現に經驗しつつあるものは、前世紀の昔に多感で正直な詩人が感じたと同じやうな社會苦ではなからうか。

新年早々こんなことを書きつける私の無作法を許して貰ひたい。どうか好い年を迎へたい、ほんとうに新しいといふ春を迎へたい、もつと靑い廣々とした空を見たい、そんな心持からついこんなことを書く氣になつた。旅人としての私が再び故國を見得る日を樂しみに遠く佛蘭西の方から歸つて來たのは、最早九年の前にあたる。幸か、不幸か、あの三年の外國の旅は私に巡禮者のやうな心を與へた。疑ひもなくそれは廣い世界を遍歷して來た旅行者の誰しもが經驗するやうなものに相違ない。その心は、自分の國を見るのにあだかも外國を見るやうな感じを抱かせるのである。さうした心持は次第に私から薄らいで行つたとはいへ、それでは私は今が今此世に生れて來たかのやうな初心らしさをもつて、半生の間見慣れた故國の事々物々に對することがよくあつた。その心持から、私は世界大戰後の平和回復を祝ふといふ晩に長い提灯行列を迎へようとして町に走り出でて見たし、米騷動の空氣の中にも立つて見たし、大正七年以來續きに續いたやうな激しい社會的の動搖の中にも立ちつくして見た。私は今この心持をさう簡單に言ひ盡すことが出來ない。それでも何となく自分の胸に纏まつて浮んで來るものはある。言つて見れば、あれほど改造と解放との聲の高かつたにも關らず、心から動いて居るものを見出すことの少い時代だといふことである。それを思ふとさびしい。

大正十四年を迎へし時

いつの代、いかなる時に生れ合せても、おそらく同時代に滿足するものはあるまい。そこから物を學ばうとする心も起つて來る。廣く世界に知識を求めようとする心も起つて來る。古代を探求し、未來を翹望するの念も起つて來る。そう思つて振返つて見ると、大正七年あたりから、大震災の前後へかけて私達の送つた月日は實に多事であつた。社會的に言つて問題の多かつたのも過ぐる六七年の間であつた。實際の學問が學者の書齋から街頭へと出て行つたやうな氣のするのもその間であつた。論客は雲のやうに起つて、雜誌に新聞に單行本に時代を批判した人は何程あつたか知れない。私はよくさう思つた。これほど物を敎へる人が澤山にあつて、しかも學ぶに難い時代といふものも珍らしいと。曾て私はその心持を言つて、

『斯くおもしろい時代が來て、一切の社會的生活が解放の途上にあるとしたら、私達がその時代から感受するものは實に何を見ても眼のさめるやうな爽かな朝の心地であらねばならない。ところが私達はそれと反對に、不安な月日を送りつづけた。より好き生活へと導く時代に面しながら、安い思ひも與へられないやうな矛盾に苦しむものは、おそらく私一人であるまいと思ふ。』

何といふ社會の空氣の暗さだつたらう。多くの人の心を掩ふ破壞と虛無との傾向、乃至は寂寞感、それらのものは重く垂れ下る雲のやうに、自分等の頭の上を通り過ぎたやうな氣もする。私は六七年の長い冬をその暗さの中に送りつづけたやうな氣もする。あるひは私達日本人の性情が極度の改變を敢てしたためしのないことを云つて、私達の眼前に生起しつつある幾多の現象はなしくづしの革命であると說いた人もある。この說の當つて居るや否やは別としても、政事に、產業に、敎育に、家庭に、部分部分としての改變の起つて來たことは爭はれない。實際、私達は容易ならぬ時代を步みつづけて來た。その六七年の長い冬から、單なる理論でなしに、事實に於ての社會苦を學んだ。これは當然私達の覺悟すべきものであることを學んだ。ただただ私達は、自分等の忍耐も、抑制も、これを來るべき春への準備のためのものと考へたい。眞に夜明けと言ひ得る時のために今日までの暗さがあると考へたい。到底私達は果しも無く續いて行くやうな冬の寂寞には堪へられない。私達の實際の不安は、その日その日の小康を求めるやうな心から起つて來るのではなくて、心から動いて居るものを自分等の周圍に見出すことの少いところから來る。曾て私はその心持をも次のやうに

言つて見たこともある。

『一頃やかましかつたデモクラシイの聲なぞも、私には同胞の内部を、其根底の冷靜を證據立てるやうには思はれてならない。もしもデモクラシイの深い基礎が民衆のインスピレエションであり、良心の至醇な聲であり、素朴なものの直覺力であるならば、こんなに早くその叫びが沈靜に歸するといふことはあるまいと思ふ。どうして私達はこんなに物に熱することが出來ないほど單純な心を持たないのか。ニイチェといひ、ベルグソンといひ、タゴオルといひ、ああいふ人達の仕事が恰度夏の夜の兩國の花火のやうに、皆の心の空に輝いた日もあつた。それと同じやうなあわただしさをもつて、今また社會的の問題が迎せられるならば、問題は唯問題として私達の前を流れ過ぎて行くことを氣遣ふ。極端から極端へと動く振子の波のやうに、今日の社會思想の傾向が反動の大勢を喚起することの無いとは奈何して言へよう。私はその反動がわれらの内にある好いものを護り育てて行くやうなものでなくて、狹い頑な保守的の思想であることを忘れる。』

私がこれを書いて朝日紙上に寄せたのは大正九年の前であつたと思ふ。大震災が來た。反動の大勢は果してその後に押寄せて來た。この反動は私達の内にある好いものを護り育てて行くやうなものだらうか。もし今日に狹い頑な保守的の思想が生れて來て居るとするなら、その責は誰が負ふのだらう。私達の時代の難さ。新しい正月を迎へて見て、つくづく私はそのことに想ひ當る。

四つの問題

一

北歐の批評家ブランデスはそのイブセン論の中で、時代の意識に於いて特に重要なるものは奈何なる問題と理想とであるやを尋ね、それを類集して左の四つに分けて居る。

第一、宗教に對して直接の關係に立つ理想と問題。卽ちあるものに取つては有形の力であり、あるものの眼には內部の力として映ずる諸觀念に對しての人の信仰上の關係。殊に、それらの力を外面的に考ふるものと、內部の現實として考ふるものとの間に起る爭ひに就ての諸種の理想と、諸種

の問題。

第二、二つの時代を分つ問題と理想。過去と未來、古代と近代、舊と新とのごとき。殊に、二つの時代の爭ひと差別とに就いて。

第三、社會の等級と生存競爭に關してのそれら。階級の差別——殊に富めるものと貧しきものとの間に於て——その社會的勢力の消長に就いてのそれら。

第四、男女兩性の間の差別を考察する問題と理想との一切を包むもの。男女相互の性的及び社會的の關係に就いて。殊に婦人の經濟的、道德的、及び精神的解放に就いて。

之をひきつづめて言へば、第一は宗教の問題、第二は新舊の時代の問題、第三は階級の問題、第四は性の問題である。これらはいづれもめづらしい問題ではない。今日の雜誌や新刊書を手にするほどのものなら、學窓を出たばかりのやうな女學生ですらこれらの問題に就いて語り合つて居る。それにも關らず、最近に私はブランデスの著書を手にして、十九世紀の諸家を論じた各章を讀み、曾てメレヂコウスキイの「人及び藝術家としてのトルストイ」を讀んだ時にもまさるほどの新たな

感激を覺え、殊にそのイブセン論の中で上記の四つの問題に觸れたくだりを讀んだ時は昨日の舊い問題が今日の新しい問題であることを思はずにゐられなかつた。私は古人の墓畔を訪ねる旅人が徘徊して去ることの出來ないやうな思ひで、あのイブセン論を讀んだ。言ふまでもなく、問題は唯問題として價値があるのではなくて、奈何にそれが取扱はれて居るかに價値があるのであらう。

ブランデスがあのイブセン論を書いたのは千八百八十三年で今から四十二年の前にあたる。これを自分等の國のことで言へば明治十六年あたりの昔に、北歐の方には既にさういふ問題と現想とに深く思ひを潜める人達が居て、それがあれほど確かな批評となり、時代を意識した聲ともなつて居るといふことには、一寸驚かれる。

二

ブランデスのいふ四つの問題と理想とを自分等の國のことにかけて、いかにそれが時代の意識に

上つて來たかを想ひ見るのも興味の深いことである。明治の青年で新島、内村、植村諸氏の言説に動かされないもののなかつたやうな一時代のあつたことを思へば、又透谷、樗牛、梁川諸氏の書き殘したもので何等かの形で宗教に觸れないもののないことを思へば、宗教の問題と理想とは早くも時代の意識に上つて來たと言へよう。青年としての私達がツルネエフの諸作に讀み耽つた當時のことも、つづいて私の胸に浮んで來る。父と子の問題、新舊の時代の問題は、それからも長いこと二つの時代を分つ爭ひとなつて、今日まで續いて來て居る。貧富の問題、階級の問題がこれほどやかましく言はれるやうになつた今日でも、性の問題はまだ淺い程度にしか一般の人の心に頭を持ちあげて居ないかにも思はれる。さう思つて見て來ると、北歐の方には四十年の昔に既に並びあつて、深刻な問題とせられた四つのものが、順に私達の時代の意識に上つて來たかの趣きもある。しかしこれを書いて居る私は今、そのことに長くとどまるまい。讀者と共にあのイブセン論へ行かう。

ブランデスに言はせると、宗教的な題目は當時の人達によつて種々樣々に取扱はれた。假令その取扱ひ方が近代の精神によることは言ふ迄もないとしても。彼のいふ第一の問題は先づそこから說

き出してある。彼は佛蘭西に於ける詩人の中で先進の時代の最大なるものとしてユウゴオを擧げ、自由思想の熱い傾向のあるにも拘はらず自然信教の殘存せる跡がその述作に見られることを言ひ、過ぐる世紀の影響のあることを指摘して居る。彼はユウゴオ以後の名高い佛蘭西の文學者の多數が科學的な冷さを以て常に暗い方面から宗教をあらはしたことを言ひ、それらの人達に從へば宗教は一種の幻覺に過ぎないことを言ひ、その一例としてクロオベエルを擧げて居る。彼は當時の英吉利の詩人の最大なるものとしてスキンバアンのことにも言及し、あの人の熱烈なる異端者であることを言ひ、基督教は自然を否定するとの見解を抱いたのもあの英吉利の詩人であると說いて居る。伊太利にはレオバルヂのやうな詩人があり、獨逸にはケルレル、ハイゼなどのやうな詩人がある。前者は超自然的な厭世主義に沒頭し、後者の多くは無神教的な人道主義をその述作に見せて居る。斯ういふことがあのイブセン論の中に出て來て居る。

そんなら北歐の方の場合はこれと比べてどんなに趣を異にするか。私達はブランデスのやうな人に連れられて、イブセンやビヨルンソンの鄕土を見たい。北歐に於ける近代の詩は、稀にしか宗教問題の客觀的な方面には觸れない。觸るるところは殆んどその主觀的な側に限られて居る。したがつて北歐の文學にあらはれて來るものも僧侶の形で描かれたものが非常に豐富にあるわけで、それは作者が因襲的な正教の固守から解放さるる以前にも、その以後にも見られることである。ビヨルソンやトレゼンの書いた農夫の話の中に出て來る僧侶なぞは解放以前の立ち場を示して居るし、キイランドやイブセンの書いた牧師なぞは解放以後の立ち場を示して居る。これが第一の問題に結びつけてブランデスの明かにして見せた北歐の事情である。

三

前世紀のこととは言つても北歐の文學者、殊にイブセンのやうな人が如何にこの四つの問題を取扱つたかは、近代の人の生活を考へるものに取つて多くの暗示を與へると思ふ。成程、イブセンには『ブランド』のやうな作もあるが、自己を犧牲にする力と性格の强さとにその特色を見ろべきであ

つて、何等の宗教の信條の建てられたいといふ作でもない。作者が『ブランド』で見て貰ひたいものは、ある彫刻家の場合にも、ある政治家の場合にも當嵌め得るやうな客觀性のものであるのに、それを宗教的に新しい主張のある作と見られては作者も迷惑であらう。結局、第一の宗教の問題に關しては、イプセンはそれほど深入りしなかつたといふことになる。

ブランデスのイプセン論を讀むと、その邊の消息がよく窺はれる。彼はイプセンの矛盾した性質を私達にひろげて見せて、一方には神秘的な傾向があるかと思へば、一方には鋭い乾いた常識的の傾向があることを言ひ、イプセンのやうに空想の多い詩人があれほど靜かに散文的な生活に耐へられたのもその故であることを言つて居る。おそらく彼のやうにイプセンの友達として長い親交のあつたものでなければ、あれほど遠慮のないことも言へまい。しかしその無遠慮から、彼は『ブランド』のやうな題材の選ばれたことを作者の無意識な力に歸し、その無意識な力こそイプセンの北歐的ロマンチツクな神秘主義の傾向であると信ずると言つて居るのもおもしろい。

ブランデスのいふ第二の問題、新舊の時代の關係に就いてはイプセンはどんな作を見せたらう。その方面の代表作としてブランデスは『青年結社』を擧げて居る。そして、この戯曲が若い時代に對する一つの諷刺であることを言ひ、それが非常に機智のある方法で書かれてあることを言ひ、同時に作者はこの作中にあらはれた若い時代の骨折りともいふべきものに對して何等の辯證をも與へて居ないことを言ひ、あのツルゲネフの『父と子』や『處女地』のやうな同情と理解とで新舊の時代を書き分けたものとは比較し難いことを言つて居る。

『イプセンの厭世觀が彼の同情を撥ねのけたのだ、』とはブランデスの評した言葉である。イプセンは時代の理想を捉へるのは巧な人であつたとはいへ、その筆は人生の虚僞と眞實とを示さうとする方に多く傾いて、二つの時代の爭ひに對してもその點にのみ作の焦點を求めようとはしなかつたのであらう。

一體イプセンはどういふ意味での社會劇の作者であつたらう。そこで第三の貧富の問題が奈何にその戯曲に取扱はれて居るかは私達の注意をひく。私はここで近代の詩人の多くが貧しく賤しいものに對する同情から出發したことを想つて見る。多數の人の苦しみが思想家の心を捉へたことをも

想つて見る。基督教の教へる德が憐愍であることをも想つて見る。しかし私はその一方に、憐愍の爲すなきを感知した人達のあることをも想つて見る。イブセンはその後者の例であらう。七十年の長い孤獨をつづけたイブセンが『ブランド』あたりから出發した心は先づこの世の虛僞を排することであつた。その眼は單なる多數といふことのために眩まされなかつた。『成程多數には力はあらう、しかし、眞理はどうか。』斯う疑つて見るほどの詩人が唯少數のものの友としてあつたことを想像するに難くない。そこにはイブセンの濃い厭世觀のあることを見逃せないやうな氣がする。

ブランデスのイブセン論には、作者はあまり第三の問題に觸れようとしなかつたことを述べて、『社會の柱』のやうな作のあることを簡單に言つて居るに過ぎない。社會劇の作者と言はるるイブセンが題材を階級の問題にも求めず、勞働の問題にも求めないで、むしろそれを第四の男女兩性の問題に求めたといふことは一見不思議なやうである。しかしそれは詩人としてのイブセンが追求の結果として當然到達すべき徑路であつたことは、その戲曲を注意して讀むものの等しくうなづくところであらうと思ふ。

四

社會組織の最も深い根柢を『性』にありと見たイブセンのやうな人から『人形の家』以後の諸作が生れて來たといふのも、決して偶然ではない。その點に於いて、經濟關係からのみ社會の組織を考察する他の人達とは區別せらるべき立場にある。そして、その點が明かにせられないかぎり、イブセンの諸作が正當に判斷されたとは言ひ難い。これは私の一家言ではない。一昨年の春以來私は病後の靜養のかたはらイブセンに關する數種の著述を讀む機會を得て、しばしばそのことに想ひ到つた。『人形の家』の作者が決して經濟關係をおろそかにして居なかつた證據には、あのノラの家出の動機を考へ合せて見ても分る。しかし作者はそれ以上に、人の營む有機的な生活を讀んだやうである。そこに新しい道德の芽の萠さるべき母體を見出したやうである。さういふ意味から、イブセンは社會劇の作者であり、その人の藝術が社會的であると言ひ得る。イブセンが男女兩性の問題と理

想とを捉へたといふのもその意味からであつて、戀愛を中心に男女の關係を描いた他の作家とは趣を異にして居る。同じやうに男女の三角關係を取扱つたものとはいへ、あの情緒を主にして獨逸の家庭の葛藤を描いたやうなハウプトマンの『寂しき人々』と、イブセンの『ロスメルの家』とを比べて見るなら、兩者の相違は思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

ブランデスが四つの問題を論じて最後の題目に入るあたりはあのイブセン論の中での樂しい頁の一つである。ブランデスの言ふところによると、婦人解放の思想は、その言葉の近代的な解し方から見て、イブセンの出發點には親しいものではなかつた。そればかりではない、もともとイブセンは婦人に對してそれほど多量な同情を有してゐなかつたといふ正反對なことさへ言ひ得られる人である。世には婦人に對して特種な親しみを持ち、その人自身の内に多分に女性的な要素に富む作家もある。イブセンはさういふ種類に屬する人ではなかつた。イブセンは婦人と語るよりも男子と語ることを遙に樂みとして居たやうで、詩人としての要求以上に婦人の社會に時を送るといふことは極少かつた人のやうである。あのジョン・スチュアアト・ミルの婦人問題に關する書物があらはれた時なぞも、イブセンは明かに嫌な顏をして居たらしくミルの書く物から何等の同情をも喚び起されたことはなかつたらしい。斯うした舊い友達の間柄でなければ言へないやうなことが、イブセンを して地下に苦い顏をさせるやうなことが、あのイブセン論の中にはつぎつぎに出て來て居る。

然し、この嫌惡はイブセンの側から見て、婦人問題に關する感情と全く連絡のないものではないことを說いて居るのもブランデスだ。彼はむしろ婦人問題に對するイブセンの最初の反對な態度を解して、半ばそれを敎育から受けた影響に歸し、半ばは戯畫の如き婦人解放の狀態から受けたいらいらした心持に歸し、そのイブセンの反對は後に熱烈なる粘着力と變ずべき運命のものであつたと考へたいと言つて居る。彼は又、イブセンの情感の世界に變化を持ちきたしたものの何であるかを言ひ、それを詩人の理性の力に歸し、曾て一度は冷淡なりし觀念に心のすべてを傾けて行つたところに、その觀念こそは時代の戰場の一なることを感知したところに、またその觀念に未來へかけての豐かな意味を讀み得たところに、まことの詩人らしさがあると言つて居る。

この稿の初めに、私は故人の墓畔を訪ねた旅人のやうな思ひであのイブセン論を讀んだと書いた。

私はその墓地に眠つて居る人が曾て歩いた時代のことを思ひ、そこに『人形の家』のことが出て來た、ここに『ブランド』のことが出て來たと獨りで言つて見て、その墓畔を徘徊する思ひをした。私は今ブランデスの云ふ四つの問題にかけて故人のことを考へて見たまでである。一概にそれをイプセンの主張したものとして、その藝術にまで押し付けるやうな考へは毛頭ない。

『自分は世間の人が思ふやうな社會的哲學者ではない。自分はもつと詩人であるつもりだ。』

といふイプセンの聲がその墓地から聞えて來るやうな氣もする。

生長と成熟

一

震災前の南葵文庫に德川時代の小說本の展覽會の催されたことがあつた。元祿以前の古い物語り本から、文化文政以後の人情本、幼い子供のためのお伽草紙の類まで、時代を追つてそこに陳列してあつた。そのいづれもが今日では容易に手に入りがたいやうな原版のままのもので、本の形の大きさに、紙質に、裝幀に、挿畫におのづから時の推移を語るものがあつた。あの古本のおほくは、帝國大學圖書館の所藏にかかるといふ話しであつたから、震災當時の大火と共にそれらの大部分は

春を待ちつつ
燒失したかと思ふ。

私はある友人と二人であの展覽會へ出掛けた。あそこに西鶴の本があつた、こゝに馬琴や三馬や京傳の本があつたといつて、南葵文庫の樓上を見てまはつた。私達は、遠い中世の影響からまだいくらも脫けきらないやうな古めかしい物語本の並べてある前にも立つて見た。西鶴のものとなると、その本の手觸りからして違ふ。さすがにそのころのものは、本としての形も大きく、紙質も好く、文字もあざやかに、挿畫も古雅で、どこかに元祿らしい手厚さがある。そのかはり讀者の範圍もおほよそかぎられてゐたらしく、あの『五人女』なぞがおほくの人の手に行き渡つたものとは思はれない。元祿のころと文化文政度とでは小說本の版の大きさからして相違して見える。文化文政度にはそれほど大版のものが見あたらない。裝幀もさまざまに變つて行つてゐる。所謂黃表紙の多くは、今日にいふ普及版の感じに近いかと思ふ。その中にあつて木版本の復興を思はせるやうなものには、

馬琴の『八犬傳』と秋成の『雨月物語』などがあつた。大體に言つて、徳川時代の末期に近づけば近づくほど、小說書類の形もずつと小さくなり、文字もこまかく、紙質も惡しく、版畫も粗末に、一切が次第に手薄になつていつてゐる。そのかはり讀まれた範圍のずつと擴大されて行つたこともまた想像せられる。私達は、自分等の少年時代までは小母達の枕もとにもまだ殘つてゐたやうな『田舍源氏』やその他の草雙紙の並べてある前にも立つて見た。試みにそのころの人情本や、敵打ちの物語りや、怪談物や、洒落本なぞを見渡すと、怪奇なものはいよいよ怪奇に、纖細なものはいよいよ纖細に、尖つた神經質と世紀末的な機智とが淫靡で頽廢した色彩に混じ合つて、ひたすら讀者の意を迎へようとしてゐるかに見える。徳川時代も末になれば、あの西鶴の頃のものに見るやうなさかんな氣象は感じられない。そこに陳列してあつたかずかずの小說書類を通しても、何となく徳川時代の全景を見る思ひのしたのはあの展覽會であつた。

春を待ちつつ

徳川時代が元祿の生長期のはじめに達する迄には八十五年もかかつた。文化文政度の成熟期のはじめに達するまでには更に百十六年もかゝつた。こんなことをここに書きつけて見たいと思ふのは、理由のないことではない。ある人達のいふやうに、假りに今日の人の心が緩み風紀がおそろしく廢れて來てゐるとしても、明治にはじまつた新しい時代が五十年や六十年で大正の今日に行き詰つてしまつたとは考へたくない。今を世の末とは思ひもよらない。矢張私達は『若い日本』として今の時代をながめたいと思ふ。

二

世紀より世紀へと動く人の創造にも、おのづから生長期と成熟期とがある。すべてのものに近代の曙光のかゞやきがあり、人の精神が發揚し、學問も藝術も一齊に歩調を揃へて進んだかと見えるやうな元祿の頃を思ひ、更に徳川時代の文化が爛熟の絶頂にあつたと言はるる文化文政度のころに思ひくらべると、それぞれの時代を文學の上に代表する人達の上にもそれらの特色を見得るやうな氣がする。私はまた遠い萬葉の時代と、古今新古今の時代とを思ひくらべて、一方をわれらが祖先の創造の生長期に、一方を成熟期に譬へて見たい氣がする。

人の創造の生長期とは何であらう。そこには時代を導く情熱がある。撓まず屈せざる心の革新がある。因襲に對する不斷の反抗がある。素朴なものの愛がある。眞に純粹なものを求めてやまない心がある。人の創造の成熟期とはまた何であらう。そこには絶えざる心の練磨がある。美の享樂がある。深い恍惚がある。香氣の高い生の充實がある。

パスカルの『感想』に曰く

生長と成熟

『人の性は何時までも前の方にばかりは進めない。ひき潮があり、さし潮がある。熱病にすら寒と熱とがある。その寒さと熱さとは殆ど變ることのない熱病の强さを示してゐる。世紀より世紀へと動く人の創造もその通りである。一般世間の好惡とても矢張りその通りである。』

この言葉はおもしろいと思つた。ある時代を生長期に、ある時代を成熟期に譬へて見たいといふことも、要するにそれは距離を置いての展望であつて、近過ぎもせず、また遠過ぎもしないやうな位置からのみいへることであらう。よく見れば、おなじ一つの時代にもひき潮の時期があり、さし潮の時期がある。四季が循環するやうに、冷熱は一代の人の心を往來してやまない。私達はそれを德川時代に求めて見るまでもなく、またそれを遠い奈良朝の時代に求めて見るまでもなく、人の創造の生長期と成熟期とは明治より大正へかけての年月の間に、既に幾度か私達の眼前に展開した。

私は自分で自分にたづねて見た。明治年代のある成熟期を文學の上に代表したといつてもいいやうな尾崎紅葉と、またある生長期を代表したといつてもいゝやうな長谷川二葉亭や北村透谷と、それらの人たちはおなじ一つの時代にうまれて來てゐるではないかと。さう思つて見て來ると、時代の生長を促すためにあるやうな人と、その成熟をたすくるためにあるやうな人と、その氣質を相異にし特色を相異にする二人が絶えずこの世にうまれつつあるやうな心地もする。

ある人の藝術には生長があつて、成熟がない。ある人の藝術にはまた成熟があつて、生長がない。

眞淵の言葉をかりていふなら、『荒魂』と『和魂』とは萬葉の諸詩人に見る二つの大きな精神のあらはれであらう。私達はあの二つの古い魂を今の言葉にむすびつけて、一方をヂオニソスの精神に、一方をアポロの精神に思ひ比べて見たい氣もする。われらの祖先は遠い古代において既にその二つ

の大きな魂から發足してゐることを思ふ。そしてその兩面の結びついたところに、人麿の古歌のやうな藝術の花の咲き出でてゐることを思ふ。これを德川時代に見ても、芭蕉のやうな眞詩人の天禀と熱情とを以てしてすら、『猿蓑』の句境に到達するまでには、多くの年月と努力とを要した。最近における芭蕉の研究者がいはゆる『ひゞき』と『にほひ』の說のあるのに徵しても、創造の生長と成熟とを具備するといふことにかけて、いかに古人の苦心したかを想像し得らるるやうな氣もする。この兩面を具備することこそ難いことである。私達が『若い日本』として今の時代を考へ、その踏臺として自他を考へて見たいと思ふことも、ほんたうに花のさかりといへるやうな遠い深い將來のあることを信じたいからである。

前世紀を探求する心

一

フランスの旅にあるころ、私はパリイの客舍の方に身を置いて遠く自分の國を振りかへつて見るやうな靜かな時を見つけることがよくあつた。わが國における十九世紀といふものに興味を持ちはじめたのも、あの旅であつた。曾て私はその心持ちを故國宛の旅のたよりの中に、次のやうに書きつけて見たこともある。

『もしわが國における十九世紀研究ともいふべきものを書いて呉れる人があつたら、いかに自分はそれを讀むのを樂むだらう。明治年代とか、德川時代とかの區畫はよくされるが、過ぎ去つた一世紀を纒めて考へて見ると、そこに別樣の趣きが生じて來る。まづ本居宣長の死あたりからその時代の研究を讀みたい。萬葉の研究、古代詩歌の精神の復活、國語に對する愛情と尊重の念、それらのものがいかばかり當時に目ざめて來た國民的意識の基礎となつたかを讀みたい。一方にはあの時代の初めにおいて、喜多川歌麿も歿し、皆川淇園も歿し、上田秋成も歿し、十八世紀風の特殊な藝術が次第に式亭三馬とか十返舍一九とか爲永春水とか、あるひは歌川派の畫家の群とかの寫實的傾向に變つて行つたことを讀みたい。一方には聖堂を學問の中心として、文藝、趣味、道德の上に支那の憧憬があるかと思へは、一方には蘭學の研究なぞが非常な勢ひで起こつてゐる。十九世紀の初期を考へると、舊いものと新しいものとが雜然同棲してゐる。それを委しく讀んで見たい組織的な西洋の文物を受け納れようとしてからまだ漸く四五十年だ、兎も角もその短期の間に今日の新しい日本

を仕上げた、斯ういふ人もあるが、それは餘り卑下した考へ方と思ふ。すくなくも百年以前の前半期を殆どその準備の時代であつたと見ねばなるまい。前野良澤とか桂川甫粲とか杉田玄白とか大槻玄幹とか、その他足立左内、高橋作左衞問、伊藤圭助、足立長雋、ああいふ人達が來たるべき時代のために地ならしをしていつた跡を委しく讀んで見たい。賴山陽といふ人もあの時代には見のがせない代表的の人物であつたらう。あの人の書いたものは隨分混りけの多いものとしても、一代の人心をチヤアムしたことはあらそはれまい。けれども山陽にはまだ餘程十八世紀風の殘つたところがある。渡邊華山、高野長英、吉田松陰等になつてくると、何となくそこに武士的新人の型を見る。その情熱においてはより熱烈であり、その思想においてはより實行的であり、その學問においてもより新しいものとなつて來てゐる。反抗、憤怒、悲壯な犧牲的精神、あの人たちの性格を考へると、どうしても十九世紀でなければ見られないやうな激しい動搖と、神經質と、新時代の色彩を帶びたものがある。そんなことなぞが詳しく書いてあつて、それを讀むことが出來たらばと思ふ。わが國の十九世紀は舊いものが次第にすたれていつて新しいものがまだ眞實に生れなかつたやうな時だ。

すべての物が統一を欲して叫びをあげてゐたやうな時だ。そのうちで『士族』といふ一大階級が滅落していつた。幾何の悲劇がそこに醸されたらう。それを讀んで見たい。長谷川二葉亭、山田美妙齋などのはじめた言文一致の仕事を國語の統一といふ上から論じたのも讀みたい。新しい詩歌が僅に頭を持ちあげたのも漸く十九世紀の末のことである。』

二

異郷の旅に萠した私の心持は歸國も長く變らずにあつた。前世紀とは言つても、あの時代に起つて來てゐることは皆私達に直接關係の深いものばかりである。ある意味からいへば、私達はそこから出發してゐる。あの暗い時代をもつと探つて見るといふは今日の私達に取つても興味の深いことではなからうか。

ゴンクウルには日本の浮世繪に關した名高い著述がある。ああいふ著述が單なる異國趣味でなしに十八世紀の藝術に寄せた深い興味から作られたといふは面白い事だと思ふ。もし吾國の十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があるなら、過ぐる二つの世紀の間の藝術の比較だけでも、もつと私達の目をあけてくれることが多からうと思ふ。あの歌麿なぞがあれほどデカタンの傾向のあつた人にもかかはらず、あの畫にあらはれて居る線や色彩から私達の受取る感じは、あの熟し切つたやうな男女の形態や髪や口唇なぞから私達の受取る感じは、十八世紀でなければ見られないものといふ氣もする。十九世紀の藝術となると、もつと神經質なものがあるやうな氣がする。さういふ比較を讀んで見たい。私達が北齋の畫に見つけるグロテスクの美とも言ひたいものは、一茶の俳句や南北の脚本に見つけるものと何處か共通したやうな性質のものであるか、奈何か。さういふことも讀んで見たい。過去の藝術が靜的な物の表現であるといふことはよく私達の敎へられるところである。さういふ判斷に從へば北齋の畫にあらはれて居るやうな動きを、あのムーヴマンをどう見たら

いいのだらう。江戸時代の藝術家が概して淡泊であり洒脫であるといふこともよく私達の教へられるところである。その見方に從へば、小說作者としての馬琴、畫家としての北齋、戲曲家としての南北、詩人としての一茶、あの人達に見るやうな執拗と濃情とをどう考へたらいいだらう。さういふことも精しく讀んで見たい。

文學の上から考へて見ても、私達は三馬や一九などの書いたものを一概に輕く見る先入主な考へ方に捉へられて、はつきりした特色もつかめない。或ひは前世紀の初期の特色は南北の戲曲などの方に色濃くあらはれてゐるやうにも思へる。詩人としての一茶は確かに十九世紀初期の人で、その自我を高調したといふ點から見ても、人間の煩惱を憚らずに歌ひ出したといふ點から見ても、あの蕪村なぞに比べて遙に近代的であるとは言へよう。私達は前世紀のはじめの詩歌を見渡して、桂園派の諸歌人の歌よりも千蔭の流れを汲む人達のそれよりも、一茶の俳句の方により多く時代の特色を見得るやうな氣もする。しかしかういふことは今にはかに言つてしまへるものでもない。景樹の歌の中にも、かなり私達の心持に近いものはある。さういふことが精しく書いてあつてそれを讀むことが出來たらばと思ふ。

もしさういふ研究を書いて呉れる人があるなら、寫生に關したことも讀みたい。文學の上に寫生の唱へられたのは明治になつてからのことのやうであるが、それは洋畫の方法から刺戟された寫生論の組織立てられたまでであつて、寫生そのものは私達の根深い傳統の一つと言つてもいゝほど、かなり古くからあつたことを讀みたい。應擧をめぐつて流れて來た四條派の畫風を擧げるまでもなく、繪畫以外の小說にも戲曲にも俳句にも前世紀のはじめの藝術の多くが寫生の方法を取入れてゐることを讀みたい。

三

好かれ惡しかれ私達は父をよく知らねばならない。その時代をよく知らねばならない。もし私の讀みたいと思ふやうな研究を書いて呉れる人があるなら何程の題目をそこに見出し得るか知れないやうな氣もする。それは當時の人の心を結晶したやうな文學や美術の作品の比較にのみ止まるまい。あの諧謔と諷刺とに滿たされて居るやうな三馬、一九、その他の作者の戯作の中に、當時の平民の道德と虚無的な傾向とを探らうと試みたものは北村透谷であつた。ああいふことも精しく讀んで見たい。意氣とか粹とかの美の觀念が當時の民衆の間から生れて來て居ることも注目にあたひする。武士の階級が次第に墮落して俠客なぞの輩出するやうになつた時、何程當時の一般の人の心が經濟的にも道德的にもまた精神的にも解放を求めて行つたか、それがまた滑稽文字ともなり戯作ともなつて奈何に當時の文學の上にあらはれて來て居るか、さういふことも讀みたい。

契沖、眞淵、宣長、その他先覺者の大きな功績は、古語の研究によつて、幾世紀に亘る支那の模倣的な風潮から自國の言葉を救つたところにあらう。一大反抗の精神の喚起したところにあらう。あの人達の遺した仕事の大きかつたことに氣づいたのも、矢張私はフランスの旅にあつて自分の國を返つて見た時であつた。前世紀のはじめには既に宣長も沒して居ることを思ふと、おそらく當時はその使徒達の時代であつたらう。その中での代表とも見るべき平田篤胤は國學を神道にまで持つて行つたやうな人で、あの人の歩いた道は宣長あたりよりずつと窮屈なものといふ氣がするが、當時の人の心に刺戟を與へたことは爭はれまい。私は前世紀のはじに起つて來た保守的な精神を單に頑固なものとばかり見ずに、もつと別な方面から研究されたものを讀みたい。それがさかんな愛國運動となつて行つた跡を讀みたい。この保守的な精神は、吉田松陰等によつて代表さるるやうな世界の探求の精神と全く腹ちがひのものであつたらうか。何と言つても前世紀での大きな出來事の一

つは明治の維新であらうが、舊制度の打破、民族の獨立、外國勢力への對抗といふことにかけて、前世紀のはじめから流れて來たこの二つの精神が相交叉し、相刺戟した跡を讀みたい。大正の今日、私達の眼前に展開しつつあるやうな世界主義と、その反動の大勢とは、早くも前世紀に產聲を揚げた雙生兒であることを讀みたい。

私は少年時代を振返つて見て、自分の物心づく頃から明治二十年頃までの間はかなり暗かつた時代のやうに思ふ。おそらく西南戰爭以前の十年間はもつと暗かつたらう。私達は明治維新と共に開けて來た新時代の輝いた方面のみを見るに慣らされて、その慘憺たる光景には兎角眼を塞ぎがちであつた。さういふ眞相をも讀みたい。私達が唯、結果に於いて知り得るやうな父の時代をもつとよく讀みたい。明治のはじめに生れて來たものは文學でも美術でも德用時代の末にすら比較しがたいほど見劣りのする粗末なものばかりだ。明治維新の齎したものは、その一面に於いてこんな深刻な影

響のあることを想ひ見ねばならない。封建時代の遺物といふ名の下に、あらゆる文化が蹂みにじられはしなかつたらうか。僅に默阿彌の脚本があつて前世紀の中程を飾るのみで、詩も隱れ、繪畫も潜み、あらゆる藝術は一時姿を晦ましたかに見える。さういふ破壞の動いて行つた跡が正しく判斷されてあるものを讀みたい。

實際、私達は斯ういふ時代から出發して來てゐる。一概に過去を黃金時代のやうに考へ、今日を頽廢墮落の極と見るやうなことは、私は取らない。今日の青年の激しい精神の動搖を思ふものは、もつとその由來するところを自分等の內部にたづねて見ねばなるまい。

反省

欲覺聞晨鐘
令人發深省

深い反省も時としは甲斐なく、淺い鐘の音も時としては人を啓發する。

フランシス・ジャンムの言葉

河盛好藏氏といふ人によつて雜誌『詩洋』に譯載されたフランシス・ジャンムの言葉は忘れがたい。あの佛蘭西の田園詩人が心の花園とも言ひたい言葉の中から、左にその二三を摘錄する。

『眞の詩人は恰度良い時に花をつける。然しその花が女や風に頭を下げたとて其は串戲からだ。花はしなやかさの中に力を有つ。この力はユリシスも多少愛した奇計である。』

『言葉の巨匠はパスカルであり、ラ・フオンテーヌであり、ボシュエである。文體（スチル）と云ふものは完成するにつれて皮を脱ぐものである。尤も石女（うまづめ）の完成と云ふのもあるが。』

『最も強い喜びの一つは正確な言葉を感得し、それが思想に從ふ事である。新しい木の葉の自らを示す美しい葉脈、私達の先人が遺して呉れたのはこれだ。』

『私の喜びは自らの内に先人を發見する事である。彼等は私の青春の薔薇で一杯になつた草叢にかくれて居たのだ。私は心の底まで突き入つた。其處には三個の像がある。』

『パスカルは闇黒を以て、ラ・フオンテエヌは太陽を以て書いた。それは同じ事だ。』

『慧敏であることは世の中で一番容易なことだ。だが心の貧しくてあることは左様でない。パスカルは心の貧しい人だ。』

カアライルとホヰツトマン

ラツセルの書物の中に、こんなことが言つてある。それをつづめて言つて見れば、『人は愛情の厚薄によつて非常に異つて見えるものだし、同じ人でも時によつては非常に異つて見えるものだ。この點に關して、カアライルとホヰツトマンとは兩極端の例を見せて居る。カアライルに取つては、殊にその晩年には、多くの男や女が厭はしいものであつた。それが彼を導いて人間生活の著しい破壞者にのみ滿足を覺させるやうになつた。彼が戰鬪と强暴とを好んで、弱きもの虐げられたものを排したのもそれに基いて居る。晩年に於ける彼の道德も彼の政治論も、殆どすべての人間に對する憎惡によつて鼓吹された。そこへ行くと、ホヰツトマンはその正反對で、男や女の大衆に對して廣い

溫かい感受性をもつて居た彼の想像の前にはすべてが歡びの對象であつた。多くの人が唯美しく愛すべく思ふもののみに感ずるやうな歡びをホヰツトマンは殆んどすべての人間に感じた。この廣い、愛好の念から樂天主義が生まれデモクラシイの信念がうまれ、平和と愛とに共存する道も容易であるとの確信がうまれた。彼の哲學も、彼の政治論も、カアライルと等しく普通一般の男や女に對する直覺的な態度に基いて居る。』と。この言葉は面白いと思つた。そればかりではなく、新しい理解の方法によつて人間の生活を見直さうとする溫い心が分つて來てから、それまであまり注意する氣にもならず何となくとげとげした英吉利人のやうに思つて居たラツセルといふ人が異つて見えて來た。

愚と惡

イブセンに關するブランデスの回想の中に左の言葉が出て居る。

『フロオベエルに言はせると、人間は愚かだから、それで惡いのだ。イブセンに言はせると、人間は惡いから、それで愚かなのだ。』

この比較は面白いと思つた。人間を愚かなものと觀るフロオベエルには、それをどうしようもない。イブセンの立場から言つて見れば、人間はそんなに愚かなものでもない、もしその道德上の位置を變へたなら、より賢くもなれるといふことになる。

有島武郎君のこと

あれ程多くの人の噂に上つた有島武郎君の最後も、大震災の襲ひ來ると共に、どこへ埋め去られたかと思ふやうになつてしまつた。人がはげしい運命に面した場合には身をもつて當らなければ成らないといふことを事實の上に見せつけられる思ひもしたのも、有島君の最後であつた。けれども同君の死はあまり思ひがけないことであつたし、秋子さんとの關係をどう思ふと人にたづねられた際にも、私なぞは自分の考へも纏められないくらゐであつた。せめてあの事件の輪廓だけでもはつきりして來る時を待たう、その考へから私は『女性改造』誌上へも有島君の遺著の一節――ホキツトマン詩集の譯の第二輯の卷尾に添へてある評傳の中から、おもにホキツトマンの戀愛關係に對する

部分を、殊に有島君自身の心の訴へとも見るべき部分を抄錄するにとゞめておいた。

人妻を對象とした點では、有島君の戀愛關係は同君が生前私淑してゐたホヰツトマンの戀愛關係に似てゐる。偶然とはいひながら不思議な一致だと思ふ。

有島君はホヰツトマンの忠實な研究者であつたといふエモリイ・ホロウエーの意見を紹介して曰く、

『オ・コンナー夫人の言葉に、「……私の考へるところによれば、ホヰツトマンは夫婦關係を結ぶのは彼に幸ひするものだとは考へ得なかつた程、彼の自由を愛してゐた。もし彼が苟も結婚して居たなら彼に取つて大きな誤謬であつたらう。彼はしばしば私に言つて聞かせた、彼は妻を持つ人を羨みはしないが、その子供達のあるのを羨むと云々」

『「このホヰツトマンの信據するに足る戀愛の事實から讀者は次ぎのことを注意するに難くあるまい。それは彼がその情人として既婚の女性を選んでゐるといふことだ。かかる婦人たかかる婦人の幾人かによつて彼が子供を擧げたとするなら、彼がサイモンズになした告白の謎のやうな言葉が明瞭になつて來る。それはかういふことだ。この悲劇的な三角關係の當事者達は、事件にかかはりのない子供の法律上、社會上、及び財產上の利益のために、彼等自身の個人的感情を犧牲にして事件を秘密に葬ることに一致したらうといふことだ。」』

ここまではエモリイ・ホロウエーといふ人の意見である。有島君をそれに附けたして、次のやうに書いてゐる。

『彼(ホヰツトマン)の女性に對する態度がこのやうであつたとすると、それを從來の結度制度、家族的制度に對する由々しい脅威だといはなければならない。さりながらそれを從來支持された制度に對する威脅であるが故に惡であり得ねばならぬか。これは問題である。その解決の將來に殘さるべき重い問題である。男と女と子供とが結婚といふ重荷から解放される時のやがて到來するのを私は豫感せずにはゐられない、そして私としては要求せずにはゐられない。この要求には何かの機會に於て更に言ひ及ぶことがあるだらうと思ふ。』

有島君の書いたホヰツトマン研究にはそれが單なる評傳とは思はれないほど、君自身の精神の內

部に即したことが多く傳へてある。この一節を讀んで見たばかりでも、從來の結婚制度、家族制度に對して、いかに君が自由な態度を欲して居たかはそれを想像するに難くない。結婚といふ重荷からの男と女と子供との解放――それが君の心からの要求であり、又、君の戀愛關係を讀まうとするものに取つて見逃すことの出來ない點ではなかつたかとも思はれる。

一切の事物に對する有島君の態度は自由を愛するといふ言葉で盡せやう。それは君が生前に好んで口にして居たやうに。その君の行きついた所がこの世で愛し樂しめるやうな自由でなくて、どうしてあんな悲劇的な死であつたらう。世には有島君と秋子さんとの關係を評して、近松の心中物に見る情死と變りがないではないかと言つた人も多かつた。これはあまりに斷定的な言葉だ。私達は、ただその事件の結果のみを見ないで、もつと人と人との關係をよく見たいものだと思ふ。

有島君の亡くなつた後になつて見て、すくなくも斯ういふことは私の心に殘つた。それはあれ程思想の上で自由を愛した有島君でも、その良心に於いては――人と人との道德的な關係に於いては、かなり保守的な人であつたといふことだ。その矛盾を思ふと、有島君が最後に落ちて行つた道は君の性格としては避けられなかつたものかと想像せられる。その矛盾がなかつたら、あれほど私達の心を打つといふこともなかつたらうと思ふ。

濕れる松明のごとく

『情熱をして靜かに燃えしめよ、濕れる松明のごとく。』――カアペンタアの戀愛論も、要するにあのアルス・マアトリアの一語に盡きて居る。

流行と不易

俳人に流行と不易の說がある。前者は刹那に生きんとするものの姿であり、後者は時の流れの裡に詩の世界を求めて行くものの姿であらう。

この二つを結び合せて始めて詩の完成に近いと考へたものは芭蕉であつたやうに思ふ。

滑稽の大きな力

古い傳說によると、天の岩戸は他の力では決して開かれなかつた。滑稽の力によつてそれが開かれた。

私は戯れてこんなことを言つて居るのではない。滑稽の力をつかむことは私達に取つても大切だ。それを好いユウモアにまで深めて行くことが肝要だ。ただ笑ひを撒き散らすばかりが滑稽のすべてではない、多くの束縛と闇黑との中から私達を解放して呉れるのもその大きな力だ。その意味から言つて、あの古い傳說には自然の巧まない寓意がある。そこから日の光もあらはれ、大地もほほゑみ、神も人と交つた。

淺瀨を奔り流るる水のごとく

句をつくるには、淺瀨を奔り流るる水のごとくせよと、芭蕉はその弟子に敎へたといふ。深く入つて淺く出るといふ藝術の境地も思ひ合はされてをもしろい。床しい言葉だと思ふ。

淺瀨を奔り流るる水のごとく。左樣だ、そこから潑剌とした、自由な、動いたものが生れて來る。けれどもそれには私達自身の內部に生氣がなくては叶はぬことだ。人生の憂鬱に沈み勝ちなものに取つては、殊にその感が深い。好いユウモアのある心持が來て、その重苦しい憂鬱から淺いところへ私達を救ひ出して呉れる。

大暑

アンデルセンの書いた話に『十二ケ月のお客』がある。大晦日の晩、丁度十二時の鐘が鳴り出す頃に、十二人の客を乘せた大きな驛馬車が町の門の前に止まつたといふところから、あの話は始めてある。『來年は丈夫で、無事に――可愛い女と、金の一ぱい入つた袋と、心配のなくなることと。』こんなたわいのないことを言つて大晦日を祝ひ、新しい年を迎へる悅びの聲が、町の家々から聞えて來て居る。そこへ馬車で着いた十二人の客は、いづれも旅行券を持つて居るばかりでなく、その町の誰彼の差別なく皆のところへ土產物をも持つて來て居る。この客は一體どういふ人達であらう。門番がそれを尋ねると、一番最初に名のりをあげるのが『正月』で、それから『二月』、『三月』といふ順に寒さうな熊の皮の外套を着た男や、謝肉祭の王子なぞが馬車から下りてそこへ出て來る。驚くことには、アネモネの花を髮に挿し、車葉草の好い匂ひをさせる、夏服を着た一人の貴婦人が馬車から下りて來るが、その客が『五月』だといふのであつて、これほど季節といふものを子供らしく語つて見せて居る話もすくない。

『十二人、內へお入りなさい。ただこれからは一人づつ行くのですぞ。旅行券はわしが預かる。この旅行券は一人に一ケ月づつしか効力がありませんぞ。一月たつたらわしが一應檢査します。それでは正月さん、先づ御出立なさい。』

といふ門番の言葉もおもしろい。好きな話だ。

もしこの十二人の客が私の住む麻布の入口あたりへ馬車で着いたとしたら、その時はどんなものだらう。土地の風俗が異なればまた馬車から下りる客の樣子も異なつて居るに相違ない。さだめし夏祭の花笠でも冠つて、金棒を杖のやうについた男が、その馬車から下りて出て來るに相違ない。自分こそ『八月』といふものだと名のりをあげるに相違ない。今年は八幡の影祭で、町の空に響く太

鼓の音も聞えず、このあたりの子供等を悦ばすやうなものは何もなかつた。私の家でも赤の御飯なぞをたいて僅に祭らしい日を送つた。

ことしの夏は、二番目と三番目の男の兒を木曾の郷里の方へ送り、一番末の娘を伊豆の海岸の方へ送つて、私だけはこの町に殘つた。

諸方の學校の暑中休暇が始まり夏の講習會なぞが開かれる頃から思ひ思ひに東京を去つて避暑に出掛ける人が多く、都會の夏のさびしいことは毎年同じであるが、ことしは殊にさびしい氣がした。それにしても何といふ暑さだつたらう。飯倉の電車通りにある一列の並木はうちつづく旱りに乾ききつて生きた色もない。木の葉といふ木の葉は秋をも待たないで枯れ死ぬかとさへ思はれる。桃、梨、バナナ、夏蜜柑、青い林檎または西瓜なぞの近所の水菓子屋の店先に置きかへられるのを見ても、季節のうつりかはりはそこにも知られるが、今年にかぎつて果實もいたみ易く、買つて來る水蜜桃の多くは一日で腐つた。去年の大震大火の後をうけて、この稀な大暑と戰はねばならなかつた下町方面のバラック住居も思ひやられた。熱し易いトタン屋根の上に水をまいて、僅に暑氣を凌がうとした人達も多かつたといふ。私の家の北隣にはある會社へ勤めに通ふ人も住んで居るが、この暑さには倒れる會社員も多いことをその家の主人から聞かされた。夕方にでもなると、私は町中へ通つて來るかすかな涼しい風をさがしたいばかりに、家を出て植木坂を登つて行つて見たり、鼠坂の方まで歩き廻りに行つて見たりしたが、どうかすると木の葉のそよぎ一つそこに見出さないこともあつた。震災後は、妙に蠅も蚊も多いとは、よく人の言ふことだ。寢苦しい多くの夜を飯倉に送つたのもことしの夏だ。

暦を取出して見ると、一年のうちの晝の最も長いのは入梅のあける頃から七月の半へかけてである。水のやうな空に淡い月のかかつた七月の夜ほどすずしくて、短いものはない。まるでこの大きな都會の中は留守のやうであつた。それから八月に入つて、青白く底光りのする夜の空に遠く暗い雲があり、あるものは青色に、あるものは紅色に、それぞれの光を放つ星の姿が眼につくなかで、月あかりの道を歩き廻るのも樂しい思ひをした。そろそろ肌寒い、あの秋夜に見つけるものにも勝つて、私が好ましく思ふのは夏の月だ。ことしは殊にその感じが深かつた。

さう言へば、去年の大震災を記念する九月一日がやつて來て居る。何と言つても、もう秋だ。私は一夏の間の町の實にさびしくひつそりとして居たことを思ひ出して、この大暑を送らうとして居る。（大正十三年の夏）

都會

ロダンの言葉に、

『大都市は墓地です。人間はそこに生活してはゐないのです。彼等は健康な生活力を失つてゐます。消耗してしまつたのです。』

これは曾てエレン・ケエがロダンをパリーの郊外に訪ねた時に、ロダンが語つた言葉だとして、雜誌『大街道』に譯載されたものである。その訪問錄の中には、ロダンが彫刻家らしい立ち場から次のやうな言葉をもエレン・ケエに語つたといふことである。

『新時代が特に失つて居るのは均齊に對しての感じです。そしてこの感じは、本質的なるものに對

する感覺を他の半分とした、半分の味なのです。貴方はわれわれの公の記念建造物を、われわれの建築を御覽になりましたか。われわれは記念建造物保有會をもつてゐます。それはさういふものを破壞する會と呼ばるべきなのです―その無感覺な修復によつて。新しい建築を御覽になりましたか。エツフエル塔へお上りなさい、さうすると見られます。パリーがそのすべての屋根屋根でまるで墓石の並んだ墓地のやうに。』

すぐれた藝術家でなければ、こんなことは言へない。先頃私は伊豆の綠を見て來た眼で東京へ歸つて見た時に、これが住み慣た町の草木の色であつたかと驚かされた。この灰色にひどい塵埃をあびた、健康な生活力も失はれたやうな都會の草木の色は、やがて都會の居住者の顏色であらうかといふことにも驚かされた。ずつと以前に私は淺草の方に住んで見たこともある。あの淺草橋に近い新片町に七年もの月日を暮して見たこともある。あの邊は舊兩國にも近く、何となく古い江戸の殘つて居たやうな町で、附近には昔の藏前の札差の分れだといふ家があり英一蝶の子孫にあたるといふ人達の住む家もあつた。それでも土地の事情に精しい人の話を聞いて見ると、建物はあつても代は替り、暖簾の名は同じでも住む人は替つて、三代と續いて居る家は殆ど稀だらうとのことだつた。子は親よりも弱く、孫は子よりも弱い。大都會が人を弱くしその生活力を消耗させることは、これを見ても分かる。

大都會は人の活動の地ではあるが、大都會に居て反つて活動力を失ふものは何程あるか知れない。多數な人の集まる都會生活はその居住者から個性を奪ひ、その特質を平等にし、平坦にし、眼に見えない杵でもつて一樣にその生活力を搗き減らしてしまふ。試みに、私達が自分の周圍を見渡すと、そこにはただただ都會に寄生するばかりのやうな、何程の多くの家族を見出すか知れない。せせこましく窮屈な町の中に住み、狹い土地と日光を爭ひ、僅ばかりの草木を自分等のものとして朝に晩に眼を慰めるやうな都會の居住者のことを思ふといたいたしい。

ロダンに言はせると。『大都市は墓地である』のだ。『人間はそこに生活しては居ない』のだ。しかし、現に都會に居住しつつあるものに取つては、ただそれだけでは濟まされない。何とかしてこの都會の澱み易い空氣の中に若葉青葉のやうな生氣をそそぎ入れなければならない。その更新を持

春を待ちつつ

ち來すものは、何時の場合にも地方人の氣魄と野性とではないだらうか。

二三の事實

歐羅巴化――殊に都會生活の歐羅巴化――この現代の風潮を誰も奈何することも出來ない。近頃は學校通ひの女の子供までが多くは靴に洋服だ。婦人の風俗も變りつつある。この風潮は何處まで押し進んで行くと考ふべきであらう。左に動く時計の振子はそれと同じ度合をもつて右に傾く時が來るやうに、この歐羅巴化の風潮はすでにすでにその中に反動の種子を胚胎しては居ないだらうか。それにしても私達は今、どの程度まで自分等の生活の中に歐羅巴風のものを取入れつつあるだらう、又、それを取入れる事が出來ると考ふべきであらう――風土を異にし、日光の度を異にし、寒暑、乾濕、風雨、塵埃、その他のものゝ度を異にする吾國に於いて。

婦人の風俗ほどその時その時の流行の變遷と嗜好の深淺とを端的に私達に語つて居るものはすくない。年齢の相違も、貧富の差別も、地方色も、ありありとそれを見せて居るやうなのは婦人の風俗である。その意味から言つて、今の婦人の風俗を見ることは、何程まで私達が歐羅巴風のものを取入れつつあるかの好い尺度ともなる。

アンデルゼンの童話集を讀んで、驚く事は、あの子供のための物語の中に接吻といふ文字が何程書いてあるか知れないことである。可愛いと言つては接吻する。嬉しいと言つては接吻する。あれは接吻の國の童話集だ。接吻と言へば直ぐにそれを男女の愛情にのみ結びつけて考へるやうな吾國の家庭にあつては、あゝいふ童話集を子女の讀物として、まだ身も心も十分に發育しないものに勸めるといふのも、かなり氣になる。ところが、アンデルゼンの書いた接吻の意味は、實はもつと廣いのだ。あの歐羅巴人が誰の見て居る前でも憚ることなしにする親子、兄弟、姉妹なぞの間の親しげな接吻は、その意味も、その形式も、まだ十分に吾國の家庭には知られて居ない。それが互ひの頰の上で、あるひは額の上で、親しい身内のものゝ間に熱烈にかはされる場合のあることなぞも、また十分に知られて居ない。

歐羅巴化の風潮は私達をしていろいろな早合點をさせる。私達はもう歐羅巴の方にあるもので、何でも知らないものは無いやうな心を持ちたがる。ところが、接吻といふ言葉一つにすら、この通り知られて居ない意味もある。もし吾國で所謂歐羅巴風なるものが、歐羅巴の方に現にあるものと全く同じだなどゝ考へたら、それこそ大早計だと言はねばなるまい。

歐羅巴の方にはいろいろなものがある。その中で、東洋人としての私達に取つて、入り易いもの

と入り難いもののあることも、それを知つて置く必要があらうと思ふ。これは歐羅巴風のものを自分等の生活の中に取入れる上に於いて、否でも應でも起つて來る現象である。勢ひ私達は入り易いものを尊しとして、入り難いものをつまらなく思ひ易い。しかし私達の入り難く閑却し易いもので、硬質な好いもののあることも思つて見ねばならない。例へば、繪畫の方で言つて見るならば、セザンヌは入り易いとしても、ドラ・クロワは入り難い。又、例へば、文學の上で言つて見るならば、モウパツサンは入り易いとしてもユウゴオは入り難い。

巴里最新の流行として婦人雜誌などに紹介されるのを見ると、それが彼地での花柳界の風俗であることには毎々かされる。さういふ風俗が彼地での最新の流行であるにしても、それは多く皮優とか、踊り子とか、もしくは極意氣がつた新奇を競ふ人達の間に悅ばれる好尙であつて、純粹な佛蘭西人の家庭にはそんな突飛なものは迎へられない、もつと靜かなものが流れて居る。『流行』として世に流布する巴里の雜誌が奈何なる位置にあるかを知るならば、思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

蓋し外國にある物の位置は、それほど吾國に傳へ難い。これは風俗の上のことにのみ限らない。

私達は自分の國に居ながらでも、セザンヌの繪畫を鑑賞することは出來る。その特色を感知することは出來る。又、それを論じ合ふことも出來る。唯、セザンヌのやうな人が佛蘭西の美術界にあつて奈何なる位置に立つかを知ることは一寸容易でない。

巴里の書店ラルウスから出版した世界地理書の中に、『日本人の婦人』として出て居る挿畫を見た事があつた。まがひもない賣笑婦の寫眞だ。しかも横濱あたりのチヤブ屋にでも見かけそうな、い

かがはしい女の風俗を寫したものだ。それが吾國の婦人の風俗でも代表するかのやうにその地理書に掲げてあるのを見た時は、思はず眉をひそめた。

しかし、ひるがへつて思ふに、一つの國の眞相はこれほど傳へ難いのだ。丁度吾國から行く旅行者の眼に映り易い巴里の女の風俗は何かと言へば、それは良家の子女の風俗ではなくて、むしろ色彩のけばけばしく素性のいかゞはしい婦人達の姿であるやうに、おそらく佛蘭西の旅行者の眼に映つた吾國の婦人の風俗といふものも、先づあの地理書の中に出て來るやうな婦人の姿であつたらう。

お前はそんなことを言ふが、試みに銀座あたりの街頭に立つてそこに行き逢ふ外國の婦人の風俗を見るがいい、昨日か今日の流行でもあれだけに洋服を着こなす吾國の婦人がなかなか笑へるものではない、とさう私に言つて見せる人があるかも知れない。

しかし銀座あたりを見物して歩いて居る外國の婦人の多くは旅行者であることを想像して見て欲しい。それから吾國に渡來する外國の婦人の中に所謂殖民地の人達の多いことをも想像して見て欲しい。旅行者にはおのづから旅行者の風俗がある。殖民地の人達にはおのづから歐羅巴本國の人達とは違つた風俗がある。

日本の絹は世界に名高い。信州あたりの製絲工場でつくらるる多額の絹絲が海外輸出の重なるものであることも人の知る通りである。吾國に產する絹絲のうち、縮緬その他の織物に織られて內地の市場に出るものは必ずしも最良の材料から造られるのではなく、品質の最もすぐれた、隨つて最も高價な絹絲は多く海外へ輸出されるといふ。ところが、この自國產の絹絲は、海外の工場へ行つて織られ、染色され、幾多の人工を加へたものと成ると、今度は舶來品のハンケチともなり、婦人用の洋傘ともなり肩掛ともなつて、逆に吾國へ輸入されるといふ奇觀を呈して居る。吾國の婦人達はさういふ舶來品を求めるために隨分高い稅を拂はせられて居る。そしてその洋傘なり肩掛なりの

材料が自國の產出物であることを知らずに居る。すべての物の眞相は、よくそれを突きとめて見ると、こんな場合に遭遇することが多い。

曾て私は巴里の客舍にあつて、次のやうなことを故國への便りの中に記しつけて見たこともあつた。

『模倣とは何ぞや。ここには多くの東洋のものの模倣がある。世界のあらゆるところから採り得るかぎりのものを採つて、それで生活を豐富ならしめようとする模倣がある。安南、印度、埃及あたりは今、他から模倣されるばかりだ。自ら他の好いものを模倣する力がない。

『模倣は多きを憂へない。むしろその力の薄弱なるを恨みとする。模倣の力が薄弱なる場合は、他の好いものに冷淡なることも出來なければ、又それを眞に受け入れて自分のものとすることも出來ない。』

今日の歐羅巴化のこの風潮に對して、過ぐる昔の時代の支那化といふことを考へて見るのも興味深いことだ。私達の先祖の中には、今日の歐羅巴崇拜家にも劣らないやうな支那崇拜家があつたやうだ。さういふ人達は支那人のやうに書き、支那人のやうに歌ふほど大陸の方にあるものに心醉した。しかしさういふ人達の骨を折つて書き遺した漢文漢詩よりも、反つて婦人の手に成つた日常の言葉の日記、おのづから讀み出でた和歌、もしくは當時にあつて戯文戯作とせられ滑稽文字とせられたものの方に今日でも猶私達の心を動かすものが多く殘つて居る。

農民のために

今日の北歐の地方に、その農村に多く見らるるといふ農民學校は、實に一詩人のささやかな村塾に端緒を發したものであるといふ。あの美しい話は忘れられない。吾國の農村や農民の現狀に關したことを見たり聞いたりするにつけ、私はよくその詩人のことを思出す。現代の歐羅巴にあつても農民生活のいちぢるしく發達して居るやに傳へらるるのは北歐の地方である。その地方が今日あるのも、さうした農民の友達があつて、農家の青年の眼を開けて置いたからではないだらうか。それを思ふと羨ましい。

しかし、そんな先驅者が、一村夫子たるに滿足して、農民のために一生をささげ、隱れた努力をつづけたといふのも、決して偶然ではない。文學の上で新しい子供の世界を見つけたと言つてもいいアンデルゼンのやうな人を生み、廣い詩の領分をスカンヂネヰア固有の民話に開拓したと言はるるテグネルのやうな人を生み、農民のために多くの創作を書いたビョルンソンのやうな人を生んだ北歐の社會の空氣の中から、さういふ詩人の生れて來たといふことは想像するに難くないやうな氣がする。世には、一詩人の力によつて農村生活の更新が持ちきたされたといふことや、兎角夢想家ではあつても經營者ではない詩人が農民學校の最初の礎を置いたといふことなぞに、一種の不思議を感ずる人があるかも知れない。しかし、詩人なればこそそれだけの種が蒔けたのだと思ふ。

『民衆の中へ行け。』といふ聲をあれほど高く叫んだ露西亞の智識階級の人達も、今はどうしたらう。

世界の大戰以來、革命に次ぐに革命を以てしたやうな露西亞の現狀は――その農民の生活の實際の消息はあまり傳はらない。『農民は駄目だ、何と言つても自分等の賴りになるのは眼のさめた智識階級だ、』さういふ意味のことを私はゴルキイの書いものの中に見つけて、その言葉の底に籠る冷い涙を感じたことがある。それにしても、露西亞の農民の生活の現狀と、北歐のそれとは、いちぢるしい對照を見せて居るやに想像せらるる。

あまりに輝いたもののみに注意を集めすぎるのは、私達日本人の缺點だ、世には、それほど輝かないまでも、しかし、實際にすぐれて好いものがある。空想的でなくてしかも深秘に、辯證的でなくてしかも確實に、理想と現實との堅く結びついてゐるやうな北歐の世界の方に望まれるものは、その一つの例ではないだらうか。

一昨年あたりから、私は自分の子供の一人を農村の方へ送つて居る。それほど農民の生活は今の私の身に親しいものと成つて來て居る。木曾のやうな山林の間に生れ、農村を故郷とする私が、自分の子供のために考へることは、やがてそこに働いて居る人達のために考へることでもある。

今日、農民の自覺を促さうとするやうな聲は高い。私達はさういふ千の聲よりも、農民と共に生き、その生活を知悉し、土から離れかけて居る農民をもう一度土に歸らせるやうな一人の好い友達を欲しい。

信濃の婦人

信濃毎日の東京支局から信州の婦人に就いての自分の感想を求められた。私には信州の婦人のことを公平に判斷する力はない——何故かと言ふに私の母親が信州の婦人であるのだから。もし誰かが來て信州の婦人のことをひどく惡しざまに語るとしたら、私は自分の母親をひどく傷けられたやうに思ふだらう。これでは公平な判斷も覺束ない。

婦人は男子に比べると一層多くの地方色を見せて居るやうに思はれる。信州の男子の中には、その青年期に於いては理想家であつてその成熟時に於いてはまだ極端な實際家に移り行く人を見出すことがある。この見地から觀た信州の婦人は奈何であらうか。曾て私は七年ばかりも佐久地

方に住んでみて、それ迄思ひがけなかつた信州の婦人の美質を見付けたこともある。思ふに、山地に住む婦人の激しき勞苦があゝいふ質實勇健な氣象を自然に具へさせたのであらう。

信州の婦人は概して美しくないといふ人もある。成る程、嬌態には乏しいかも知れない。しかし美しくないとは奈何して言へやう。信州の婦人の中には極めて自然な美しさを發揮する者が多い。それは高山の植物にも譬へて見たい美しさである。

やゝ灰色ではあるが、よく見れば深くて飽きない花の持つ美しさがそれである。以前に、私は佐久間象山が娘に宛たといふ珍しい手紙を讀んで、信州の婦人が今日あるのも偶然ではないと思つて見たこともあつた。あの象山の娘に宛た手紙は、やがて其反面に、前世紀に於ける信州の婦人の教養を語つて居ると思つた。いづれにしても信州の婦人はもつと言葉を鍛えねばなるまい。もつと言葉を鍛えたなら、信州の婦人が性來豐富に所有するあの複雜で濃かな感情を何程自由に伸ばし得るかも知まれい。

私は是迄に信州の婦人を寫さうといふ意識を持つて自分の創作を試みたこともない。しかし私は

知らず識らずの裡に日頃親しみの多い信州の婦人のことを書いた。私の『家』の中には色々な婦人が寫してあるが、あゝいふ人達は信州西部の婦人の型とも言はれ樣。若し信州人でない讀者から見たら、私の書いた婦人はいづれも信州の婦人の型だと言ふかも知れない。

舊い學窓のこと

久しいこと舊い學窓も訪ねない。

白金の丘に根ぶかく
記念樹のたてるをみよや
綠葉は香ひあふれて
青年の思ひを傳ふ——

あの校歌を賴まれて作つたのは、今から十二三年の前にあたる。あの歌が作曲者の方へ廻つて新たに譜が出來た時、たしか井深先生からの手紙で、みんな一緒に學校の講堂に集まつて歌つて見る

から私にも聽きに來いとのことであつた。何かの用事の都合でそれも果せなかつた。あれ以來、學生諸君によつて歌はれるところを私はまだ一度も聽いて見る機會がなかつた。

佛蘭西の旅にある頃、巴里の客舍の方で思ひがけない人にめぐりあつた。同じ明治學院を出た人だ。尤も、私なぞはずつと時代もちがひ、年齢もちがつて居たが、同じ學窓の記憶につながれて居ることだけは似て居た。遠い異鄕の空にあつては自分の國の言葉を出して思ふさま語り合ふといふだけでも懷かしい。その人は私の顏を見ると白金の方のことでも思ひ出したといふ風で、校歌の一節を口ずさんだ。その時、實は私はあの歌を賴まれて作るには作つたが、あれに合はした曲をまだしみじみ聽いたことがないと話した。そんなら自分が歌つて聞かせる、とその人が言つて呉れた。あの時に聽いた校歌も舊い學窓の方へ私の心を誘つた。

記念樹も變らずにあるだらうか。古い記念樹のなかで、學校の火災の折に辛くも生き殘つたのは、私達よりも以前の卒業生が植ゑた銀杏と、私達の植ゑたものとの二株だけと覺えて居る。おそらく他の級の記念樹が割合に耐火力の少なかつたもので、偶然に選ばれたあの二株だけにその力があつたのかも知れない。あの學校の庭の芝生の一隅を擇んで、記念の石までその根元に殘して置いて來た樹の楠であつたといふことが近頃になつて分つた。

風にたよりに聞けば、今の學校の生徒が休みの時間毎に、夏の樹蔭でも樂しみに行く場所は、私の植ゑて置いた記念樹の周圍であるとか。あの樹の古くなつたことは、そんな話を傳へ聞いたばかりでも想像せらるる。どうかするとあの樹の枝には生徒が鈴なりに生ることもあるといふ。生れ。生れ。學生諸君から見ればあの樹は舊い卒業生の形見で、私達から見ればあの樹は年とつた自分等も同じことだ。私はその話を聞いた時に、若い人達が來て自分の腕にぶらさがりでもしたやうに思つた。

ある日、私は子供等を連れながら銀座の珈琲店に休んで居て、偶然にもそこへ來合はせて居た舊い馴染の池田君に逢つた。つい先頃の同窓會には私は都合があつて出席しなかつたが、池田君は同窓會を缺かしたことがないと言つて、そこに出席した諸君の噂が出た。久しぶりで逢つて見ても、昔ながらの他田君だ。私達は和田君や、小城君や、植木君なぞの噂をした。

その時、私は池田君に言つた。見て呉れたまへ、ここに居るのが自分の子供等だ。みんなこんなに大きくなつた。自分等が明治學院で勉強して居たのも、この子供等の年頃であつたらうか、と言つて見た。

『さういふ君は明治何年の生れだつたらう。』

『明治五年さ。』

『して見ると、僕と同年だ。』

『あの松浦君が矢張さうか。たしか友野君もさうだつた。』

こんなことを話し合つた。見ると、私の前に立つて暖爐にあたりながら話して居る池田君は驚くばかり若若しい。髪なぞもまだ黒黒として見える。三年の外國の旅、それから最近にやつて來た思ひがけない病氣、そんなこんなで一層白くなつてしまつたやうな私の髪なぞとは、くらべものにもならない。私は無遠慮に、半分冗談の心持もまぜて、池田君のその髪は染めて居るのではないかと尋ねて見た。

『それこそ、ありふれたお世辭だ。舊い學校友達の誰でもが僕に向つて言つて呉れるお世辭だ。僕の髪はまだこの通り黒い。』

それが池田君の返事だつた。昔からの馴染とあれば、こんな遠慮のないことまで言へて、『君、僕、』で話の出來るのもうれしかつた。私達は互ひの職業の相違も忘れ、互ひの生活の相違も忘れて、三十五六年も前の學生時代に歸つて行つた。

ある日も、私は用達のついでに、子供等と一緒に冬の日比谷公園を歩いた。めづらしい好い天氣

だつた。冬とは思へないやうな溫暖な日だつた。そこいらは枯れがれとして、公園の落葉樹といふ落葉樹の葉はたいてい落ち盡して居た。私は自分の今の心と子供等のそれとをひきくらべて見るつもりで一緒に歩きながら尋ねて見た。御覽、この公園にある落葉樹の一つとして、同じ色、同じ形に冬を迎へようとするものはない。あの銀杏のやうに、もうすつかり幹から枝までをあらはして居るのがある。あの鈴懸の樹のやうに、梢のところに枯葉をとどめて、風でも來れば今にも鳴りそうなのもある。それからあの柳の葉のやうに、まだしよんぼりとして青み殘つて居るのもある。この明るい、枯れがれとした冬の日の面白味はお前達にも解るだらうか、と言つて見た。

『父さん、それくらゐのことは僕等にだつて解る。』

『でも、木の葉が青青として、そこいらに花でも咲いて居なかつたら、お前達にはつまらないんぢやないか。』

私達はこんなことを語りながら歩いた。あの日の散歩は何がなしに樂しかつた。一緒に歩いて居る子供等の背が自分と同じくらゐか、どうかすると自分より高いのを見るにつけても、自分の學生

時代のことを思ひ出した。

學校にのみあまり重きを置き過ぎるのは好くない。それぞれの道を辿つて多くの卒業生諸君のことを思ひ合せても、みんな學校を出てから支度を怠らなかつた。

好い友情は若いうちに結んで置きたい。

學ばうとさへ思へば、誰からでも學べる。生きて居る人からばかりでなく、死んだ人からも學べる。萬人はみな私達の師だ。その中にあつても、學生時代の好い友達から受けた刺激は長く忘れられ

ない。

時は舊い學窓を變へた。そこにある建築物、そこにある運動場――今は殆んど昔の日の面影をとどめない。しかし私が少年期から青年期に移りかける頃の學生時代は、まだそこに殘つて居るやうな氣がする。

私は自分の著作の中に、こんなことを書きつけて見たこともある。

「ふと、思ひもかけぬ美しいものが彼の眼前にひらけた。もう空の色が變りつつあつた。夕陽の美は生れて初めて彼の眼に映じた。彼はその驚きを分けようとして友達の居るところへ走つて行つた。友達を誘つて來て、また二人して山のはづれへ立つた頃は更に空の色が變つた。天は焰の海のやうに紅かつた。驚くべく廣廣とした其日まで知らずに居た世界が、そんなところに閃いて居た。そして、その存在を語つて居た。寂しい夕方の道を友達と一緒に寄宿舍へ引返して行つた時は、言ひあらはしがたい歡びが彼の胸に滿ちて居た……」

この自然の愛も、自分等の學生時代に初めて感知したものではなかつたか。

小屏風の言葉

ある人、部屋に置くための小屏風を造りたいと言つて、八枚ほどの小さな紙の片を私のところへ持つて來た。朝に晩に眺めたいから、何か適當な言葉を書きつけて呉れとのことであつた。見ると、その紙の片にはいろ〳〵な色があつて薄い紫、白、黄、小豆色など、それだけでも飽きないやうな色であるのに、その小屏風を造りたいといふ人は二尺あまりの高さのものに左右四枚づゝを貼りつけたいとの話であつた。その時、私の胸にうかんで來たのは少年時代から好きでよく讀んだ芭蕉集中の言葉だ。それを私は八つの小さな紙の上に書きつけて見ることにした。

靜かに見れば物みな自得すといへり。（養虫の跋より）

予が風雅は夏爐冬扇のごとし、衆にさかひて用ふるところなし。（柴門の辭より）

丁度、深い秋の日のひかりが私の部屋に滿ちて居た。軒を泄れる薄い煙でも、かすかな塵埃でも、庭先にかかる細い蜘蛛の糸でも、眼によく見えるやうな小春日和だ。吹けば飛ぶかと思はれるばかりの極めて小さな虫の群が日の光の中に一團となつて飛んで居た。最早二度も三度も霜を見た庭の片隅には、例年より遲れた山茶花の漸く咲きはじめたのもある。五十一年の生涯を旅に送つたやうな芭蕉のことを思ふにはふさはしい日だ。

古人の跡をもとめず、古人の求めたるところを求めよと南山大師の筆のあとにも見えたり。（柴門の辭より）

愚かなるものは思ふこと多し。（閉關の說より）

春を待ちつつ

青鷺の眼を縫ひ、鸚鵡の口を戸ざさんことあたはず。（句合の跋より）

山は靜かにして性をやしなひ、水は動いて情をなぐさむ。（洒落堂の記より）

朝を思ひ、また夕を思ふべし。（行脚の掟より）

さくらをばなど寢所にせぬぞ、花に寢ぬ鳥の心よ。（花の句の前書より）

『甘き、辛き、しぶき、淡き心の水の淺きより深きを傳へて、終に一掬して百川の味ひを知れるなるべし』とは、芭蕉が『伊勢紀行』の跋にも見える。この小屏風の短い言葉で、しかも限りのある小さな紙の上に、古人の心の深さを盡すことは出來ないが、寒い晩には部屋の隅にでも置いて戸障子の隙間から來る風をふせぎたまへ、風邪にでも冒された日には枕もとに置いて訪ふ人もない時の友としたまへ、と言つて書いておくつた。

戸川秋骨君著隨筆集『文鳥』の序

『青鷺の目を縫ひ、鸚鵡の口を戸ざさんことあたはず、』とか。友人戸川秋骨君はもう長いこと慶應大學その他に教鞭を執つて居て、講座に隱れるといふ言葉も穩當でないほど外國文學の研究者として知られた人であるが、內部に藏する靜思と激情とには抑へがたいものがあると見え、暇ある毎に筆を執り物を書かれたのが積り重なつて『文鳥』一卷となつた。日頃のよしみから、私にその序を書けと言はれる。こころみにこの感想集を開いて見ると、博い學識と多年の觀察とから成つたやうな、物象の明かな世界が私達の眼前に彷彿する。ここには人生を客觀し得た人の好い諧謔と諷刺とがある。

戸川秋骨君著『文鳥』の序

今更私はこの書の著者との長い交りをここに書きつけるまでもない。青年時代の私の周圍にはこの書の著者の他に馬場孤蝶君があり、平田禿木君があり、上田敏君があり、北村透谷君があつた。友達は皆若かつた。私達は互ひに取る道こそ異なれ、同じ翹望と期待とを遠い先の方にかけて共に共に出發したものであつた。こんな若い時分からの著者を知る私に取つては、この書の事に意味深く語つてある言葉――あまりに人生を重く視るな、あまりに眞劍になるものではないと敎へてある言葉に對しても、それをかるがるしくは看過しがたいやうな氣がする。

目まぐるしく、いそがしい今の時代にあつて、この書の中に書きあらはしてあるやうな靜かな『閑暇』を發見した著者は、どんな人生の傍觀者であるかと言ふに、交遊には實に義理堅く、職務には勤勉で、一羽の文鳥の死にも涙をそそぐほど優しい心の持主である。

さうだ、この書のどの頁を開いて見ても友達が居る。私達の友情が結ばれはじめた日から三十六年も續いて來た舊い馴染の友達が居る。これが戸川秋骨君だ、と言つたら、おそらく著者もうなづかれるであらうと思はれるほど、あの友達の平生がこの書の中によく盡されて居る。私は著者とは長い友情を記念するためばかりにも、この書のはじにいささかの言葉を添へるといふことに深い歡びを覺えるものである。

跫音

（鷹野つぎ子著小説集『悲しき配分』の序）

A　跫音がする。

B　あれはお前の弟子の跫音ではないか。

A　私に弟子はない筈だ。私には師といふものがなかつた。だから自分でも弟子は持つまいと思ふのが私の日頃の願ひだ。より勝つたものと成るために、自分等から弟子を逆かせたいと言つた人もある。私が弟子を持つまいと願ふ心は、いくらかあの言葉の意味に近い。

B　それにしても、あれはお前がよく知つて居る跫音のやうな氣がする。

A　私があの跫音を近く聞いて見たことは、これまでに二度しかない。一度は私が木綿縮の單衣で暮して居たやうな暑い頃のことであつた。その時、私は初めてあの跫音を聞いた。あれは私の方へ來る前に一年も二年も躊躇した後で、それから漸くやつて來たやうな跫音だつた。しかも夫といふ人に伴はれて、極遠慮勝に歩いて來たやうな跫音だつた。一度は冬の日で、年齢も違へば氣質も異つたいろいろな若い人達が同じ目的のために集まつたことがあつた。前の晩に降つためづらしい深い雪がそれらの人達の集まつて來る道を埋めた。その時も私は、いそいそと雪を踏んで來るその跫音を聞いた。留守居する夫に子供を預けて來る心づかひから、朝も早く起き、自分の家の前の雪から近所に降り積つた雪までもかいて置いて、それからいそがしく支度して來るやうな、それほど元氣

春を待ちつつ

と熱意とがある跫音に籠つて居た。

B　ほんとに、跫音ほどその人をあらはすものはない。あるものはためらひ勝ちに、あるものは短氣に、あるものは又忍び足して靜かに靜かにと地を踏んで來るやうに聞える。その跫音を聞いたばかりで、私達は近づいて來る人を感知することが出來る。

A　さういふお前は、あの跫音の中に何を聞きつけたか。

B　私には、あれがたゞ婦人の跫音であるといふばかりでなくて、これから來ようとするものの前觸れの一つのやうに思はれてならない。私はあの跫音を聞いて居るうちに、今日までの多くの婦人のことを考へる。ああいふ跫音の多くは、ただそれが婦人であるがために注意された。何故だらう。今日までの多くの婦人はただただ人を悅ばすためにあつたからではないか。婦人自分もまたそれに

狂れて、むしろ人の注意をひくことを得意として來たかのやうに思はれる。御覽、私達が今聞くあの跫音には、すこしもそれがない。あれは細い細い一筋道を脇目もふらずに歩いて來るやうな跫音だ。もう長いこと、せつせと支度を怠らなかつたやうな人の歩いて來る跫音だ。地を踏みしめ踏みしめして來る人の跫音だ。

A　さうだ。若い時代が歩いて來るのだ。私は多くの期待をかけて、あの跫音を聞いて居る。

老年

（故ケエベル博士の言葉をここに摘錄する。老年といふことに就いて、これほどなつかしい言葉も少いと思ふからである。）

『年を取ると、人は自然に青年時代よりも屢々『此處』からの離去と『彼處』の事について、もしくは更に適切に言へば、此處から彼處への過渡は如何にすれば最も合理的に且つ最も容易に——出來得る限り荷厄介を少くして——爲し得られるかに就いて考へるやうになる。かくの如き思念は何等不安を催さしむるものではない。また老齢は、それが全然無益且つ無價値に過ごされたる生活の結尾でない以上は、決して不幸なものではない——それにはまたそれ相應の善き點もあり悅びもある。——けれどもそれはまづ心靈の上に朗かな落つきが、海の靜けさが、生じたる後、初めて享受し得られるものである。かかる地上に於ける淨福の狀態を知らずして、その消え去りし青春を顧みて嘆息する所の老人を見るは慘めなものである。本來ならば何れの老人も老齢讃美の文を書き得べき筈である、しかし彼にしてそれを能くしないならば、彼はそれによつて己が生涯の上に手痛き批評を加へたことになる。

——人はよく年老いたる人人に同情を寄せ、彼等は定めし非常に心淋しくなることだらうと考へる。彼等の周圍の物は總て、彼等にとつては再びそれと認識し難い程に新しくなり若しくは變つて居る。ヘッベルの戯曲『マリーア・マグダレーネ』に於ける親方のアントンの如くに、彼等も『世の中はもう解らなくなつた』のである。長生きをする人が、多くの人の後に生き殘りて多くの事を經驗するのは勿論である。されば老齢は慘めなものとも言ひ得る。けれどもそれは必しも慘めであらねばならぬのではない、また、死は生の終りではなく、寧ろ新しき生の初、もしくは——更に適切に言へば——從前の生の新しき形に於ける繼續であり、且つ後に殘れる者との關係及び交通を中斷するものではないとの確信を懷ける人にとつては、慘めではなからう。——して見れば老人の信條の

第一は『余は余の本質の、余の精神と余の人格との不滅を信ずる』であるべき筈である。永生を信ずる者は、『世界恐怖』(Weltangst 世の中に起る凡百の事象に對する恐怖)を、あらゆる恐怖中最も不定であり、最も名狀し難きものなるが故に、最も恐ろしきこの恐怖を超越する。——老齢は淋しさを感ぜしむるものではない、——それは寧ろ我等が愛する者の範圍を擴大する、また遠き過去にまで達する上、老齢に至つて驚くべく鋭敏となれる回想力はもう疾つくに消え去つたものをば一種の魔力を以て再び喚び起すのである。これは老齢に於て初めて賦與さるる所の神々しき天禀である——それは即ち、もはや何者によつても濁らされず、空間と時間とを超えて飛翔しさうして我等が自分の思慕する總ての人をば再び蘇生せしめ、我等の傍に呼び返すことを可能ならしむる所の愛である。老人は彼等と交はつて居る、さうしてこの交はりを快く感ずる。されば我等は、一定の年齢に達したる多くの人が最早社交に堪へなくなつて世間から退隱するのを見るも、それを不思議がつてはならない。我等老人に向つて、我等の最早理解しない又我等を理解しないやうな世間に生きることを要求するのは不當である。『憎惡の念を懷かずして世間に對し自らを閉鎖するといふこと』は

必ずしも利己主義であり人間嫌ひであることを意味しない——『世間』は我等を要せず又我等は『世間』を要しないのである——『世俗の人』にして能く此事を理解し得る者は極めて稀である。それは、假令ネストルの高齢に達するも、本當に老人らしくなる者は彼等の中の極く僅小部分であり且つその大多數は未だ曾て本當に若かつたことは無いからである。

——老人には尙ほ亦外に幾多の歡喜がある、さうして其等は何等の形而上學的もしくは宗教的信仰を前提することなく、寧ろ經驗的現在たる日常の環境の裡に得られるものである。例へばその經驗や、その知識や、その忠言や、その教導やによつて——更に好きは、自ら模範となつて——後進者のために盡したとの意識の如きは一つの高尙なる歡喜ではあるまいか。しかも十分この歡喜に與り得るは獨り老人のみであつて、年若き人ではない。——我等にして猶其上に、此世に於ける我等の巡禮の終りに於て、我等にとり眞實の友となり。且つ『暗い家に達するまで』忠信なる生涯の伴侶となる如き年下の道連れを(恐らくは往年我が教へた者の中に)見出し得たならば——この幸福こそは優に青年時代に屬する一切の歡喜を償うて尙ほ餘あるものであらう我等が我等の年下の伴侶の

後に生き殘らずして、彼等が我等の後に生き殘るであらうとの豫想もしくは正當なる期望すらも、老齢に於る落着きと朗かな氣分とを助成するところが多い。

――『人生の各時代は夫々之に相應する一定の哲學を有する』とゲーテは言つて居る。小兒は現實主義者、青年は理想主義者、壯年は懐疑主義者である、――『老人はしかし常に神秘主義を奉ずるであらう。さうして在るところの、在りしところの且つ在るであらう所の者に於て安心を得るのである。』正しい感情と思考とを有し、正しい生き方をしてゐれば、人間は極めて徐々と精神的發達とのこの最後の階段に達する――凡そ六十歳頃に――さうして意識して其處に止まるのである、何となれば流行の『考へ方』を追ふのは、服裝の上に於けると同じく、老齢者にはふさはしくないからである。彼は過去の中に生きる、しかも是れ實は青年も、また何れの人も爲すところである。未來は未だ在らざるもの、現在は總じて唯だ思惟されただけのもので、何等現實なるものでも、固定せるものでもなく不斷の推移、不斷の流動である――『現在は矢の如く飛び去り、過去は永へに止まりて動かず。』在るは獨り過去のみである。されば亦我等は獨り其中にのみ、我等の生活と活動とに必要なる資料と力とを我等に供給するところの確固たる基礎と立脚地とを有するのである。『飛び行くものを友となし、止まるものを敵となす者』は禍なる哉。己が民族と人類との過去に於ける善きもの及び偉大なるものを拋棄して、逝けるものを忘るるところの世代は禍なる哉。』

言葉

詩を新しくすることは、私に取つては言葉を新しくすると同じ意味であつた。

過去の言葉の暗さ。往時を追想すると、言葉は弄ばれ、磨りへらされ、踩みにぢられ、意味もなしに繰返されて居た。そこには何等の言葉の愛も見出されなかつた。

唯、本質に對する感じを新鮮ならしむることによつて、それを直接に私達の生命からつかんで來ることによつて、僅かに言葉の魂を甦らせることが出來よう。それに新しい意義を賦與することも出來よう。

『春』といふ言葉一つでも活きかへつて來た時の私のよろこびは、どんなだつたらう。

蕉門の諸詩人が言葉の感じの鋭さ。『わび』、『さび』、『にほひ』、『ひびき』、『うつり』、『おもかげ』、『しをり』、それから『細み』などの言葉の感情と、その陰影とを見よ。

舊い言葉を壞さうとするのは無駄な骨折だ。ほんたうに自分等の言葉が新しくなることが出來れば、舊い言葉は既に壞れて居る。

創作

ある著作が人生の好い記錄であれば、その事が既に尊い。それが創作と言はれるほどの域に達したものならば、更に尊い。多くのすぐれた人達の書いたものを見ても直に創作として許すべきものはその人達の全生涯を通じて數へるほどしかない。それを見ても、創作の難いことが今更のやうに感じられる。

チエホフの『三人の姉妹』

チエホフの『三人の姉妹』は私が愛讀する戯曲の一つだ。私は『櫻の園』よりも『三人の姉妹』の方を好む。あれを舞臺の上に見たアンドレエフが、これこそほんとうの人生だと言つて、涙の流れるのを禁じ得なかつたといふ心持も、うなづかれる。

ストリンドベルクの童話集

ストリンドベルクの童話集も私の好きなものの一つだ。あの『痴人の愛』を書き、『父』を書き、『マドモアゼエル、ユリエ』を書き、男性と女性の爭鬪を極度にまで持つて行つた作者が、最後にあのいふ靜かな光を帶びた童話を書くやうになつて行つたその徑路を辿つて見るのもおもしろい。私は舟木重信君の譯によつて、『眞夏の頃』や『木燕が刺空木に來た時』のやうな象徵的な童話を味つた。あれは童話の世界に一新境地を開いたものだ。トルストイの童話集も私の好きなものの一つだが、ストリンドベルクのはまた別の味があつていい。

眞の人間を書くことに

眞の人間を書くことに骨折りたいとトルストイは言つたといふ。ある時は人間を天使にまで持ちあげる、ある時は人間を惡魔として踏みつけるやうなさういふ見地から書かれたものは假令その人間の衝動がどんなに生き生きと書かれてあつても、長くは私達の心をひかない。そして、さういふ衝動が色濃く塗つてあれば塗つてあるほど眞の人間といふものから遠いやうに思はれる。

思想と人物

その思想に於てはクロポトキンを取り、その人物に於いてはバクウニンを取ると言つた人もある。思想の混濁は、そもそもこんなところに始まるものではなからうか。クロポトキンの人物からではなしに、どうしてクロポトキンの思想が生れて來よう。

秘　密

『一度秘密を見つけ出すと、絶えず働くことが出來るものです。』

とロダンは言つて居る。この秘密が創作上の奥儀とか秘訣とかにあるのではなくて、廣大で無盡藏な自然の中にあることは言ふまでもない。

『プウシキンこそ吾々の教師である』

片上伸君の近著に一卷の『トルストイ傳』がある。その中に、トルストイ一家のものが集まつてプウシキンの物語を讀む一節がある。

『丁度そこへトルストイが來た。何氣なくその書物を取り上げて見ると、丁度開いてゐるのはプウシュキンの散文の中のある未完の斷片で、『客人は村莊へと集り來りぬ』といふ書き出しのところであつた。それを見てトルストイは、書き出しはこの通りでなくてはならぬ。プウシキンこそ吾々の教師である、行きなり讀者を事件の中心の興味へ誘うて行く、他の作者なら一人一人の客のことや室のことなどを細々と先づ書くのだが、プウシキンは單刀直入に事件の中心へ入つて行くと言

『プウシキンこそ吾々の教師である』

つた。それを聞いて、そこに居合はせた誰かが、それぢやあなたもさういふ風にして一つ書いて御覽になつてはどうですかと言つた。トルストイは直ぐ自分の部屋に閉ぢ籠つて、即刻『アンナ・カレーニナ』の最初のところを書き出した。その時に書かれた最初の書き出しは、『オブロンスキイ家の家の中は何もかも騒ぎであつた、』とあつたが、後になつて、今のやうに『凡ての幸福な家庭は互ひに相似てゐるが、どの不幸な家庭もそれ〴〵別々に不幸である、』といふ一句を前へ書き足したのである。』

これを讀んで見ても、トルストイの求めたものを窺ふことが出來やう。又、それが偶然に得られたものでないことをも知ることが出來やう。トルストイを愛するものは、彼の著作を愛讀するに止まらないで、彼の求めたものを求めなくてはならぬ。

『プウシキンこそ吾々の教師である、』とはトルストイらしい好い言葉だと思ふ。

先輩と考へて見ることによつて

自分等の後から歩いて來る新しい人達のことは、位置を轉換して見ることによつて、一番よくはつきりと分つて來る——則ち、それらの人達を自分等の先輩と考へて見ることによつて。

才能を有するものはまた勇氣をも有する筈である

『才能を有するものはまた勇氣をも有する筈である。彼はおのれの靈覺に信頼せねばならぬ。彼はおのれの腦裏にひらめく意象が健全なものであることに氣づき、自然に彼に生れて來た形式は――よしそれが新規なものであつても――その要求を主張すべき權利あることを確信せねばならぬ。彼はおのれの天性に隨つてその導くままに歩み行くことの出來るまでは、先蹤のために負はさるる影響の重荷を負ふことはおろか、邪路にすら彼自身を曝すほどの勇氣を獲得せねばならぬ。』

これはブランデスがあのアンデルセンを評するに當つて、その前置きのところに書いた言葉の一節である。そのブランデスの言葉の續きには、こんなことも書いてある。

『曾てアルマンド・カアレルといふ少壯な新聞記者があつた。その記者は自分の書いたもののために主筆から譴責されたことがあつた。主筆は青年記者の筆になつた記事の一節を指しながら、「これは皆の書き方とは違ふ」と言つて見せた。すると、記者の答へには、「自分は、皆の書き方によつて物を書かない、ただ自分の書き方によつて書いた、」――と。これがその人の返事だつたのである。そして、惠まれた性質を有するものの一般の信條はまさしくこれである。そは際物的な芥屑や氣まぐれな創作などを相手としない。傳統による形式でも既成の材料でもその自然の特有な要求にはふさはしくないとなると、その時こそ才能の權利をあらはして來る。そしてその力のすべてを養ひ育てて行くに適したやうな分野を見出すまでは、又心靜かにも自由にもその力を發育せしむるまでは、意識して新しい材料を選び、新しい形式を創り出さうとするものである。』

これから筆を執り物を書いて出ようとするやうな若い人達にとつて、これは好い勵ましの言葉と思ふ。古大家の書き遺したものに就いて見ても、これこそほんとうの人生だと言はれるやうな創作は、その人の全生涯を通じてさう澤山あらうとも思はれない。そんな容易でない注文を若い人達の

前に持出さうとするやうな私でもない。けれども、目標だけはすくなくも高いところに置きたいものだ。そして互に好い出發をしたいものだ。

齋藤緑雨の言葉

『若いうちは少しは氣障なくらゐであれ。』

とは齋藤緑雨の言葉である。さすがにこの世に苦勞した人の言ひそうなことである。

口語と詩歌の一致について

吾國に所謂、言文一致とは、必ずしも言詩一致、もしくは言歌一致と同じ意味のものではない。その理由は、もともと言文一致は散文のためにあつたやうな歴史を有するからである。明治年代に言文一致を唱へた最初の人の一人は山田美妙齋で、あの人は散文ばかりでなく詩も試みたから、特に言文一致が散文のために創始せられたわけではなかつたかも知れない。長谷川二葉亭となると、あの人の力は主として散文の方面に傾けられた。それ以來、言文一致を試みようとした明治年代の文學者の苦心は、いかにせば言葉と散文とを一致させ得るかであつたと思ふ。今日の詩人はこのことを忘れてはなるまい。

今になつて見ると、いかにも言文一致の文體なるものが散文に適合して居るやうではあるが、その發達にはかなり長い歴史がある。この言文一致の文體の組織はそのまま詩歌に應用し得るか、どうか。それが私には疑問だ。もしここに一人の詩人があつて、その人は言文一致の歴史なぞを顧ることもなしに、その組織を直ちに詩歌の上に移さうとしたとするならば、その人の書いたものは勢ひ散文的に流れないわけにはいかないだらうと思ふ。何故かなら、今日の所謂言文一致なるものは一種の構成された文體であつて、言葉と詩とを一致させるための苦心といふものは殆んどそこに缺けて居たのであるから。

一體、言文一致の文といふ言葉は、言語に對する文章といふほどの廣い意義のものであつたと思ふが、自然の推移の結果として、文字通りの散文を意味するやうになつてしまつた。そこで今日の詩人に取つては、言詩一致、もしくは言歌一致といふことに、多くの散文家が費したとはまた別の苦心と努力とが必要になつて來ると思ふ。

吾國の象徴主義

この頃、わが國の文化の特長を說いて、それを象徴主義に歸し、支那の現實主義と印度の深秘主義に比べてあつた田中王堂氏の論文を讀んだ。おもしろい著眼と思つた。その論文にはわが國特有の象徴主義を代表するものとして、茶室、俳句、錦繪を擧げてあつたやうに記憶する。

この大體論には多くの暗示を含んで居ると思ふ。茶室、俳句、板畫を擧げて、わが國の工藝美術を省いたのは惜しい。松花堂、宗達、光悅、乾山、光琳、抱一などの殘した仕事はもつと識者の注意をひいてもいい筈だと思ふ。

茶人の言葉

一。わび。
二。さび。
三。からび。

古い茶人の心を傳へたものとして太田貞一君が上記の三つの言葉を私に擧げて見せて呉れた。第一のわびと、第二のさびとは耳新しくもないが、第三のからびとはめづらしい言葉と思つた。いろいろな漢語を思出してあてはめて見ても、ちよつとこの『からび』の味は盡せそうもない。しめやかで、しかも力のある古人の心の響が聞かれるやうな氣がする。

これも古い茶人の言葉とかいふ『和ぎて流れず、敬して諂はず、清くして潔く、寂にして躁しうせざれ』の教訓めいたものよりも、『わび、さび、からびの三つの言葉は遙かにうれしい。

消極と積極

隱れ居て木の實草の實拾はゞや
あかあかと日はつれなくも秋の風

この二つの句にあらはされた詩のこころをたづねてみるのに、ほとんどそれが正反對のものやうであつて、前者は退いて隱れようとする人のすがたであり、後者は進んで往かうとする人のすがたのやうに見える。消極と積極。どちらが果して詩人の眞面目であらうか、と私は自分で自分にたづねて見たことがあつた。

私達のこころが沈んで、苦しみなやんで居るやうな時には、前者のやうなのを詩人のまことのす

がたと考へたい。そして他を顧みようともしない。私達のこころがすこしでも勇み躍つて居るやうな時には、後者のやうなのを詩人の眞面目と考へたい。そしてまた他を顧みようともしない。おそろしい獨斷だ。前者の場合にあつては、この世の旅のつれない艱苦に直面し、冷い無常の風を冒してまでも、猶且つ自已の欲するところに徹して行かうとするやうな、熱い意を持つた、精神的な冒險者のあることを忘れて居る。後者の場合にあつては、光る木の實を寶とし色づいた草の實を寶として、一切を人の見るままに任せ置き、默々としてこの世を去つて行くやうな藝術家のあることを忘れて居る。

相聞の歌

茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる
古に戀ふらむ鳥か霍公鳥しや鳴きし吾が戀ふる如

この古歌の美しさは何處から來るだらう。萬葉集に相聞の歌は多くあつても、この額田女王の古歌ほど美しいものはすくないかと思ふ。優しく、女らしく、しかも複雜な感情の陰影は何とも言つて見ようがない。そこには深い背景のあることも感ぜらるる。

『人形の家』を讀みて

（大正十二年六月、山の上のある講堂にて）

私はしばらく病氣した後でして、ちよつとこの山の上まで保養に出かけてまゐつたのを機會に、ここで皆さんにお目にかかることをうれしく思ひます。そして近代の歐羅巴の文學者の中でも最も近代的なと言はるる人の創作についてお話して見ることを樂しく思ひます。

ずつと長い長い世紀の間、婦人は古い慣習の中に閉ぢ籠められて、長いこと眠つて居ました――それは世界のどこでも同じでしたが――その婦人が目覺めて來たことは近代の著るしい事實であります。これは歐羅巴諸國をはじめ亞米利加にも見られる現象であり、亞細亞と申せば我々の國ばかりでなく支那、印度、瓜哇、其他東洋のあらゆる所に婦人の覺醒がおこつて、深い窓に眠つてゐた婦人の眠を――その窓の扉を叩きに來た人はすくなからずあります。私がここでお話したいと思ふイブセンもその一人です。この人は一八二八年に北歐の那威の小さい町に生れ、そして一九〇六年に七十九歳で死去したのです。その一八二八年は我々の國ではいつごろのことかといひますと、德川時代の文政十一年の頃にあたります。またこの人の死んだ一九〇五年は明治三十九年で、丁度私が小諸に七年ばかり暮してその後東京に出ました時分に當つて居ります。最早その時分に、今日私がお話しようとする人は沒して居ります。この人が婦人の眠つてゐる窓を叩きに來た時は五十二の歳でした。このイブセンは世にも寂しい孤獨な生涯をおくつた人でした。自分の國を離れて、獨逸へ、伊太利へ、といふ風に殆んど半生を旅で暮したやうな人でした。ただ晩年になつて故郷にかへり多少おちついた心持を味ひ得た位で、其の間旅から旅へと假の寓居を求めて歩いたのであります。こんな孤獨なしかもかけはなれた生涯をおくつて來た人がどうして時代の精神によく接觸して、五十歳にもなつて眠れる婦人の窓を叩く人になつたのでせうか。

不思議にも、イブセンの嘗め盡したやうな孤獨は、反つてかういふ人の精神には必要なのであり

ました。その孤獨な地位に立たせられたことから、世の中を離れて反つて世の中の眞相を見拔くといふ才能をめぐまれたのがイブセンであります。この人の、天性周圍のものから離れて立つてゐるといふその生れつきは、この人の歩いた道を餘程獨異なものにしました。その寂しく立つて居る位置から、イブセンに獨特な遠近法が見出されたのです。それが却つて其の人を造り出すことになつたのであります。そしてこの孤獨なしには、寂しい生涯なしには、この人のもつて居るものも十分な發達は遂げられなかつたらうと想像せられるくらゐであります。『最も強い人とは、此の世に唯一人立つて居る人だ』といつてゐるこの言葉の中にも、イブセンの姿がよく表はれて居ります。

それでは、イブセンがどんな風に眠つてゐる婦人の窓を叩きに來たかと申しますと、この人は別に婦人に對して宣傳を試みようとしたのではありません。唯、眠つてゐる人達のために一つの鏡を置いて行つたのであります。さてその鏡の中にはどんな人が居たか。それを今日はお話しようと思ふのです。

その鏡の中に映つて居る婦人こそノラであります。ノラの姿を寫して見せる鏡は普通の滑らかなものであるか、どうか。私達はこの鏡をよくしらべて見たい。さういふ鏡を置いて行つた人の心持をも、それからその人の立ち場をも多少考へて見たい。このイブセンがノラを出してからの社會に及ぼした影響も最初から可成強いものであつたのです。こんな話があります。瑞典のある一人の夫人がお茶の會の招待狀に、イブセンが最近に出した作のことに就いては御遠慮下さるやうにと書いたといふことです。それ程あの作が顯れた當時からやかましかつたものです。つまり、これはイブセンの映して見せた鏡に人生の眞實がうつつてゐるといふことであります。これを見る人は、めいめいが其の偏見を捨てない限りは、鏡にうつる姿を正視し得ないといふことになります。まためいめいの持つ虚僞を意識するにも堪へられないのであります。どれ、私はこれから、どんな人達の姿がその鏡の中に映つて居るかをお話して見ましやう。

鏡の中には先づヘルメルといふ辯護士の住宅の部屋の一つが寫つて居ます。それはクリスマスの前の日で、非常にしあはせな幸福な家庭で、其處へ子供のためにクリスマスを祝つてやらうと買物から歸つて來る婦人があります。それがノラの舞臺に立つ最初でして、「人形の家」の第一の幕、一

番はじめの所であります。この若い細君が八年ばかし前には、旦那さんもまだ若い辯護士で居た頃で、色色苦勞も多い家庭でしたが、年が明けると旦那さんはある株式會社の頭取になるといふ幸運がめぐつて來たのです。旦那さんが頭取になれば細君は子供にも色色買つてやれるし、どんなによいクリスマスが祝はれるだらうといふ明かるい希望にみちた所から第一の幕は始つてゐます。

イブセンのこの脚本の書き方は蔭日向の多い、生き生きとしたものであります。單純な寫實と違つて、作中の女主人のノラがもう嬉しい時なんか子供といつしよになつて飛び跳ねるやうに書いてあります。舞臺の上で鬼ごつこなぞして自由自在にあそびます。

この女主人公は學校を出てからもう八年にもなり、家庭をもつて若い母である程の年配ではあつたが、子供の樣な婦人でありました。旦那さんからは家のリスといはれて居るくらゐの子供らしい所をもつた人でありました。しあはせな望に滿ちたこの家庭へリンデといふ婦人がたづねて來ます。その人はノラの幼な友達で、ずつともう長いこと會ふ機會のなかつた人です。ちよつと見た時にはあんまりしばらくであつたので、顏もよくわからなかつた程、そんなに長くわかれてゐた人です。

リンデ夫人はこの世のつらい波風にあひ、家は破產して、しかも旦那さんは亡くなられたのでした。そこで色々リンデ夫人が身の上話をはじめ、さんざ苦勞したことをノラに話します。旦那さんは亡くなり、子供も亡くなり、なんにも殘つてゐない。過去の一切はからつぽである。リンデ夫人の家庭生活には樂しい思ひ出さへも殘つてゐない。そんな苦勞をしても何か仕事を探がして敗殘の生活を建て直さうとしてやつて來たといふ話がそこへ始まります。實際リンデ夫人から見ればノラはしあはせさうである。ノラもうれしくてうれしくて仕方がない。どんなに來年は家庭が幸福になることかと思はれる。リンデ夫人は『お前さんは、昔のノラさんとちつとも違はない。何時までも暢氣で若若しくて』といふとノラが『さう見えるかも知れないけれども、かげではこれでも色々苦勞してゐます。これまでになるにはほんとに色々苦勞して來たのです』と話します。それから『どんな苦勞したのですか』とリンデ夫人が聞けば、ノラは實は『旦那さんに內證で、旦那さんの病氣をなほすために金をこしらへました』といひます。夫ヘルメルは、大煩ひして、伊太利の方へでも行けばなほるし、さもなければなほらないとまで醫者にいはれたことがあつたのです。『その時分はまだ夫も貧

しく伊太利へ旅をするお金がありませんでした。そのために四千八百クローネンのお金を自分でこしらへました』といひます。そしてこのことは旦那さんには内證で、とにかく旦那さんをしあはせにさへすればよいのだから、こしらへたといひます。『それでは旦那さんに一生默つてゐるつもりですか』『それではいつお話になりますか』と聞かれますと、ノラはいかにも子供らしいところの性質をあらはして、『自分は今は家の雲雀とか何とかいつて、チヤホヤと大騒ぎをされますが、今に年をとつて旦那さんが構つて呉れなくなる時が來るにきまつてゐると思ひます。その時こそ自分は嘗てかういふことをしたといつて話さうと思ひます。それまでとつておくつもりです』と返事をします。『それには高い利息を拂つて居ります。けれども來年になれば旦那さんは頭取になるのですから、きれいに拂つてしまはれます。とにかく今は苦しいのです、四百八十クローネンもはらつて居りますもの、それには他に必要な小使をもさいて工面して居ます』などとリンデ夫人に話します。『所がまあ誰れでも好い着物はきたいものですね、とにかく旦那さんがくれたお金の半分は利息の方へ廻して、のこりの半分でいろいろ買はうといふのです。ごく安くて柄のよいものを見つけました。しあはせなことには何を着てもよく見えるものですから、旦那さんはそんなこととは氣がつかずに、よく似合つてゐると言つてくれます。かうして苦しい中でためておく高い利息をはらつて旦那さんをたすけて來ました。これを旦那さんが知つたならおこるにきまつてゐます。内證で作つたといふことを知つたなら腹をたてます。ですからこれはこのままでおかうといふことにしました。かう見えてもなかなか苦勞して居ます。と話します。色々話して居る中にリンデ夫人はかういふ樣に自分の生活が何もかもこわれてしまつたものですから、何かこの町へ仕事を探がしに來たのがこの自分ですそしてあなたの旦那さんの頭取になられるといふことをおききしました、一つ旦那さんにお話して銀行の何かに使つてもらふ樣におたのみしてみて下さい』とノラに頼みます。『そんなことならわけなく出來ます。安心していらつしやいよ』とすぐ話はまとまります。それからノラは可愛い子供もあるし、來年になればお金の借もはらへてしまふ、といふ好いことだらけで、子供を相手にいつしよに子供の部屋で戯れて居ます。

そこへ、ノラに取つては、以前に旦那さんのヘルメルが大病をした時にお金を借りたクログスタッ

トが入つて來ます。不意に舞臺の上に薄暗いものが入つて來た樣にそれが書いてあります。ノラはクログスタツトにききます。『何の用で來たんですか』と。利息はこの人に拂ふはづでした。『利息はちやんちやん拂つてあるではありませんか』といひます。實はこの人は旦那さんの銀行でつとめてゐる人ですが位置が危くなつて來てゐたのです。リンデ夫人の來た爲にもしや自分の位置にもと心配になつて來たのです。『一つ奥さんの力でおはからひ下さい』と無理にもそれをノラに賴まうとして居ります。でもクログスタツトのことは旦那さんには内證で居りますから、いひにくいことですし、それに幼友達のリンデ夫人をさしおいてクログスタツトを旦那さんに勸めることも出來ないのです。クログスタツトはノラの暗い秘密を握つてゐる所がありますから、『さういへばまあ奥さん、貴女は御記憶が悪いのですね、さうすれば事件の根本をはつきりさせなければなりますまい。』といつておどかします。それからクログスタツトに入れた證文の話をします。それはこのノラのお父さんが病氣で亡くなるといふ時に、旦那さんも亦病氣で伊太利へ行かなければならないといはれた時でした。こんなことを大病のお父さんに話して心配をかけたくないと思つて、とうとうノラは話さず仕舞に

して、そしてお父さんのなくなつた後でお父さんの署名をしたのです。お金を借りた證文に、お父さんの保證すべきところをノラが自分でお父さんの名を書いたのです、それはお父さんがなくなつてから三日後のことであります。これは僞署の罪でありましても、ノラはそんなに悪い事をしたと自分では考へませんでした。自分では妻として娘として夫を思ひ父を思つてしたことが、そんなにも悪いことなのか。ほんとうに夫たるものを救ふために、自分はむしろ善いことをしようとした。父の名を保證に書いただけで、そんなことが法律上の僞署に當るだらうか、とノラは考へます。ところがクログスタツトも同じ私書僞造といふ罪でこの世をしくじつた人であります。そして今はこの銀行に下廻りを勤めてゐるのであります。そして若しも自分のいふことを旦那さんにきいて貰へなければ默つてはおけないと言ひ殘して、クログスタツトはそこを歸つて行きます。樂しいクリスマスを待つ心持ともしこの眞相をぶちまけたらどういふことになるかといふ懸念の間におかれて第一の幕が終つて居ます。

第二の幕の舞臺面は前と同じ部屋です。ノラ夫婦の住む二階には、スウェーデンブルグの領事の人形の家を讀みて

家族が住んで居ます。その領事の家族の許でクリスマスのお祝に、假裝の舞踏會が催されるはづで、ノラはナポリの漁師娘に扮して伊太利へいつてゐた時に覺えて來たタランテラの踊をおどるといふことになつて居ます。その仕度をして居る所で第二の幕がひらけます。其の時のノラの心持は色々です。どんなに假裝の舞踏會での自分の思ひ付きがすばらしいといつてみんなからもてはやされるだらうといふ胸のとどろき、また來年になればといふたのしい希望、そして一面には例のクログスタットから證文の件でおどかされたことが氣にかかつて居ります。そこへ旦那さんが入つて來ます。するとノラはしきりに『クログスタットの位置をどうか止めさせない樣にして下さい。あんな惡黨は何をするか知れません』とたのみますけれども、旦那さんはノラが以前に金を借りてゐるなどといふことはすこしも知らないので、『そのことならよい、あれは仕方がない奴だ、あんな奴の首は早く切らうと思つてゐる』といひます。ノラはもし新聞に惡い評判でも書かれるとどうするかといふ樣なこともいつてなだめます。其の時に旦那さんはクログスタットを免職させる通知書までポケットの中にもつて居ます。ノラがそれをいろいろに取りなしてゐる場面で、旦那さんが自分の部屋の方へ行つてしまつた後へ、クログスタットが入つて來ます。それからノラは『御用は何でせう』ときます。『お金の利息はちやんちやん入れてあるではありませんか。お金を今みんな返せといふのですか。今すつかりといふことは出來ません。來年にはみんなはらつてしまひます。それまで待つて下さい』とも言ひます。その時、クログスタットのいふのには、『金は今そつくりお拂ひ下すつたとして、とにかく證書だけはおあづかりしよう。』『それをあづかつてどうなさるんですか。』『あづかつてみたいからあづかる』といひます。『實はここに旦那さんあてに書いた一通をポツケットの中に入れてもつて來ました。』とクログスタットは言つてそれを取り出してノラに見せます。その手紙には、ノラが金をかりて、夫をたすけようとしたことをあらひざらひ書いてありました。『どうか奥さん、この手紙を出すのがおいやなら、私はもう一度もとの立場をほしいのですから、もつといい位置へつけることを旦那さんにたのんで下さい』と言ひ置いてクログスタットがそこを出ていつた後へ、リンデ夫人が入つて來ます。リンデ夫人は、ノラの顏色の惡いのを見てたづねます。その時、リンデ夫人は一切を聽取つて、お前さんは大變なことをした』と申します。ノラ自身もクログスタットから

おどかされる度に、それでは自分は悪いことをしたのかといふことが段段考へられて來たのです。そこでノラはいひます、『もしもどうかいふおそろしいことがあつて、この私が氣がふれて變なものになつてしまふやうなことがあるかも知れませんが、その時には自分の證人になつて下さい』とたのみます。その意味が、そのノラの心持がリンデ夫人にはよくわかりませんでした。ノラは萬一の場合を考へて、人知れず死を覺悟するやうになつて行つたのです。何故かなら、もしも自分のしたことが一切夫に知れて、夫を思ふために作つた金だといふことがわかつたなら、日頃愛してくれる夫のことだからそれは俺が書いたのだ、罪は俺が着るといつてくれるにきまつて居る。それを默つて見てゐるわけには行かない。それがノラの死を覺悟するやうになつて行つた心持で、リンデ夫人に保證を賴んだのもその萬一の場合を言つたのです。さうすると丁度クリスマスの前の晩で、假裝舞踏會へ出る仕度をしてゐるごたごたの最中に、事件がおき上つて來ます。郵便が來ます。ノラは何かクログスタットが旦那さんにうちあけたその手紙を入れたにちがひないと心配し出します。それを見させたくないと思つて、旦那さんに色々と言つて、どうも着附がうまく行かないことの、ナポリの漁師の着物を旦那さんに見てもらはなければほどよく行かないことのと、しきりに言つて一刻でも自分の秘密にして居ることが破裂しない樣にと努めます。その時懷中時計は夕方の五時をさして居りました。五時から十二時には七時間、翌日の十二時までに二十四時間、都合三十一時間が自分の命かしらとノラは沈んで考へます。これで第二の幕は終ります。

この「人形の家」は三幕あります。もう一幕、その最後の幕をお話する前にイブセンと他の寫實家とを比べて、作品としての鏡の中に映つて居るものが奈樣な內容のものかといふことをすこしお話して見たいと思ひます。

イブセンの生きてゐた時代の空氣はさう穩かなものではございません。今日世界の大戰の後をうけて私達の國にまで激しく押し及ぼして來て居るやうな時代の動搖は、決して今日に始まつた現象とばかりは考へられません。斯うした時代の空氣の重苦しさは、假令その時その時の深淺厚薄の度こそ異なれ、既にもうイブセンなどの經驗して行つたことで、その事は婦人の問題、勞働の問題、其他社會の問題の歷史に就いて多少なりとも注意するものの直ぐに想ひ到るところのものであります

す。今日私達が頭をなやまして居るやうな種々な問題は、それが形を變へ向き方を變へて、イブセンの生きて居た時代の那威にも起つて來て居たのです。さういふ複雜な、いろいろの思想の入り亂れた時代の空氣の中で、どういふ社會觀を抱いたのが『人形の家』の作者でありましたらうか。イブセンの書いたものにはハウプトマンの『織匠』のやうな題材を取扱つたものがありません。單なる愛情を愛情として寫したものも見當りません。人間の營む有機的な生活―それがいつでも主題となつてあらはれて來て居ます。そしてイブセンは常に少數なものの味方としてあつたのです。イブセンほど虛僞な生活を排した人もすくない。宇宙の暗い所を探らうとするやうな目で、彼は男と女の間の直接な關係を見つめました。そこからノラは生れたのです。しかも五十二歳の作者の手によつてあのノラは書かれたのであります。もしも普通の寫實家であつたなら、ノラはおそらくリンデ夫人の勸めにより旦那さんに證文のことをうちあけたでありませう。或は愛する旦那さんのために、クログスタットから脅かされつづけた苦悶を自分一人の胸に抱いて最後の悲劇へと赴いたでありませう。イブセンは普通の寫實家ではありませんでした。自己を憐むとか、一切を運命としてあきらめるとか、さういふ心持はノラには見えません。そこで第三の幕にはやがて最後の破裂が起つて來て居ます。旦那さんのヘルメルが實際の何もかもを知る所の最後の幕、そこが描き出されて居ります。

旦那さんはクログスタットの書いた手紙を見ます。そして自分に內證で細君が金を借りたこと、その借りた金のために自分の病がなほされたといふことを知ります。それを知つてひどく失望します。さういふ事件を扱ひつけた辯護士のことでもありますから、まあ、あそこの細君は金をこしらへるためにお父さんの名を亡くなつた後の三日目に書き入れたやうなことが世間へ知れようものならどうして顏あげをしてよいか、といふ心持がこみ上げて來ます『一生の幸福を破壞した、もう一生うかび出されない。こんな情ないものになつてしまつたのはみな輕はづみの女のためだ。いつたいお前は輕はづみの女で仕方がない。お前のお父さんもかうだつた。何はともあれ、この事件は世間にぱつと廣がらないやうにしたい。やつぱし自分の細君は可愛いのだから、世間體だけは今まで通りにひき立ててやるが、もう子供の敎育は賴めない。お前のやうなものに子供の敎育は到底任されない。』とヘルメルは言出します。

一方に、リンデ夫人はクログスタットに向つて不幸なノラのためにしきりに賴んで居ります。もともとリンデ夫人とクログスタットはずつと舊い友達でした。そこで二人は舊交を溫めて、復た親しくするやうになります。リンデ夫人はこの舊友にすすめてそんなことをいはないで證文などは返してやるがよいといひます。

こんな舊い友達同志の仲直りから、ヘルメルとノラが事件の破裂を悲しがつてゐる所へ證文が返つて行きます。實は惡かつたといふ手紙もそへてあります。それを見るとヘルメルは大變な悅びかたで、『これは助かつた。俺は嬉しい、これで濟んだ、もういい。』と非常に喜びました。『この證文さへ返してもらへばもうだいじようぶだ、』さういつて、今の今まで名目だけしか妻でなく、子供は一切あづけられないなんて言つた旦那さんが、その細君に向つて、もう我々はやはり今までの樣に仲よくやつて行かうといふやうな氣持になつたのであります。けれどもそれで濟まされないのはノラの胸の中でありました。夫といふものをよく見る時が來ました。そしてノラは自分がすでに人の妻であり母でありながら、實はほんとうに子供であつたことに氣がつきました。お父さんには可愛がら

れて人形扱にされ、そのままヘルメルの手に渡されて旦那さんからも亦人形を扱ふやうに愛されて來たこの八年の間――さういふことをしてくれた旦那さんは實は赤の他人であつたことを見出しました。旦那さんは其時『お前のいふことにも道理はあるけれども、お前は今までのやうな子供の遊戯の時代は過ぎて、これからは教育の時代が來るのだ』と言ひますと、『いつたい誰の教育なんでせう。私は子供の教育にたづさはる資格はあるでせうか。さつきあなたは御自分で子供は私にまかされないとおつしやつた通り、私は一生懸命自分を教育しなければならないと思ひます。それをするには何でも一人でしなければならないのです』と、ノラは答へまして、この眼のさめた妻が夫に別れてゆくところが脚本にはよく書いてあります。ノラに言はせると、彼女は『この八年の間じつと待つてゐたことがあります。奇蹟のやうに萬一にあらはれるといふことを。――ノラの心持には奇蹟といふ言葉がよく合つて居ります――それは萬一のことで、さうさうあらはれることではないと思つて居りました。そして今度こそその奇蹟があらはれると思つて居りました。何故かなら、クログスタットの手紙を見た時に、構ふことはない、殘らずうち明けてしまへとあなたはおつしやるだらうと思

ひこんで居りました。そしてあなたは一切を引きうけて罪人は自分であると言はれるだらうと思つてゐました。あなたは犠牲を引きとらなかつたのです。おそれながら待つてゐた奇蹟はそれでありました。家内のしたことではない。俺のしたことだ、さうあなたは引き取つて、ほんとうに愛するものの爲なら自分を投げ出すといふことを豫期してゐました。それが待ち受けてゐた奇蹟でありました。でもそれをして戴だくことの出來るためには無論私は死ぬ覺悟でゐました。』これがノラの心持です。ところがヘルメルは『それはお前のためなら夜も晝も喜んで働く、どんな苦勞でもして行く。しかしいくら愛するもののためだつて名譽を犠牲にする男はないぞ。』といふ氣で居ますから『だつてそれを何百万といふ女はしてゐます』さうノラの方は答へるのです。つまり何百万の女はその犠牲を忍んでゐるといふのであります。奇蹟の中に奇蹟を殘してノラが家を出て行く光景は、この『人形の家』の最終のところに描き出されて居ます。ヘルメルは別れ行く妻に斯う尋ねます。『ほんとうの奇蹟といふものは、そんなら何か、』と。『それはあなたと私との二人がすつかり變つて、ほんとうの結婚の出來る時、……でもさういふことがあるかないかわかりません。自分はもつと獨り離れて考へて見たいのです。さようなら。』このノラの別れの言葉で幕を閉ぢられるのです。

ノラと申せば、所謂新しい女の代表的な型のやうに今日考へられて居ります。けれども實際イブセンの描いたノラは決して浮いた調子の婦人ではないのです。そこには眞にへりくだつた女らしい心持も讀まれます。

私共がこれを讀んだ時には、そこにいろいろなものを見つける思ひをします。新らしい道德の芽、婦人の性の認識、子供の世紀にまで繫がつて行つて居る人と人との新らしい關係、それらの宿題の横たはつてゐるのを見ます。もしイブセンの傑作を擧げるとなると、私は『人形の家』よりも『幽靈』や『ロスメルの家』を取るものですが、それからずつと晩年の作品の中にもつと深味のあるものを見出しますが、今日の私のお話はこれで盡きました。

眼醒めたものの悲しみ

部落民を解放せよ、差別を撤廢せよといふ聲が聞える今日、小說「破戒」を書いた私が、それに就いて何か胸に浮んだことを述べるやうにと「讀賣新聞」記者からの需めがありました。

「破戒」は私が試みた最初の長篇でもあり、ああいふ地方的の特色を描寫しようとした作物なぞも餘りなかつた頃でしたから、あれを公けにした時はかなりいろいろな非難もありました。一方には、長谷川二葉亭氏が私を認めてくれたのもあの作からでしたし、私が信州から出て來てあれを書いてゐた頃の事をよく知つてくれてゐた友人達なぞからも長い手紙を貰つた位でした。從つてあの作の中に捉へて來た材料に就いても色々な批評があつたやうですが、主なる非難は一地方の出來事を

捉へて來て、それを一般的な社會現象のやうに書き過ぎたといふ事であつたと思ひます。

私の親しい友人の中にも、直接私にその事を注意してくれた人なぞもあつて、信州あたりには未ださういふ差別的な觀念がいくらか殘つてゐるかも知れないが、さういふ事は山間の邊鄙な土地に極く稀にあり得る出來ごとで、ああいふ事は過去の話である、生きた社會を寫したとは思はれないといふ人もありました。あれを書いた頃、私は未だ作の經驗も少なかつたし、出來上つたものを見れば自分でも缺點だらけで、意に充つる程のものとは爲し得なかつたのですが、然し全然の空想からああいふものを書き出したといふわけではなかつたのです。

「破戒」の主人公は申すまでもなく、一人の若い部落民を書かうとしたものですが、小諸に七年も暮してゐる間に、あの山國で聞いた一人の部落民出の教育者の話、その人の悲慘な運命を傳へ聞いたことが動機になつて、それから私がああいふ主人公を胸に畫くやうになつて行つたのでした。あの小說の中に書いた丑松といふ人物の直接のモデルといふものはなかつたのです。然し、私はああいふ無智な人達の中から生れて來た、さうして、さういふ中で人として眼醒ため青年の悲しみとでも

いふものに深く心を引かれて、それから七年間の小諸生活に出來るだけ部落民の生活といふものを知らうと心がけるやうになつたのです。

小諸の町から岩村田町の方角へ向つて舊い街道を行きますと、蛇堀川といふ川を隔てた處に部落の一つがありました。其處へもよく歩き廻りに行つて、そこで行き逢ふ男や老寄りや子供なぞの間に時を送つてみたばかりでなく、通稱彌衞門といふ部落のお頭の家を訪ねてみる機會がありました。この彌衞門といふ人に逢つたといふことが、自分の『破戒』を書かうといふ氣持を固めさせ、安心してああいふものを書かせる氣持を私に與へたのでした。それほど私は深い、好い印象をその人から受けたのです。私は作中の人物にその人を寫さうとはしなかつたが、然し部落民生活に關したことで多少なりとも自分が「破戒」の中に書き入れたことは、その彌衞門といふお頭から教へられたことが多いのです。あの山國に住んでゐる部落民が他と異つた家族の組立て方や、信州上田町在の秋葉村には最も古い歴史のある部落民の家族が住んでゐる事や、そのほか部落民の間に殘つてゐる親鸞に就いての傳說、そんな事を色色と私に話してくれたのもその人でした。

それから私のゐた小諸から見ると烏帽子山麓の方へ寄つた方に住む部落民の方へも尋ねて行つて麻裏を作ることを戸毎に副業としてゐる人達の間へも入つて見たことがありました。

そんな風にして『破戒』の作を思ひ出すと同時に、注意すればする程、部落民の特色も解つて來たし、それから七年も山の上で暮す間には、通りすがりの男や女の中でも部落民を識別することが出來るやうになりました。そんな事に氣が付かなければ少しも解らないやうな微細な特色なぞが眼に付くやうになつたのでした。實際ここに誰にでも登れる階段があるとして、自分等の國に生れたものは誰でも同じやうに、その階段を登れるものとばかり思はれてゐる時代に、『破戒』のやうな作を提供したものですから、私は恐ろしく奇を好む者のやうにとられたかと思ひます。今日になつて見ると、その階段を登ることの出來ない同胞が全國に亘つて八十万人以上もあるといふには驚きます。

從來、部落民として輕蔑されて來た人達の中からは、立派な學者や藝術家なぞが生れて來てゐる事を聞きますが、恐らくさういふ人達が自己を教育して他と同じやうに階段を一階づつ登り、上の方まで登り付くまでの苦心といふものは、慘憺なものであつたでせう。

最近に一人の青年が私の宅へ訪ねて來ました。私にとつては一面識もない人でしたが、私が『破戒』のやうな作をしたといふだけの事で私の處へ來て素性を打明け、悲慘な過去を語らうとしてやつて來たのでした。この部落出の青年は北海道の方に行つてアイヌの間に入つて働いた人ださうですが、今度の水平運動に刺戟されて、ぢつとしては居られなくなつたやうな氣持ちで、遠く北海道から出て來た人のやうでした。

その人は内地の或る中學に學んでゐた頃のにがい經驗を語りましたが、部落生れといふ事のために同級の學生に惡まれて雪の中に倒され、さんざんに胸の上あたりを靴で踏まれたといふことを話してゐました。その青年が北海道の方へ行つてアイヌの間で働くやうになつたのも、その中學での出來事が動機になつたといふ事でした。さうして寒くなつてくると、今でも踏まれた胸のあたりが痛んで來るといふ話もありました。

何しろ私は、一面識もない人が突然尋ねて來たのですから、どういふ用事で自分の處へ來たのかを尋ねましたが、一寸私がそんな事を聞いただけでも、もう侮辱の眼を持つて見られてゐるのではないかといふやうな、さういふ意識が殘つて來て困るといふ事を、其青年が私の前で白狀してゐました。で私が『君等は先づさういふヒガミを第一に捨てるんだね、見給へ私なぞは何とも思つて居やしないじやないか』とさう私が話しました時に、その青年は自分でも其處へ氣が付かないではないが、然し自分等はその悲しい意識からどうしても離れる事が出來ないと云つてゐました。

私は今度の水平社の運動といふものに就いて詳しいことは知りませんから、立ち入つた意見も述べられませんが、その主張を正しくないとは誰か云ひ得るものはあるまいと思ひます。もつとずつと前から來るべき筈のものが、當然我我の眼の前にやつて來たやうな感じが致します。少くとも他から働きかけられたものでなしに、もつと自發的に、人として眼醒めた新時代の人達が、長い虐げの經驗から今度の運動が生れて來てゐる事を信じたいと思ひます。

透谷君の三十回忌に

『時が過ぎゆくのではない、私達が過ぎゆくのだ』といふ言葉がありますが、今年はもう透谷君の三十年忌を迎へました。透谷君を記念する物も段々少くなつて、卅年の歳月が經つ間には書き遺した草稿や手紙の類なぞも追ひ追ひと散逸してしまひ、舊い住宅なども――北村君は幾度か住居を替へたから記念の家も幾つかあつたわけですが――さういふ舊い住家も、或る家は代が替はつたり人が住み替はつたり、或る家は壞はされたりして、殊に震災後になつては透谷君を記念する家といふものは殆ど無くなりました。小田原には透谷君の生れた家がありましたが、それも震災の爲に壞れたらうと思ひますし、東京の方では芝公園の紅葉館の裏手から飯倉の通りへ出ようといふ細い坂の途中のとこ

ろに透谷君の住んだ家がありまして、あそこは透谷君の氣に入つた住居で、いろんな特色のある論文や隨筆なぞを書いたのもあの家ですし、さうして最後に不幸な死を遂げられたのもあの家でしたが、あの家は震災前にもう取拂はれて今では全く跡形もありません。

京橋の彌左衞門町の、秀英舍の工場と向ひ合つた角のところに煙草屋があつて、あそこは透谷君のお母さんが小田原の方から出て來て煙草店を開いてゐたところですから、透谷君の少年期から青年期へかけて、透谷君の勉强したのもあの煙草屋の二階であつたし、『蓬萊曲』の出來たのもあの家でした。北村君が亡くなつてもあの煙草屋だけはずつと震災前までは殘つてゐて、代は替つても古い以前の銀座時代からの建物がそつくりしてゐて、數寄屋橋から尾張町の方へ私はゆく度に家の前を通つて昔の友達のことを思ひ出しましたが、震災のためにはあの家もなくなりました。さう思つて來ると三十年の歳月がこんなにいろんなものを、かう替へたといふことには驚かされます。今になつて見ると透谷君を記念するものとしては『透谷全集』一卷と、あの友達の遺族と、芝白金の瑞松寺にある墓だけが遺つたことになりました。

私は透谷君に緣故も深かつただけ、あの友達の生涯なり人となりについては、これまでいろんなものに發表したものもありますから、透谷君を知らうと思ふ人には、私の『飯倉だより』の中にある、透谷廿七回忌の時の感想なぞを讀んで貰ふとして、此處にはあの友達の遺族のことや、『透谷集』を出版した當時の思ひ出なぞに話を限りたいと思ひます。

私がまだ淺草の新片町の方に住んでゐた頃のことです。或る日のこと十八歳ばかりになる娘さんが突然私の家に訪ねて來たことがありました。その人を迎へ入れて見るとそれが透谷君の只一人のわすれがたみであつたお英さんでした。透谷君が亡くなつた時はお英さんがやうやく三つか四つの幼い時代で、それ切り私もお英さんを見る機會がなかつたのですから、そんなに成人した友達の忘れがたみを見るといふことが珍らしく懷かしく思はれました。ところがこのお英さんはお父つさんのことをいろいろと想像していい年頃になつてゐたにも拘らず、殆どお父さんのことを知つてゐない樣子であるのには私も二度びつくり致しました。それから私も透谷君の昔話等を少しばかりしたり透谷君の友達のことなぞを話したりなぞしてみると、お英さんは私の顏をながめて『さういふこともあつたか』といふ樣子をして、私が自分の『春』の中に透谷君の面影を傳へて置いたといふことすらもお英さんは知りませんでした。恐らく透谷君はああいふ悲慘な最後をされたものですから、娘さんの心を亂させない爲に、家の人も透谷君の話は何も聞かせなかつたものと見えました。あの時のお英さんの訪問は何か一つの出來事のやうに私の記憶に長く殘つてゐました。ずつと後になつて私は透谷君の未亡人に逢つたときに、あの話をして見たら『さうでせう、お父さんのことはあの兒には何も聞かせてありませんでしたから』といふ話でした。そのお英さんも今ではもう三人子持のいいお母さんです。

何しろ透谷君が亡くなつたのは漸く廿七歳の頃でしたから、夫に別れてからの未亡人は、幼い子供をひかへ人の知らない多くの困難と戰かつたことだらうと思ひます。明治年代の文學者の遺族もいろいろある中で、私の知つてゐる範圍では透谷君の細君なぞは最もよくやつたと思ふ一人です。婦人としてしつかりとした氣象を持つた人でなければあすこ迄は行けなかつたと思ふ位です。

透谷君の亡くなつた後で、その遺著から何等の物質的のたすけになるやうなものは未亡人の手に

は入らなかつたし（多少なりともさういふ報酬のあるやうになつたのは、ずつと後のことです）でも未亡人はその愚痴一つ云はず、夫の友人その他にたよらうといふこともせず、全く獨立獨歩で未亡人としての生涯を切り拓いたには感心します。私がフランスの旅にある頃でしたが、未亡人から久し振りに音信に接したことがありました。その時未亡人からの音信の中にはお英さんの結婚したことが書いてありました。長い間苦勞した末にやうやくのことで自分の娘の祝ひの席に連つた時は、透谷でも生きてゐたらばと思つて思はず涙が出たといふことが書いてありました。あの未亡人のことであるからさうもあつたらうと思ひました。未亡人は今は英語の教師をしながら、お英さんと一緒に青山の方に靜かな安らかな晩年を送つて居られます。

それから透谷君はあの通り數寄な生涯を送つた人ですから、生前に書いたものを集めて置くといふ計畫もなにも立てるいとまがなかつたのです。透谷君の死後友人が集まつて遺稿の出版を計畫しまして、印刷出版の方は『文學界』の同人であつた星野君が一切を引き受けてくれ、遺稿の編輯には私が當りましたが、あの最初の集は菊判のクロース表紙で『透谷集』の文字を表紙に表はしましたが、あの文字も星野君が書いたものでした。あの最初の『透谷集』は文學界社から出版して七百部印刷し、それぎり絶版としました。その後、昔の友達や透谷君の弟さんが二度目の『透谷全集』の出版を計畫したときは、丁度私は信州小諸の方にゐる時でして、直接再版の編輯には與りませんでした。あの二度目の『透谷全集』には故人の日記とそれから『蓬萊曲』とを加へて出版したものでした。

透谷君は生涯が數寄であつたばかりでなく、遺著までもいろいろな書店の手に渡つて、長い歳月の間には、二度目の『透谷全集』も容易に手に入らないやうになりました。それを私は遺憾にも思ひ、透谷の思想を多くの青年諸君にも知つて貰ひたいと思ひ、又一つには年老いた未亡人をも慰めたいといふ心から、三度目の『透谷全集』の出版には又自分で編輯に當りまして、時代分けに編み直したのが春陽堂から出てゐるあの綠色の表紙の本です。震災のためにあの紙型も燒けはしましたが、何れ組み直しの時も來るだらうと思ふし、それから一部分は『透谷選集』として新潮社から發行してゐるものもあります。

身のまはりのこと

日常の好きなものと言へば、私は何よりも茶と煙草の二つですが、そのくせ今まで、それほど好きな茶について何も書いてゐませんし、煙草についても一度も書いたことがないのです。煙草のことなぞは、それについていろいろ物を書いた好事家が可なりあるやうで、『好い友達、好い書籍、それから好い煙草』と言つた人のことなぞを思出します。根岸の岡野馨さんが編輯してゐられる「郊外」といふ雜誌――あの「郊外」の寄書家には、大分愛煙家があるとみへて、煙草に關したことがよく出てゐまして、私なぞいつも面白く讀んでゐる一人です。

若い時分に――まだ、北村透谷君が達者でゐる時分のことでした。私は、一年ばかりを放浪の旅に暮したことがあります。その時は東海道を西の方へ下つて行きましてね。四日市、亀山あたりから伊賀の山中に入り、伊賀と近江のさびしい國境を越して、大津、膳所あたりの琵琶湖のほとりを歩きました、大和の吉野にもまゐつたんです。旅費としても乏しかつたから、冗遣ひの出來ない旅でした。それまで私は、煙草をふかしたことがないのです。ところが、獨りの旅ではあり、どうも口寂しくなることもあつて、さう言ふ時には、何か甘いものをたべたものでした。が、甘いものもいいけれど、どうもおなかがふくれるし、あとの氣持も惡るい。これはいつそ煙草にしよう、と、そこで初めて煙草の味を覺えたのです。それからの私の煙草好きも、あの若い時分の一年ばかりの旅の記念なんですね。

信州の小諸で暮してゐた頃のことでした。その頃も、私は、可なり質素に暮らさなければなりませんでしたので、いつそ煙草をやめてみやうかと思つたこともあつたのです。ところが、或る晩、私は、家の者に内證でこつそり煙草を買ひに行く夢なぞを見るといふ仕末で、「これぢややめられない」とつくづくさう思つたことでした。今でこそ煙草も専賣局で製することになりましたが、私が小諸にゐる時分には、まださうでもありませんでした。いや、そろそろそれになりかかる時分だつたかも知れません。ちようどその頃、たしか蒲原有明君からだつたと思ひます。「薩摩」の刻みを頒けて貰つたことがあります。あれは薩摩の産地の方から來た私製の葉でありましたが、純粹でそして、香氣が高くつて、とても水戸や秦野とくらべものにもなりません。こんな良い煙草もあるかと思ひました。あまり氣に入つたので、小諸からわざわざその製造元へ頼んで、取り寄せたこともあつたくらゐでした。今ではもう、あんなまじりけのない『薩摩』はのめないでせう。

私どもの青年の時代には、ロシヤの紙卷煙草といふものも來てゐました。それは、濃い樺色の紙袋にはいつてをりました。その煙草は粉を卷いたものでしたが、一種の風味がありましたし、値もそんなに高くなくて私どものやうな書生にも買へるほどの煙草でした。ただそいつは粉だもんだから、どうかすると、ひとかたまりになつて落ちるのです。その頃、樋口一葉さんが亡くなつたので、私も遺族のかたのところへお悔みにいつた時、私はその粉煙草を喫ひながらいろいろ話をしてゐるとどうかしたはずみに粉がぽとりと落ちて、膝に燒けあなをこしらへてしまつたことがありました。それからずうつとあとの話ですが、浦鹽にいつてゐる親戚がありましてね。その親戚があちらから歸つてきた時の土産に、細い紙卷をくれたことがありました。一體に、ロシヤ産の煙草は味も割合に輕く、一種特別な香氣があつて、われわれの口にも適するやうに思ひますね。

私は、今では敷島黨です。兩切りの、甘いアルコールの味のあるものは、どうも好きません。やつ

ばり敷島のやうな輕るい煙草が一ばん私の口に適つてゐるのです。遠いフランスの旅にまゐる時なんかも、先づ私の胸に來たものは何かと云へば、茶と煙草のことでした。その時、私は或る酒好きの人のことを思ひ出したことがあります。その人は、日露戰爭の當時に從軍することになつて、いざ戰地の方へ向はうとした時――一ばん先に考へたことは、どうしたらば好きな酒を戰地の方へ持つていかれるか、と言ふことだつたさうです。私のはさうではなくつて、自分の狹い鞄の中に敷島を入れていくのに頭を惱ましたのでした。でも、フランスはあれだけの國ですから、定めし煙草にも良いものがあらうと、そんなことを想像しながら出掛けたのでした。着いてみると、思ひの外フランスの煙草には癖があつて、强過ぎるか、さもなければ味もなにもないやうなものばかりで、最初のうちは私の口にはあひませんでした。キヤポラル・オリジネエルと言つて、青い紙の袋に入つた卷煙草があります。三年も住み馴れるうちには、不思議にもその癖のある煙草が好きになりました。實際、慣れると言ふことは不思議なもので、巴里で、私に語學を敎へてくれた人や、下宿で食卓を一しよにする人や、さういふ人たちの中にはひどい腋臭（わきが）を持つた婦人もありました。初めのうちは厭

でならなかつたものですが、あの腋臭に香水なぞまじつた匂ひを嗅ぎ慣れて見ると、しまひには腋臭もなかなかいいものだと思ふやうになりました。いえ、串談でなしに。丁度最初は口に適しなかつたフランスの卷煙草に味が出て來たのも、それに似たものかも知れません。そんなわけで、あちらから歸りたてには、反つて敷島がちつとも味がなくて、こんな煙草だつたかしら、と思ふくらゐでしたが、やつぱり暫くして、以前からのみなれた敷島の味が出て來ました。

茶の方には季節があります。若葉の五月の頃には殊にそれを思ひます。煙草は好く保存された古葉をいいとしてあるやうですが、私なぞただ長年の煙草好きと申すだけのことで、それに就いての嗜好なり感覺なりが進んで來て居るかといふに、さうでもないのです。年百年中、同じやうな煙草をふかして居ます。これは煙草そのものの味に變化がすくなくなつて、新しい葉も、古い葉も、水戸産のものも、秦野産のものも、皆一緒に、平調に混じられるやうになつた結果かとも思はれます。

『平等』も今日の官營の敷島のやうでは、かなり退屈なものといふ氣もします。ただ私どものやうな煙草好きは、それを不思議とも何とも思はないで居るのです。

茶も私はあまり強いのは頂きません。ごく精選した茶と言ふものは、少し湯をさましたところで入れて飲むやうなものでせうが、私は玉露のやうな茶よりも、むしろ煎茶の方が好きです。熱い湯をさしたのが、自分の口には適してゐます。

ところが、やつぱし茶の好きなものは、人の茶の話などにも自然と注意するものでしてね。或る茶舗の主人の話を、或るもので讀んだことがありましたが、その中にはやつはし本當の良い味といふものは煎茶にあるといふやうなことが出てゐましたね。

私は、あの寒い山國に生れたものですからね。さう言ふ氣候の關係もあつて、信州のものはいづれも茶好きです。どこの家でも、日に何度となく茶を淹れて飲むのです。私の茶好きも、つまりさう言ふところから來てゐるのでせう。

私の鄉里などの方には、普通の茶のほかにネブ茶と言ふものがあります。このネブ茶は或る灌木の葉から作つたもので、木曾あたりの農家ではよくそれを飲みます。番茶の味に似て、香ばしいやうなものですね。

ロシヤの方の人なども、寒いせいですか、やつぱし溫かい飲みものを好くやうですね。サモワルと言ふやうなものがあつて、皆で一つ部屋に集まつて、茶を飲むやうですが、信州あたりのものが茶好きと言ふのも、寒い山國の氣候のせいかも知れませんね。

茶の味は一口に言へば淡い。しかし、玉露のやうなものになつてくると、淡いうちにもなかなか芳烈なところがありますね。

フランスの旅にゐる間も、私は、下宿で、國からとどいた茶などを淹れて、留學の人達でも訪ねて來る時には一しよにそれを飲むのを樂しみにしたものでした。たまに、食堂に集まるフランスや

ポーランドなぞの、よその國の人に茶を御馳走しましたが、むかふの人達もめづらしがつてゐました。ところがね、その茶は玉露でしたから、それを飲んだ外國人達は一晩眠れなかつたと言つて、日本の茶の強いのに驚いてゐました。まつたく我我でも、夕飯過ぎなぞに、うつかり強い茶は飲めません。

その時私は、日本の方にあるものは、淡いもののやうに見えながら、その實、かなり強烈な香氣を持つてゐるといふことに氣付きました。例へば、あの俳句なぞにしても、ちよつとさう言ふ味がありはしないでせうか、外國の詩や漢詩なぞにくらべてみても、それが思ひあたります。淡泊だ、淡泊だ、とは日頃よく言はれることですが、よく味つて見るなら自分等の國にある多くの產物が、一概にさう言へないやうに私には思はれるのです。

私は、少年の時分から、おもに他人の中に育ちまして、子供の時分からさう贅澤も出來ない境遇でしたから、そんなことが慣ひ性となつてをるものかと思ひますが、それから又、幼年のころに自分の兩親の膝元で教へられたことは、凡てに簡素を愛すると言ふことでしたから、さう言ふ小さい時分からの慣しにもよるかと思ひますが、簡素を愛する心は、今日までつづいて居ます。衣食住、凡てさういふことに滿足してをります。

私のやうな境涯では、住居なぞもさう自由にもなりません。あのウヰリアム・モリスのやうに、自分の心の世界と言つてもいいやうな家を作つて、そして、さう言ふところに住んでみることは、決して贅澤とは思ひません。そこには生活と言ふものと藝術との面白い一致もあると思ひますが、けれども私などの境涯では、そんなことは及びもつきませんね。ただ私は、せめて自分の子供達と一しよに食卓の上でも清潔にしたり、それから自分の仕事をする書齋に、樂しい光線でも導きいれるくらゐのことに甘んじてゐます。私は、私の書齋の注文は、日光を適度に調節することが主でそのほかにはたいした注文もないんですけれども、どうも北からはいる光線が一ばん柔かで、靜かで、激しい變化もなく、心持が落着いていいかと思ひます。それもずつと以前から氣がついて、自分の机

を北向きに置くやうに心掛けてゐます。

先日、或る茶道にくわしい人の書いたものをみましたら、茶室と言ふものは、北向きに造るものなんださうですね。何か偶然そこに、日頃自分のいいと思つてゐたものとの一致をみつけたやうな氣がしてうれしく思ひました。「してみると古人もさうだつたか」と思ひまして。

でも、全く北からはいる光線ばかりでは、夏はいいが、冬は北向は寒うございますからね。ちやうど私の部屋は、東北にあつて、東の方からの光線に、北からの光線を適度に按配して、本を讀んだりものを書いたりします。

食事なども、私の家では簡單にやつてゐます。昨今のやうに烈しい霜がきて、夜の空氣が冷える時分は、私の家では「凍豆腐」をつくります。豆腐を薄く切りまして、それを笊の中に並べ、水をかけて、庭の樹の枯枝にでも吊して置きます。この節のやうな寒さなら、朝になると飴色に凍つてゐましてね。それに熱湯をそそぎかけると、黄ばんだ色の凍豆腐が出來ます。あれは「霜豆腐」とも言つて見たいものです。ネギをいれた露などは、自分の好きなものの一つでもあります。

芹のやうな香氣のある野菜も、自分としては好きなものです。もう栗の季節もすぎましたが、あの栗の皮をむきまして、シブをあつさり取つて、鹽うでにしたものなども、よく家でつくります。

肉の中では、何と言つても私は、小鳥類がうまいかと思ひます。魚では、川魚が好きです。鮎にしましても、岩魚、タナビラ、赤魚、その他——川でとれた魚はみがしまつてゐまして、味も細かいやうに思ひますね。

一たい私は、野菜が好きですし、それに乾物類では、湯葉など好きですから、さう言ふものを取り合せまして、惣菜をつくつて、それで食事をすませることが多いのです。何がなくとも、柚子、わさび、それから春先の木の芽などの香味をすこしでも添へるものがあれば、食事は樂しいと思ひます。

かうして文筆に從事してゐますと、毎日毎日根氣をつめてゐるうちに、長い仕事の時などは殊に疲れますから、どう言ふ風にして、體を養つたり、疲れを休めたりしたものか、とよくそんなことを考へてみます。あのトルストイが「アンナ・カレニナ」を書き終つた時など、あれほどの强壯な肉體を持つた人でも、ずゐぶん劇しく疲れたといふことで、ロシヤの家庭のことですから、細君が醋乳と言ふものをつくつて、それをトルストイに飲ましたと言ふではありませんか。あの話は、以前に、何かのもののはしに書いたこともありました。一たい、蒙古あたりからずつとロシヤの方へかけては、乳餅だの、乳菓子だの、牛乳の製しかたなどが、ずゐぶんいろいろあるらしい。醋乳なども、革の袋に容れて製するとか聞きますが、われわれの國では知らないものです。

私は、アメリカの方から歸つて來た或る婦人に教はりまして、熱い牛乳の中に生蠔をいれて飲むことを覺えました。それには少しばかり砂糖を加へればいい飲料になるのです。疲れた時などいいやうです。普通の牛乳の味とはちがつたものです。それから牛乳にレモンの汁を搾つて少しいれたものなども、疲れた時などにはいいやうです。まあ、仕事に骨の折れた後なぞで、食事の後にまじりけのすくない葡萄酒でもやるぐらゐが今の私の贅澤です。こんな話のついでですが、新鮮な果物にきらひなものとてはありませんが、春先を過ぎて五月頃まで殘つた萎びた林檎の味といふものも、なかなか捨てたものではないと思ひますね。

太陽の言葉

『お早う。』

とわたしは太陽の隱れて居るところへ行つて聲を掛けて見た。返事がない。けふも太陽は引込みきりだ。

すこしばかり自分の記憶にあることをここに書きつけよう。初めて太陽の美しさが、私の眼に映つたのは、日の出の時ではなくて、むしろ日沒の時であつた。わたしはまだ十八歳の少年であつた。當時のわたしの周圍には、極く漠然とした自然の愛を敎へて呉れる人はあつても、一語あの太陽を見よとわたしに指して言つて呉れるものもなかつた。わたしは沈んで行く夕日を高輪御殿山の木立の

間に見つけて、その驚きと歡びとを分つために一緒に山遊ひに出掛けた友達の方へ走つて行つたくらゐである。わたしは友達と二人で、美しい日沒を望みながらしばらくそこに立ちつくしたが、あの時のわたしの胸に滿ちて來た驚きと歡びとは今だに忘れずにある。

それにも增して忘れ難いのは、初めてわたしの內部に太陽の登つて來たことを感づいた時だ。青年時代のわたしの生涯は艱難の連續で、ほとほと太陽の笑顏を仰ぐといふこともなしに多くの暗い月日を過した。稀にわたしの眼に映るものはと言へば、何の溫か味もなく、何の生氣もなく、唯朝になれば東の空から出て晩には西の空へ沈んで行くやうな、紅いしよんぼりとした日輪であつた。わたしが二十五歳の青年の時だ。わたしは仙臺の方へさびしい旅をして、その時初めて自分の內部にも太陽の登つて來る時のあることを知つた。

日光の饑——このわたしの要求はかなり强いものであつたと見えて、明けさうで明けない薄くらやみが續きに續いて行つた時には、わたしもひどくがつかりした。わたしは幾度か太陽を見失つたこともある。太陽を求める心すら時には薄らいだこともある。太陽はわたしから離れて行つて、た

だただ無意味な、悲しく痛ましげな顔付のものとばかりわたしの眼に映つたこともある。

けれども、一度自分の内部にも太陽の登つて來る時のあることを知つたわたしは、幾度となく夜明けを待ちうける心に歸つて行つた。毎年五ケ月の長い冬の續く信濃の山の上からも、新開地らしい頃の東京の郊外の島の間からも、日の出を町の空に望むに好い隅田川の岸からも、わたしは夜明けを待ちつづけた。そればかりでなく、長い年月の間にはわたしも異鄕の旅人となつたことがあつて、紫色の泥かとも見まがふ遠い海の下からも、見るからに夢のやうな青い燐の光の流れる熱帶地方の波の間からも、それから又、石造りの建築物も冷く並木も黑く萬物は皆凍り果てたやうな寒い異鄕の町の中からも、わたしは夜明けを待ちつづけた。そして遠い日の出を夢みながら、故國をさして歸つて來たこともあつた。

わたしは三十年の餘も待つた。おそらく、わたしはこんな風にして、一生夜明けを待ち暮すのかも知れない。しかし、誰でも太陽であり得る。わたしたちの急務はただただ眼の前の太陽を追ひかけることではなくて、自分等の内部に高く太陽を掲げることだ。この考へは年と共に深く、わたしの小

さな胸の中に根を張つて來た。

今のわたしが想像する太陽とは、もう餘程の年齢のものだ。物心づいてからこのかた、わたしが覺えて居るだけでも、太陽の齡はことし五十三にもなる。そのわたしの知らない以前の齡を加へたらあの太陽が何程の高齡な老年であるとも、ちよつとそれを言つて見ることも出來ない。

人が五十三もの年頃になれば、衰へないものは極く稀だ。髪は年毎に白さを增し、齒も缺け、視力も衰へ、曾て紅かつた頰にも古い岩壁の面のやうな皺を刻みつける。そこには附着する苔のやうな皮膚の斑點をさへ留める。多くの親しかつたものも次第に死んで行つて、思ひがけない病と、晩年の孤獨とが、人を待つて居る。このわたしたちの力弱さに比べたら、太陽のことは想像も及ばない。絕え間のないあの飛翔と、あの奮躍。夜毎の沒落はやがてまた朝紅の輝きにと進んで行くあの生氣。まことの老年の豐富さは、太陽を措いて外にはない。それにしても、この世で最も老いたものが最も若いといふことには、わたしは心から驚かされた。

『お早う。』

とまたわたしは聲を掛けて見たが、返事がなかつた。しかし、わたしはこの年になつて、また自分の内部に甦つて來る太陽のあることを感づくところから見ると、どうやら夜明けも遠くないやうな氣がする。（大正十三年の秋）

必然性

『私はいよいよ多く、事物に於ける必然性を美として見ることを學ばうと思ふ』

これが多くの懐疑と苦悶とから一切のものの肯定に移つた時の人の心であつたとか。好い言葉だと思つた。

美を積むもの

心貧しきが故に善を積む。愚かなるが故に善を積む。悲しみ深きが故に善を積む。さう言つて善を積まうとした人達もあつた。

美を積むものの心もこれに劣るまい。

春を待ちつつ

大寒も近づいた。深い雪でも來るかと待受けさせるやうな空模樣の日が續きに續いた。年のはじめの屠蘇を祝へ雜煮を祝へと言つたのはつい昨日のことのやうに思はれてゐるのに、最早松の內も過ぎて、部屋の壁に掛けた裏白や讓り葉も既に取り捨てた。來そうで來ない雪のかはりに、今日はまた寒い正月らしい風が町を吹き廻して居る。

窓に近く行つて、半生の旅のことを思ひ出して見る。自分等が出發した當時のこと、平素は忘れて居てめつたに思ひ出しもしないやうな若い日のことまでが、何となく自分の胸に浮んで來る。

春を待ちつつ

心の宿の宮城野よ
みだれて熱きわが身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

獨り寂しきわが耳は
吹く北風を琴と聽き
悲しみ深きわが眼には
色なき石も花と見き

この舊い旅の歌を書いたのは今から二十九年の前にあたる。青年時代の私には之を書く前に、既に長い冬の背景があつた。ある人は私の舊い詩を評して、私の詩の心は否定の惱みでなくて、肯定

の苦に巣立つたものだと言つてくれた。あの言葉は自分でよくうなづける。こゝに記した數行の詩の句の中にも青年時代の私の心持は出て居るかと思ふ。

不思議にも自分の半生の旅はこの早い出發點で決してしまつた。私はまだ年も若く心も感じ易かつた時代に一旦自分の選んだ方針がこんなにも長く自分を支配するかと思つて、心ひそかに驚くこともある。前途は暗く胸の塞がる時、幾度となく私は迷つたり、躓いたりした。私の歩いた道がどんなに寂しい時でも、しかしその究極に於いて、何時でも私は自分の出發した時と同じやうに、生を肯定しやうとする心に歸つて行つた。世にはさまざまの人があり、さまざまの生涯がある。長い旅の途中には私は『經驗』そのものと言ひたいやうな髪の白い翁にも逢つた。物に澱まず、滯らず、世と共に押移ることを私にささやいて見せるのもその髪の白い翁だつた。ある友達はまた私の傍へ來て、あまりに人生を重く見るな、あまりに眞劍になるものではないと、私にささやいて呉れることもある。『愚かなるものは思ふこと多し』とか。實に齷齪とした自分なぞは、青年時代に踏み出した時と少しも變りのないやうな、それほど長い夢を今日まで見つづ

春を待ちつつ

けて居る。そして眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無駄になるもののなかつたと思ふやうな春の來ることを信ぜずにはゐられないで居る。

俳諧に遊んだ昔の人は『風狂』といふことをこの私に敎へる。この世のさびしさの中にも浮かれることを知つて居た古の人の心を思ふと尊い。その涙も尊い。さう言へば、あの早春の先驅のやうな深い雪が來て町を埋めるのも、最早そんなに遠いことでもないだらう……（大正十四年の正月）

春を待ちつつ

定價　壹圓五拾錢

著作者　島崎藤村

發行者　北原鐵雄
東京市小石川區表町百九番地
合資會社アルス代表者

印刷者　山本源太郎
東京市牛込區東五軒町十四番地

大正十四年四月　三日印刷
大正十四年四月　八日發行

發行所　東京小石川表町一〇九　合資會社アルス
電話小石川三五七〇番
振替東京二四八八八番

感想集

飯倉だより

島崎藤村著

金のやうな靜かさと光とを持つた藤村氏の感想集である。むつゝりむつゝりと、然し誠實さのこもつた口調で、其書齋に於ける東西古今の文藝批評を聞く思ひがする。この一書を通讀すると、氏の性格、氏の人生觀といふやうなものが、字句の間に一々脈絡を保つて生々として來るのを感ずる。

「朝を思ひ、又夕を思ふべし」と云つた芭蕉の言葉に思ひ入つた著者が、「初戀を思ふべし」と虔ましく言ひ放てるのも、彼の「新生」を書いた著者が、パスカルの、「心胸には道理に知られない道理がある。」といふやうな言葉を抄錄してゐるのも意味深いことだ。どの頁を開いて見ても、人間苦に徹した人でなければ現はし得ない言葉……全人格……が嚴肅に迫つて來る。そしてその明澄な文章は、靜かな、ものの深さ、短かきものの鋭さと云ふやうな事が泌々と味ははれる。

數行の短い文章にも生命の輝きがある。讀むよりも味はふべき心の糧として江湖に推奬する。

——山本鼎氏裝幀●四六大判特製美本——

定價壹圓五拾錢●送料拾七錢

北原白秋氏著書

詩歌の話 洗心雜話

詩や歌はどうして作るか、これは詩歌に志す人々の第一に知らんとする處であるが、幽趣微韻を極むる微妙な詩歌の機微を說きあかすといふことは、實に六つかしい事である。本書は詩歌壇の巨匠白秋氏が長い間の苦い經驗から體得された心境を誰にも分るやさしい言葉で、詩歌を作るに何よりも大切な心の據ゑ方、感じ方、物の見方等を澤山の面白い例話をあげて說かれたもので、詩歌の根本藝術の極致がこの一卷に收められてゐる。詩歌の作り方を知らんとする人、眞に詩歌を味はんとする人々の一讀を薦む。

裝幀 恩地孝四郎氏

定價壹圓貳拾錢●送料拾參錢

綠草心理・詩文集・前田夕暮著

現代に於ける唯一の清新にして生采ある新感覺主義藝術の高唱!!

前田夕暮の散文『綠草心理』に到つてはわたしの賞讃措かざるものである。彼は今日に於て、彼の本質たる鑛脈をかつちりと堀り當てた。彼はたしかに彼の病院生活に於てより深く內觀的となつた。彼が彼自身の尿の美を透明なる硝子の尿壺に見、その尿壺にひそかに菜の花を挿して、寢臺の下に忍ばせたといふ文意と稚態は、わたくしをして心から微笑せしめた。日光六月號の『木の花』の文はほんとに清新そのものであつた。四十を越へた今日に於て此の水々しさを有してゐるその若さ自體が、わたくしは近來の希有であるとさへ感じられる。少くとも彼の散文は短歌よりは本質的であり巧緻であり自在である。何の粗も拙も無い。立派な詩文である。彼は寧ろ詩にゆくべき人ではないか『鞠つき』もおそらく傑作であらう。ただ、この上はいかにして彼れの今後の藝術を境涯的に押し進めるかといふことである。わたくしの友情は興趣ふかく彼に向つて微笑してゐる。

（日光）七月號所載北原白秋氏『季節の窓』より

裝幀・恩地孝四郎・挿畫・北原白秋・定價貳圓・送料拾五錢

北原白秋氏著書

白秋詩集 全二卷

詩壇の巨匠白秋氏の全集成る。收むる處純情涙を流すべき小唄あり、輕快歌ふべき俗謠あり、天眞自らなる童謠あり、法悅光明の歡樂境を歌へる短唱小曲あり、幽玄深遠なる象徵詩あり、印象の筆觸鮮らしき景物詩あり、自由奔放なる散文詩あり、雄渾壯大絢爛を極むる長篇詩あり、各種の詩風交錯し渾然微妙の一大交響樂を形成し詩壇嘗つて見ざる壯觀を呈す。本集全二卷通卷一千三百餘頁詩數六百餘篇氏の最近に至る全詩を網羅する空前の大詩集茲に完成す。恩地氏の裝幀及扉畫亦清麗無比藝術の士の愛誦し後世に傳ふべき物本集を措いて何を他に求めんや。

第一卷 燈集（新作小唄俗謠等）
青い鳥（童謠集）
小鳥悲集（眞珠抄・白金の獨樂）
大畑の祭（三崎詩集）
雪と花火（景物詩）

第二卷 邪宗門（象徵詩集）
思ひ出（抒情小曲集）
朱泥の馬（長篇詩集）

定價各冊貳圓八拾錢 ・ 送料各冊拾七錢

北原白秋氏著書

白秋童謠集 第壹卷

萬人翹望の標目であつた白秋氏の童謠全集第一卷が愈々刊行された白秋氏は實に童謠を復興し、且つ之を完成せしめた日本童謠の父である。本集は繪入童謠集『トンボの眼玉』『兎の電報』『祭の笛』及英國童謠集『まざあ・ぐうす』を合卷せるもので、彼の華麗を極むる繪入童謠集を兒童のための讀本なりとせば本集は成人のため、一般詩歌愛好者のための一大綜合全集である。上下三千年日本が初めて生んだ天成の童謠詩人白秋氏の作品を一貫して知らんとする人々は本書に依らるべきである。尙卷頭に童謠の本質と氏が創作の態度を宣明した長編の論文『童謠私觀』が附せられた。眞に童謠を知り童謠を味はんとする人々、童謠の正風と其典型を知らんとする人々に本書を薦める。

恩地孝四郎氏裝　菊半截箱入美本

白秋童謠集 第貳卷近刊

定價壹圓八拾錢・送料拾七錢

北原白秋氏著書

小唄と民謠

あしの葉

詩壇の王者白秋氏の小唄と民謠は實に天下一品で、何人の追蹤をもゆるさない。本書は氏が最近三年間の收穫を集めたもので純情涙すべき小唄、醇撲愛すべき民謠、眞に幽趣微韻を極むる珠玉の名作百八十餘篇が收められた。裝幀は森田恒友氏の筆になり淸洒淸新、近來稀に見るの美本なり

竹林幽居

ひとりかくれた籃に、
菊荷もしろく香ににほふ。
醉ふてほろりとする日でも、
わしやさびしいぞ靑雀。

朝顏

今朝はとなりの藏に咲く、
花朝顏の小ささよ。
貧しい庭の花なれば
となりへ往ても小ささよ。

定價壹圓八拾錢・送料拾參錢

北原白秋氏著書

小唄集　白秋小唄集

歌ひ易く解し易く愛誦措く能はざる小唄二百餘篇を收む

附錄『さすらひの唄』『酒場の唄』『こん度生れたら』『カルメンの唄』『山の唄』『別れの唄』

本文二度刷、表紙サラセン模樣絹繻子表紙袖珍判箱入極美本

雨はふる、ふる、城ケ島の磯に、
利休鼠の雨がふる。
雨は眞珠か、　夜明の霧か、
それともわたしの忍び泣き。

城ケ島の雨

抒情小詩　わすれなぐさ

本書はその美しさ、懷しさ讀めば涙も溢れ出づべき白秋氏の抒情小曲を收めたものである。裝幀は山本鼎氏白金の光澤美しき絹繻子にクロバーと螢の模樣をあらはした瀟洒清新の趣は見るからに心躍る。

なわすれぐさ
面帕(おもぎぬ)のうしろに見へて、
その　眸(ひとみ)にほふごとくも
空(そら)いろに透(すき)きて、　葉がげに
今日も咲くなわすれの花

定價各冊壹圓八拾錢・送料各冊拾參錢

風・光・木の葉・詩集・大木篤夫著

處女詩集にして未だ曾つてかくの如く整齊した名詩集を示し得た人は蓋し稀有であらう。君は自重してよかつた。今日の榮譽こそ多年の蟄伏の賜である。而も贏ち得たそれは一に君自身の實力に由るものでなくて何であらう。一朝にして擡頭した新進の君の詩が、既に風體として寧ろ老熟の境に庶幾いものにさへ看得る事に於て、世人は如何に瞠目するか。殆どは異數として讃嘆措かざるものがあらう。その手法に於て、姿態に於てあまりに疵瑕無く、あまりに完成された点に於て、或は何等かの嫉視と反感とを惹起することもあらうか。私の些か愁ふるところもここにある。後來君自身も顧みて、青春の放肆と絢爛の才華とを半ば自ら强ひて掣肘した遺憾と寂寥とを或は見返る日があるかも知れぬ。かく言ふは君に對する私自らへの反省である。私の進言が、或は矩を踰えは爲なかつたか。私はそれを恐れるのである。然し美を濟すに完きより如くことはない。而も此集としての完きを逐げた。また修業の發途に於てはかゝる恭謙は此集としての完きを逐げた。また修業の發途に於てはかゝる恭謙と凝念とから已れを堅固に持するは止むを得ないものである。之をなほ敢てする若き行者は少ない。君はよく堪へた。……祝福は君の上にあれ。—北原白秋氏序文の一節—

定價貳圓・送料拾五錢

作者別

萬葉全集

土岐善麿編

作者別に分類され現用假名交り體に書き換へられたる國寶萬葉集の現代的標準版

「萬葉集」は日本最古の古典として、日本歌壇の秘寶として萬人の必讀を要するものであるが、その特異な謂所萬葉假名の不便と煩さと編次の不完全なため、一般的のものとなり難き傾向があるのは遺憾の極みであつた。而して萬葉集の現代的の新整理は古典に對する最も意義ある一大事業として夙に一般の欲求して止まなかつた處であるが、而かもその計畫の餘りに大にして困難なため何人も著手し得なかつたものである。編者土岐氏、敢然として斯の編纂に心をひそめ前後八年の歳月を費し、苦心の下にこの難事業を完成し、茲に新代の新歌集として現代に寄與さるることになつた。全卷七百餘頁長歌、短歌、旋頭歌並に詩文の一切を網羅し盡してある。

定價參圓八拾錢・送料廿三錢

婦人の立場から

三宅やす子著

女性は覺醒すべき時が來てゐる。大きな惱みがその前にある。女性の立場を決定せんとする人は本書を讀め。

女性は娼婦の如き寄生的生活に甘んずべきか。將又一個の人間として生くべきか。ここに近代女性の惱みと矛盾がある。男女平等、自由戀愛の叫びは時代に目醒めんとする若き女性の悲痛なる產聲である。

本書は女流思想界の明星たる著者が、自由なる女性の立場から、家庭及職業等社會萬象の上に放つた深刻なる考案五十有餘篇を收むるものにして、穩健にして著實、常に實生活に即して對象の核心を摑んだ堂々たる陣容は獨り著者に於てのみ見ることが出來る。眞に現代の女性を理解せんとする男性、眞に己れの生くべき道を拓かんとする女性は共に本書に傾聽すべきである。

▲定價壹圓五拾錢・送料拾參錢▼

アルス婦人叢書の言葉

アルス婦人叢書は婦人の生活を内部からも外部からも革新し婦人の使命を全からしめんが爲の寄與である。昔から云ふ、衣ることと食ふこと、とが、住むことの凡てもが、內から要求が目醒めて來て初めて新しい試みさされつゝある。女性は目醒めた。現代に應ずる生活の樣式は日に日に革新される婦人は新時代の文化を吸收して內面的にも外面的にも家庭の意義をよりよく完成することに努めてゐる。われわれは最も時期に適した企畫であると信ずるものと、外よりする內容の題材と目的は異つてあつても、その內よりする問題は最善の用意を以つて編述せられ、生活をよりよき方面へといふ一語を目標として各篇の精神を一貫せしめんとするものである。

家庭で出來る **染色と絞り染** 小逞治著 栗素人の方でも本書によれば珍らしい染物や絞り染が忽ちに出來上ります。口繪や挿畫も澤山入つてゐる。

子供の重い病氣の容體と手當 竹內兵著 子供の種々な病氣の容體やその詳しい手當を細心な注意を以つてかかれた竹內博士苦心の名著です。

日本支那西洋 **趣味の家庭料理** 北原美佐子著 家庭向の料理を說ける絕好無二の好著で、日本、支那、西洋の料理二百種程の拵へ方が詳しく說いてある。

裁縫の急所 佐伯はま渡邊芳苗著 裁縫の口傳秘法を披瀝して急所を說いて餘すところなし。著者も一流、說本書の價値は絕對であります。

定價各冊壹圓貳拾錢・送料壹拾錢

アルス婦人叢書

新しい編物 岸本朝子著 新しい編物について教室で敎ふるよりも懇切に、一々挿畫によつて說いてあり讀めば即座に利用できます。

家庭に必要な **藥の用ひ方** 橋爪惠著 何處の家庭にも必ず常備藥は必要藥品は是々だと指示し衞生に手當に懇切に家庭藥學を說けるものです。

フランス刺繡 金澤靜子著 フランス刺繡とは、どんなものか、どうすればその妙味を得られるか、針の運び方糸の選び方まで詳述す。

子供服の縫ひ方と着せ方 飯島榮治著 子供をより美しくする衣服の縫ひ方と着せ方です。どうすれば身體に附くやうに縫へるか着せられるか。

お化粧と髮の結ひ方 三須裕著 誰でも美くしくなり得る髮の結ひ方とお化粧の秘訣とも云ふべき點ばかりを詳しく述べられてゐる。

現代婦人の手紙 河井醉茗編 現代各名流婦人の手紙を網羅し新時代に呼吸せる若き婦人の手紙はどう書くべきか、生きた文範を示した。

タツティング編物 金澤靜子著 容易くて一寸わかりにくいタツティング編物について一々圖解によつて手に取る樣に說明されてゐる。

定價各冊壹圓貳拾錢・送料壹拾錢

アルス婦人叢書

新しい草花の作り方
堀切参郎著

家庭園藝の著書で四季折々の美しい草花數十種の作り方を極めて平易に又實際的に説かれたものです

硬球軟球テニスの仕方
針重敬喜著

硬球及び軟球の二篇に分ち初歩より作戰の秘術奥義に至る迄極く分り易く説述されたものであります

家庭向の支那料理
北原美佐子著

滋養と美味に富む家庭向の支那料理法を有合せの材料ですぐ應用の出來る樣極めて一般向に説かれた

榮養料理法
一戸伊勢子著

高師の一戸先生が親しくお料理の學術的研究と實際的方面とを細述せられた御臺所の最新知識です。

新しい刺繍圖案
武井武雄著

婦人の凡ての手藝に向く樣にと武井雨伯獨特の輕妙な筆で描かれた全く今迄にない新しい圖案集です

リボン刺繍
周田松枝著

誰にも簡單に出來るリボン刺繍は油繪のやうな美くしいタッチが表れて應用も又廣いものであります

定價各冊壹圓貳拾錢・送料拾壹錢

去年の今日、乃至
今年の今日は、乃至和男の父となる
三、八、一〇

清水